

読解力向上のための指導事例集

平成18年3月

学力向上拠点形成事業

「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」

はじめに

横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センターでは、「学力向上拠点形成事業・文部科学省委嘱『わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム』研究会（国語）読解力向上プログラムに係る『読解力向上のための指導事例集』作成のための委嘱事業」を平成17年度と平成18年度の2年間にわたって行うことになりました。

また、その実践上の具体的な研究実施機関として、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校が中核的に機能し、本委嘱事業を推進していくこととなりました。さらに、文部科学省からの推薦委員及び神奈川県総合教育センター、横浜市教育センター、川崎市総合教育センターからの推薦による委員によって委員会を構成しています。

この事業は、OECD（経済開発機構）が2003年7月に実施した「生徒の学習到達度調査」（PISA調査）の結果を踏まえ、これからの日本の教育の方向性を志向する先導的な研究実践であるとも言えます。

平成16年12月にOECD（経済開発機構）が2003年7月に実施した「生徒の学習到達度調査」（PISA調査）の結果を公表し、その結果、日本の生徒の学力は、「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」「問題解決能力」については上位であったが、「読解力Reading Literacy」の得点がOECD平均程度まで低下をしている状況にあることが判明しました。

このPISA調査の結果を受け、文部科学省では平成16年12月にその対策を行うためにワーキンググループを設置し、PISA調査における「読解力」の考え方を踏まえて、その向上を行うための施策を行いました。この施策に沿って、文部科学省では、平成17年12月に、指針となる『読解力向上プログラム』と『読解力向上に関する指導資料—PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向—』を公表しました。

この二つには、「読解力」の考え方や、改善の具体的な方向性や、それに基づいた能力育成の具体的な指導例が示されています。さらに、具体的な事例をもとに「読解力」を中心としたカリキュラム編成を求めています。このカリキュラム構成は、教科国語にとどまらず、学校教育における全ての教科にわたって行われるべきものでもあります。

この「読解力」に関する学力育成の方向性は、PISA調査で明らかになった学力を、どのように向上させることが出来るか、というこれまでの学力観とは異なった学力育成の方向にあります。そのことは、『読解力向上に関する指導資料』に示されている7つの能力を、学校教育全体を通して育成していくという、「読解力」をこれまでにない学力として提示しています。

「読解力」に基づく新たな学力は、OECDが提起しているこれからの先進諸国において求められる学力でもあります。この学力をこれからの時代の学校教育において、いかに育成していくのか、ということが大きな課題となっています。この課題の解決に向けて、どのような授業を具体的に行えばよいのか、教科国語のみでなく各教科や総合的な学習の時間にどのような授業を行うのか、ということの先導的な事例を提案し、ご紹介いたします。

平成18年3月

学力向上拠点形成事業・文部科学省委嘱「わかる授業実現のための
教員の教科指導力向上プログラム」研究会（国語）読解力向上プロ
グラムに係る「読解力向上のための指導事例集」作成委員会

委員長 高木 展郎

学力向上拠点形成事業・文部科学省委嘱「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」研究会（国語）読解力向上プログラムに係る「読解力向上のための指導事例集」作成のための委嘱事業について

I 「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」の実施について

「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」は、文部科学省初等中等教育局長決定により、以下に示す趣旨と内容とによる調査研究である。

1. 趣 旨

児童生徒の学習意欲や知識・技能を活用する力の育成などの今日的な課題に対応し、教員の実践的な教科指導力の向上を図るため、教育委員会と大学・教育研究団体等との連携・協力による「教科指導力向上プログラム」を開発・実施することにより、「わかる授業」を実現し、「確かな学力」の向上に資することを目的とする。

2. 委嘱内容

本事業においては、

- (1) 教科別の効果的な指導方法及び評価方法等の開発（思考力、表現力、学習意欲などを高める指導方法の開発、ITの活用による効果的な指導方法等により教員の生産性を高める研究など）
- (2) 教科指導力向上のための教員研修プログラムの開発
- (3) 教員養成段階のカリキュラムの充実

等の手法による「教員の教科指導力向上プログラム」の開発や同プログラムの実施を委嘱する。

上記の趣旨と委嘱内容とに基づき、学力向上拠点形成事業・文部科学省委嘱「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」研究会（国語）読解力向上プログラムに係る「読解力向上のための指導事例集」作成のための委嘱事業の委員会を設置することになった。なお、委嘱先は、横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センターである。

II 学力向上拠点形成事業・文部科学省委嘱「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」研究会（国語）読解力向上プログラムに係る「読解力向上のための指導事例集」作成のための委嘱事業の委員会について

1. 委嘱期間

委嘱を受けた日～平成19年3月31日

2. 調査研究のテーマ

「確かな学力」の育成に関わる「読解力」向上のための研究
(小学校・中学校・高等学校 国語科を中心とした全教科ならびに総合的な学習の時間)

3. 調査研究の趣旨

児童・生徒に「確かな学力」を身に付けさせるためには、今日的な課題に対応しながら「わかる授業実現」をしていく必要がある。そうした今日的課題の中でも大きな問題となっているものの一つに、PISA調査における「読解力」の育成がある。

このPISA調査の「読解力」については、文部科学省が平成17年12月に作成した「読解力向上のための指導資料」があり、その有効活用を図っていく必要がある。そこで、本研究においては、昨年度「読解力向上のための指導資料」に基づき作成した「読解力向上のための指導事例集」の活用の仕方と、「読解力」がどのように身に付いているか調査した結果と課題についてまとめた「読解力向上のための指導事例集の活用の仕方と読解力に関する課題」集を作成し、小・中・高等学校の各教科等における「読解力向上」のための授業改善の推進に資するようにする。

4. 調査研究の内容

(1) 実施内容

①「わかる授業実現」推進委員会の設置

「わかる授業実現」のための方策として「読解力向上のための指導事例集の活用の仕方と読解力に関する課題」集作成事業を行う。その実施内容についての企画立案、実践事例の開発調査、事業の成果報告書の内容の検討等事業の実施にあたって必要な事項について審議するため、「わかる授業実現」推進委員会を設置する。

②「読解力向上のための指導事例集の活用の仕方と読解力に関する課題集」作成委員会の実施

文部科学省が提唱する「読解力向上プログラム」の実現を図り、小・中・高等学校の各教科等における「読解力向上」のための授業改善の推進に資するために、「読解力向上のための指導事例集の活用の仕方と読解力に関する課題」集作成委員会を設置して、必要な協議・研究を行う。

③「確かな学力」育成のための先進地調査

「確かな学力」を育成するために先進地における学習指導方法やカリキュラムについての視察調査を実施し、「確かな学力」に関する現場の教員の意識等について調査を行う。

④「読解力向上に関わる学習状況調査問題」の作成と調査

「読解力」を身に付けるための7つの授業改善の方向をもとに、「読解力向上に関わる学習状況調査問題」を作成し、実施した結果をまと

める。そしてその結果をもとに「読解力」を身に付けさせるための「わかる授業実現」のための課題を探る。

- ⑤ 「読解力向上のための指導事例集」の活用を目的とした研究発表会の開催
「読解力向上のための指導事例集」の活用を目的とした研究発表会を開催する。同時に、「読解力向上に関わる学習状況調査問題」による調査結果を発表する。
- ⑥ 「読解力向上のための指導事例集の活用の仕方と読解力に関する課題集」の作成
国語科を中心としながら、全教科にわたる「読解力向上のための指導事例集の活用の仕方と読解力に関する課題」を作成する。

上記「4. 調査研究の内容」の「(1) 実施内容」にしたがって、本年度は、以下の内容について実施した。

- ① 「わかる授業実現」推進委員会の設置
- ② 「読解力向上のための指導事例集の活用の仕方と読解力に関する課題集」作成委員会の実施
- ③ 「確かな学力」育成のための先進地調査
- ④ 「読解力向上に関わる学習状況調査問題」の作成

上記内容を実現するための委員会を以下のように開催した。

平成18年1月23日 第1回

学力向上拠点形成事業・文部科学省委嘱「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」研究会（国語）読解力向上プログラムに係る「読解力向上のための指導事例集」作成委員会

- 1. 趣 旨 : 文部科学省は、平成17年12月に、「読解力向上プログラム」を策定するとともに、同プログラムに示した指導資料を「読解力向上に関する指導資料」として併せて作成した。今後同プログラムを効果的に実現するため、本指導資料に基づき、国語科を中心にした「読解力向上のための指導資料集」を作成し、もって、同プログラムの実現を図るとともに、小・中・高等学校の各教科等における読解力向上のための授業改善の推進に資する。
- 2. 内 容 :
 - (1) PISA型読解力向上を図る授業提案を中心とし、最低必要限の解説や資料を加える。
 - (2) 「読解力向上のための指導資料」の指導例の具体化又は指導例を踏まえた授業実践を工夫する。

- (3) 小・中・高等学校における読解力向上のためのカリキュラム編成のための解説や資料、指導例を作成する。

3. 実施上の留意点

- (1) 思考力、表現力、学習意欲を高める指導方法を開発すること。
特に、学力の質的充実のための取組をどのように行っていくのか。さらに、思考力、表現力、学習意欲を実際にどうやって高めるのか、効果的な指導方を整理する。
- (2) プログラム実施前と実施後の状況の比較など、現状と取組実施後の改善状況の定量的な把握を必ず児童生徒へのアンケート調査を実施すること。
特に、実態について定量的に経年比較を行い、実証的・数量的な研究成果の提供を行うように工夫すること。(平成18年度)
- (3) ITの活用による効果的な指導方法の開発など、教師の生産性を高める研究も実施すること。
例えば、電子黒板の活用により、漢字や計算等の知識・技能の効果的な習得が可能ではないのか。こうしたことも研究する必要がある。
- (4) 教科指導力向上プログラムが空理空論にならないよう工夫すること。

上記委員会が作成した指導例が、本研究集録としてまとめたものである。

この事例集作成に当たっては、次の趣旨に添って内容を記述している。

平成17年12月に文部科学省から出された『読解力向上プログラム』『読解力向上に関する指導資料—PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向—』とによって、これからの時代に学校教育で重視する「読解力」の内容が、具体的に提示された。

特に、『読解力向上に関する指導資料—PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向—』には、読解力を高める以下のような指導例が示されている。

1 指導の改善の方向

(2) 改善の具体的な方向

教科国語を中心としつつ、各教科、総合的な学習の時間等を通じて、次のような方向で、改善の取組を行う必要がある。

テキストを理解・評価しながら読む力を高めること

テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること

様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること。

2 読解力を高める指導例

1の「指導の改善の方向」を踏まえ、指導のねらいをア(ア)～ウ(イ)まで7つに分類

する。その上で、教科国語を中心としつつ、各教科や総合的な学習の時間における指導例を示す。

(1) 指導のねらい

- ア テキストを理解・評価しながら読む力を高めること
 - (ア) 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成
 - (イ) 評価しながら読む能力の育成
 - (ウ) 課題に即応した読む能力の育成
- イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること
 - (ア) テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成
 - (イ) 日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成
- ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること
 - (ア) 多様なテキストに対応した読む能力の育成
 - (イ) 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

本事業では、上記7つに分類した指導例に基づき、実践を行っている。

Ⅲ 次年度に行う予定の事業内容

次年度は、「読解力」が生徒にどのように身についたのか、ということを具体的に評価するため調査を実施する予定である。そのための調査問題の開発と、調査の実施とを行う。また、それまでの成果をもとに公開授業研を含めた研究発表会の実施を行う予定である。

そのために、先述した「4. 調査研究の内容」の「(1) 実施内容」にしたがって、以下の内容について実施する予定である。

- ④ 「読解力向上に関わる学習状況調査問題」による調査の実施
- ⑤ 「読解力向上のための指導事例集」の活用を目的とした研究発表会の開催
- ⑥ 「読解力向上のための指導事例集の活用の仕方と読解力に関する課題集」の作成

読解力向上のための指導事例集		目次	
1	はじめに 委員長 高木 展郎	P. 1	P. 6
2	実践事例		
I	小学校	P. 7	P. 27
II	中学校 国語科	P. 29	P. 61
III	中学校 国語以外の教科	P. 63	P. 99
IV	高等学校	P. 101	P. 115
3	資料「読解力向上に関する指導資料 ～PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向～」より抜粋	P. 117	P. 121
4	委員・執筆者一覧	P. 122	

I 小学校

レビューを書くために説明的文章を読む

ア（ア） 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

1 身に付けたい力

レビューを書くという目的をもって説明的文章を読み、読んだことに対して自分の考えをもつ力を育てる。

2 主たる評価規準

文章を読んでまとめた自分の感じ方や考えと、他の人との考えとは違いがあることに気付いている。

3 単元・題材名

本のレビューを書いて、自分の考えと友達
の考えを比べよう

4 指導のねらい

○目的に応じてテキストを理解する。

本のレビューを書くという明確な目的を設定し、その解決のためにテキストを読み、自分の考えをもつ力を育てたい。

○筆者の表現意図を解釈する。

説明的文章をテキストとして、筆者の表現意図を解釈する力を高めたい。それには、教材文だけを読んで考えるよりも、他の作品と比べて読むことによって、筆者の意図が解釈しやすくなる。3年生という明確な対象に書かれた教材文と、ある程度幅をもたせた対象に向かって書かれた作品を比べて読む。比べることで情報の量や表現の仕方も異なることに気付かせる。同じ筆者が同じテーマで書いた本を比べれば、その違いは一層はっきりする。また、筆者の表現の仕方やなぜこういう

書き方をしたのかという意図にも気付かせていきたい。

5 単元・題材について

レビューを書くという目的のためにテキストを読み、理解していく。レビューづくりは、様々な条件が付けられた活動である。本の内容の紹介や感想、批評などを、百字程度の中で書かなければならない。そのため、伝えたいことを言葉を選んで表現する必要がある。ここに、学習の目的が生まれる。本の内容をキーワードを押さえて短くまとめたり、批評するために読んだりすることに対して、必然性のある学習を行うことができる。

ここでは、レビューに書く自分の考えをもつために、次のようなプロセスで比べ読み活動を行う。

①説明的文章と文学的文章を読み比べて、説明的文章の特徴をつかみ、それについて自分の考えをもつ。

②教材文と関連資料の情報を比べて、筆者の情報選択の意図について自分の考えをもつ。

③関連資料の表現の仕方と教材文を比べて、筆者の表現の仕方について自分の考えをもつ。

6 使用するテキスト

教科書の教材、連続型テキストである説明的文章「すがたをかえる大豆」（光村図書3年生下）を主たるテキストとする。写真と絵だ

けのページもあり、このページと内容とのかかわりを考えることもできる。

また、比べ読みをする対象として、大豆や大豆の加工食品について書かれている関連図書を取り上げる。ここには、文字情報だけでなく、大豆の加工の仕方の説明を図で表しているものもある。それらから必要な情報を取り出す力が要求される。その他、教材文と同じ筆者が同じテーマで書いた作品、出版社のホームページ（レビュー、内容紹介など）、同じ題材（大豆）・テーマ（大豆が姿を変えている）で書かれている文学的文章など多様なテキストから必要な情報を読み解く学習を行う。

7 授業の実際(7時間扱い)

- (1) レビューの例を読み、レビューとは何かの大体をつかむ。
- (2) 教科書の説明的文章を読みレビューを書く。
- (3) レビューの例と自分が書いたレビューを比べ、課題をはっきりさせる。レビューを書くために読むという目的で学習計画を立てる。
- (4) 教科書の説明的文章と文学的文章を比べて読み、自分の感想をもつ。
- (5) 教科書の説明的文章に書かれていることのほかにも大豆の加工食品があるかを資料から探す。
 - ・同じ筆者が同じ題材（大豆）で書いた別の資料から探す。
 - ・大豆について書かれている関連図書から探す。
- (6) 教科書の説明的文章と関連図書の表現の仕方を比べて、自分の考えをもつ。
- (7) レビューを書き、初めに書いたものと比べる。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 学習の初めにレビューを書き、レビューの例と比べる。そうすることによって、

自分は何が書けて、何が書けなかったのか、また、何をどうすればよりよいレビューになるかについて考えるようにする。よりよいレビューを書くために説明的文章を読むという目的意識をもつことができるようにする。

- (2) 既習の説明的文章で作成したレビューのモデルを3例示すようにする。その中に、筆者の表現に対するコメントを載せ、筆者の立場を意識することができるようにする。
- (3) 最後に書いたレビューを友達と読み合い、互いの考えの違いに気付くようにする。
- (4) 学習の初めに、レビューを書くときに役立つ語彙を表にして示し、感想や意見を表現しやすくしておく。

9 まとめ

説明的文章は、形式段落に分け、要点をまとめていくという、これまでのパターン化した学習から意識を変えていく必要がある。この学習を通して、筆者の表現の意図に気付き、「筆者は3年生にも分かる表現にしている。」「筆者は3年生が作れる食品を選んでいる。」「筆者は、大豆はすごいということを伝えたくてこの作品を書いた。」ということを書き、レビューに書くことができた。

レビューを書くという活動は、日常の読書活動とつなげることができる。実際に、校内の図書館に読んだ本のレビューコーナーを設置したり、校内のネットワークに載せたり、出版社のホームページに送ったりするなどの実際の活動場面を設定したい。その際、本を読むときの参考になったかどうかなど、レビューを読んだ人の反応を受け取ることが大切である。読むだけでなく解釈したことを表現する力を育てるために継続することが必要である。

(安富 江理)

筆者になったつもりで資料を選び、説明を書き加える

ア（イ）評価しながら読む能力の育成

1 身に付けたい力

説明的文章に、必要な資料や説明を書き加えることで、評価しながら読む能力を高める。

2 主たる評価規準

より説得力のある文章にするために、テキストの情報の確かさや、表現の妥当性を吟味している。

3 単元・題材

筆者になったつもりで資料を選び、説明を書き加える－わたしだけの「エネルギー消費社会」の本を作ろう－

4 指導のねらい

これまでの説明的文章の指導は、主に内容の正確な理解を目的として行われてきた。内容を肯定的にとらえて読むだけでは、読解力は身に付いていかない。

そこで、筆者の立場に立ってテキストを読むことで、読解力を身に付けさせたい。筆者の立場に立って読むことは、これまでも文章構成や文末表現の工夫等を考えることを通して行われてきた。今回はそれらに加え、次の言語活動を通して評価しながら読む力を身に付けさせたい。

- ・テキストに示されている図やグラフを読み、それらを示した理由とそのことの効果を考える。
- ・教師が提示した複数の資料の中から、筆者の意図がよりよく伝わると考えられるものを選択し、その資料の説明を書く。

5 単元・題材について

「エネルギー消費社会」は、環境問題を扱った内容であり、筆者は、エネルギーの効果的な利用を呼びかけている。

本テキストの特徴は、「世界の気温の変化」「二酸化炭素のう度の増加」（折れ線グラフ）「増えていくごみの量とその内訳」（折れ線グラフと円グラフ）等、グラフなどが多く使われていることである。そのため、内容を理解するには、グラフなどの非連続型テキストを読む必要が生ずる。

また、以下の理由から、他からの資料を取り入れやすいテキストと考える。

- ・もともと原文を再構成した教材であるから、筆者の意図がよりよく伝わると考えられる資料（グラフなど）とその説明を挿入しても、全体の文脈を損なう心配が少ない。
- ・原文が発行されてから20年程経ち、データが古くそのまま使うことができない。
- ・発行時と社会状況が大きく変わっている。

児童は筆者の立場に立ち、図やグラフに着目しながらテキストを読み進める。そして、最後にまとめとして、自分だけの「エネルギー消費社会」の本を完成させる。

出典：「エネルギーをかんがえる－浪費社会をこえて」（高木仁三郎・1986年・岩崎書店）

6 使用するテキスト

- ・「エネルギー消費社会」（説明的文章）
（学校図書6年下）
- ・「製品別古紙利用率」（棒グラフ）「発電別二酸化炭素排出量」（棒グラフ）等のエネ

ルギーが効果的に利用されていることが分かる資料（教師が準備する。）

7 授業の実際（9時間扱い）

(1) 「エネルギー消費社会の本を作ろう」と呼びかけ、興味付けを図る。

(2) 文章構成を考え、大きなまとまりごとに見出しを付ける。

<見出し例1> エネルギーの浪費による影響

<見出し例2> エネルギーの効果的な利用法

<見出し例3> 本当の豊かさへの道

(3) 「<見出し例1> エネルギーの浪費による影響」を読み、ワークシートに記入する。

① 事実と意見、筆者の工夫。

② 図やグラフから読み取れること。

③ さらに必要と考える図やグラフ。（テキストの情報の確かさや、表現の妥当性を吟味する。）

<ワークシート例>

テキスト

事実と意見、筆者の工夫

図やグラフから読み取れること

さらに必要と考える図やグラフ

(4) 「<見出し例2> エネルギーの効果的な利用法」を読む。

・ (3) の①～③に従って学習を進める。

・ 教師がインターネット等で複数の資料を準備しておき、児童たちに提示する。児童は、さらに必要と考えた資料を選び、その資料の解説と解説を書き加えたことの効果を書く。（テキストの情報の確かさや、表現の妥当性を吟味する。）

<準備する資料の例>

・ 太陽熱機器利用における代替エネルギー効果

・ 日本の古紙利用率・回収率推移

資料は、テキストの文脈から「自然エネルギーに関するもの」「ごみのリサイクルに関するもの」の二つの視点から選択するとよい。

(5) 「<見出し例3> 本当の豊かさへの道」について自分の考えをもつ。

・ これまで学習してきたことを振り返り、考えを発表し合う。

・ 作成したワークシートを整理し、本にして仕上げる。

8 この授業を行う際のポイント

(1) 教師が本テキストの原文を読むこと。

教科書は新しいデータで示していること、教材は原文を再構成したものであること等が分かる。これらは、教師の読解力を高めることになる。

(2) 筆者の意図がよりよく伝わるような資料を選択し、その説明を書かせる。そのために必要な資料を教師が準備しておく。

(3) 児童に提示する資料は、以下の理由から「<見出し例2> エネルギーの効果的な利用法」に絞った方がよい。

・ 教師が事前に準備しておく資料が、インターネット等から入手しやすい。

・ 児童が選んだ資料とその説明文を、テキストのどこに挿入するか、その場所を児童自身で見付けやすい。

・ 児童が選んだ資料とその説明文を、テキストのどこに挿入するか、その場所を児童自身で見付けやすい。

9 まとめ

小学校高学年になると、説明的文章に図やグラフ等が挿入されることが多くなるが、それらを意識的に読む児童は少ない。それらから読み取れることは何かを考え、本文とつなげて読む。そして、さらに説得力が増す資料を選び、その説明を書き加える。説明を書き加えたことの効果を考えることを通して、評価しながら読む能力が高まっていくと思われる。（中村 弘志）

「問いかけ」に答えてみよう，みんなに問いかけてみよう

ア（ウ）課題に即応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

昆虫の生態について興味をもち，実際に観察したり，科学図鑑や科学読み物を比べ読みしたりすることで，目的に応じて，説明文を読み抜く力を育てる。

2 主たる評価規準

「問いかけ」の段落と答えの段落の相互関係と，その他の段落の役割を考えながら読んでいる。

3 単元・題材名

昆虫のふしぎ，問いかけ集を作ろう

4 指導のねらい

従来，説明文では，目的意識のないまま，文章の始めに投げかけられる「なぜ，・・・なのでしょう。」の問いかけの答えを，文中から探すような読みをしがちであった。

説明文における問いかけが，読者の興味を惹きつけるためにとられる手法の一つであることを考えれば，本来は，その答えを探すのではなく，「自分ならば，こう問いかける，こう答える」という考えをもって，読み進められるべきであろう。

今回は，対象となる昆虫のカテゴリーに着目し，様々な問いかけを考え出す力を育てたい。

5 単元・題材について

中心教材「ありの行列」は，中学年で出てくる本格的な説明文の一つである。

文章構成としては，問いかけ⇒事例⇒答え⇒補足の順で内容が展開し，段落ごとのまと

まりや相互の関係を捉えるには，分かりやすい展開となっている。

しかし，この「問いかけ」は，筆者が対象をどのようなカテゴリーで捉えているのかによって，当然大きく変わってくる。

例えば，「①本当に，ありは行列をつくっているのか」「②あり以外に行列をつくる生き物はいないのか」「③なぜ，ありは行列をつくるのか」「④ありは，本当に，ものがよく見えないのか」など，数え切れない程の問いかけが生まれてくる。

その中から，「なぜ筆者は，この問いかけを選んだのか。」「自分だったら，どう問いかけるか。」といった，多様な考え方を育てるのに，本教材と他の図書資料の比べ読みは，効果があると考ええる。

6 使用するテキスト

「ありの行列」（光村図書3年）

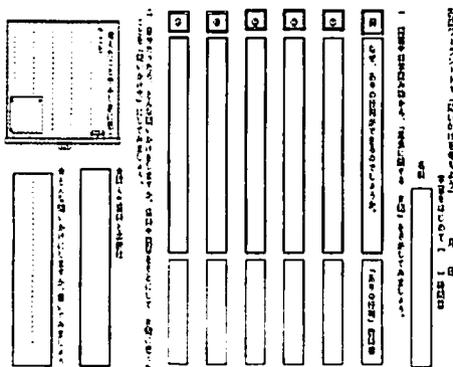
「アリに知恵はあるか？」（偕成社）他
今回，比べ読みに使用した科学読み物は，昆虫の生態に対する記述だけでなく，筆者の疑問にそって内容が展開されている。また，科学絵本は，昆虫を擬人化することで，より親しみやすさを与えている。こうした表現の違いを意識させることが読みを多様化する。

つまり，ひとつの昆虫に対しても，対象のカテゴリーに応じて表現様式は変わり，様々な説明の仕方が可能になることを，児童に示すことができる。自分が何を目的として読もうとしているのか，どのように説明しようとしているのかを明確にすることの重要性を伝えることができるテキストである。

7 授業の実際（9時間扱い）

次	時	主な学習活動
一	1	①花壇にいるアリの様子を撮影したビデオを見て、知っていることを出し合い、整理する。
	2	②「なぜ、ありの行列ができるのでしょうか」と「ありはなぜ行列するのでしょうか」の問いかけの違いについて考え、答えを予想する。
	3	③二つの問いかけの違いに着目し、学習課題を設定する。
二	4	⑤教科書教材「アリの行列」を読み、問いかけと答えを書き抜く。
	5	⑥「クロクサアリのひみつ」を読み、問いかけの答えを考える。
	6	⑦「アリの行列」の段落構成について話し合い、もう一つの読み物の構成も分析する。
	7	⑦「アリの行列」の段落構成について話し合い、もう一つの読み物の構成も分析する。
三	8	⑧その他の科学読み物を読んだり、自分で調べたりして、「昆虫のふしぎ・問いかけ集」を作る。
	9	⑨自分のふしぎを発表する。

- (1) 学習課題設定の際、既習学習の説明文の問いかけの部分を取り上げ、よく見られる手法であることを確認しておく。



〈第三次 調べ学習用ワーク〉

- (2) ありや昆虫に関する科学読み物や図鑑などは、学級文庫にコーナーを設定

しておき、常時、並行読書ができるようにする。

- (3) 段落構成の分析については、問いかけに対して、「どのように答えを導こうとしているのか・どうやって答えの正当性を説明しようとしているのか」に視点を当てるようにする。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 児童の読みの目的が重要である。日常、当たり前のように目にする【ありの生態】について、改めて様々な視点から見つめ直し、その「あり」のことが、読み物によってどのように描かれているのかを探る試みは、児童の興味を喚起する。それだけでなく、児童の読みの目的が明確となり、筆者の手法に対して自分の考えで論ずるきっかけを生むことになるであろう。

- (2) 読み手に問いかける文を考えることで、説明文の構成や筆者の意図を読みとる力を育成することができる。

筆者の伝えたい事柄（主題）が明確になっているのが、説明文である。「その主題を、読み手にいかに理解させるか」をねらいとして、文章は構成されている。

つまり、いかに問いかけるかによって、読みの目的が絞られるのである。その「問いかけ」を考えることは、自己の主張したいことを端的に表す能力の育成にもつながることが期待できる。

9 まとめ

筆者の意図を読み取ることだけをねらって説明文を読んでいては、児童に読みの本質を学ばせることにはならない。重要なことは、何を目的とした段落分析であるのかを、しっかりと児童一人ひとりが理解していることである。こうした学習の積み重ねが、必要な情報を選択する力の育成につながると考える。

(弓場 順枝)

言葉の決まりを調べ、「正しい日本語」を使って話そう

イ（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

1 身に付けたい力

辞典や事典を生かした調査活動を行い、獲得した言語知識を正しく活用することを通して、自分の考えを表現する力を育てる。

2 主たる評価規準

調査活動の成果や結果をもとに、課題に対する自分の考えを、効果的にまとめている。

3 単元・題材名

「正しい日本語」という題でスピーチをする

4 指導のねらい

私たちが、日常生活で常用している言葉や文には、適切でない使い方や意味が曖昧になっているものが多く見られる。そうした言語の意味や活用について疑問を持ち、自分なりに課題解決の方法を探ることは大切である。

ここでは、児童が、聞き取りや図書資料の選択などを通して情報収集し、必要なことを集約した上で、原稿にしていく過程を重視しながら情報活用能力も高めたい。

5 単元・題材について

中核教材「わたしたちの言葉」は、いくつかの事例を紹介しながら、児童に課題を選択させる形式をとった文章構成になっている。

児童が、日常、違和感なく使っている言葉に焦点を当てることで、興味をもたせ、課題選択への意欲を高めることができる。

同様に、課題解決に活用する辞典や事典も、

言語生活を様々な視点から振り返ることができ、忘れがちな「言葉のきまり」を再認識できるような構成になっているものが少くない。

こうした点を生かし、個々にしっかりとした課題を持たせ、調査活動を進めることで、自分の言語生活を見直すだけでなく、他の人たちへも注意を促す取り組みへとつながることが期待できるであろう。

6 使用するテキスト

「わたしたちの言葉」（光村図書6年）

「まちがいだらけの言葉づかい」ポプラ社

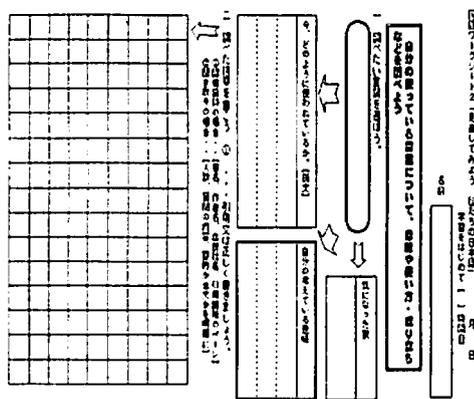
「ことわざ辞典」小学館

ことわざ辞典は、その目的に応じて多様な活用方法が考えられる。特に、意味把握に限らず、例文や類語の類も紹介されている点が、発表原稿の構成を考える上で大変参考になる。また、「まちがいだらけの言葉づかい」は、反対に、間違った言い回しの例を紹介しながら、本来の意味や使い方について説明を加えており、双方を比較しながら読んでいくことで、自分の考えや内容構成が明確になっていくであろう。

その結果として、今まで、どの言葉をどのように使ってきたのかを分析し、正しい使い方へと導くスピーチ原稿が構成されていくと考える。引用についても、必要箇所を絞り、的確に書き抜くことができるようにしていきたい。

7 授業の実際（9時間扱い）

次	時	主な学習活動
一	1	①「間違った言葉づかい」に関するテレビ番組を視聴し、自分の経験を出し合う。
	2	②中核教材「わたしたちの言葉」を例に取り上げ、使われている場面について話し合い、『見直そう、私たちの言葉』という学習課題を立てる。
二	3	③自分が日頃使っている言葉の意味を辞典などで再調査する。
	4	④自分の調べたい言葉を決め、課題と調査方法を考える。
	5	⑤聞き取りや図書資料などで調査活動を行う。（含 課外活動）
	6	⑥調査結果をもとに、調査報告書を作成する。
三	7	⑦報告書をスピーチ原稿に書き換え、シミュレーションをする。
	8	⑧スピーチ原稿を仕上げる。
	9	⑨スピーチ大会を開く。



〈第二次 調査報告下書き用ワーク〉

8 この授業を行う際のポイント

(1) テキスト（情報）として、メディアや漫画なども取り入れる。

児童の言語生活を左右する媒体の一つに、テレビや漫画が考えられる。その中で使用される言葉の意味や正当性を調査する活動は、自身の言語認識を振り返る上でも価値があると考えられる。さらに、調査した言葉の本来の意味や語源を知ることによって、日本語の歴史や外来語と日本文化の関わりなどに関して興味を高めるきっかけにもなることが期待できる。

(2) 調査報告書をスピーチ原稿へ生かす。

調査結果をどのような表現にまとめさせるかは、「身につけさせたい能力は何か」ということと大きく関係してくる。

今回は、読解力の一つとして、児童の引用力・要約力の育成に力点をおいた。それぞれの資料から情報収集した結果を、よりの確にしかもコンパクトに表現させたいと考え、報告書を一枚のリーフレットに作成させることにした。

また、その内容を400字程度のスピーチ原稿に書き換えさせることで、主張が一層明確になるようにしたいと考えた。

9 まとめ

言葉は、生活の中にあふれている。そして、日々変化している。時代が言葉を創り、言葉が時代を反映することも事実であろう。

その一語一語やきまりについて、「何が正しいのか、語源はどこにあるのか、根拠は何か」等を児童自らが課題探究していく活動は、非常に楽しいものとなることが予想できる。

その手だてとして、多くのテキストを準備することが教師の役割とも言える。さらに、いくつかの場面で引用する力や要約する力の育成を繰り返すことにより、テキストを利用して自分の考えを表現する力を伸ばすことができると考える。（弓場 順枝）

他者の読書生活に学ぶ「私の読書生活」

イ（イ）日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

1 身に付けさせたい力

友達、家族、中学生、シニア世代の読書生活を知ることで、自らの読書生活をより豊かに構築する力を高める。

2 主たる評価規準

自分の読書生活を他者とに比較によって、改善しようとしている。

3 単元・題材

「私の読書生活」

4 指導のねらい

読書の指導は、読み聞かせやブックトークなど直接本にふれさせるものや、読書記録や文庫作りなど読書環境に係わるものを年間の活動の中で、随時行っていくことが必要である。

また、4年生になるとメタ言語、即ち自分の言語活動を見つめたり、計画を立てていったりする活動そのものが、言語活動を向上させる要因となる。

本単元では、読書をテーマに身近な人々に係わっていくことで、自分の読書生活の特徴がとらえられ、つかみやすいものになると考えた。

5 単元・題材について

メタ言語、自己評価の能力の伸張は、4年生あたりから急速についてくる。

低学年の認識力から成長し、自他の違いや量的、質的な差異を認識できるようになってくる。

こうした発達上の特質を踏まえて、自らの読書生活を見つめさせることで、子どもの読書生活は豊かになると考える。

6 使用するテキスト

読書アンケート

友達の読書についての作文

7 授業の実際（9時間扱い）

（1）友達の読書生活

以下の子どもの作文を導入とし、各自が読書生活をふりかえるよう単元の流れを知らせる。

「自分の読書生活はどのように変わったか」

一月ごろから私はよく市立図書館へ行くようになりました。いつも三冊ぐらい借りるけど、本当は十冊まで借りられるので、もっと借りたいです。

なぜ、本を読むようになったかという、「読書通帳」が始まったからです。読書通帳を目標にしているので、「あつ読まなきゃ」と思って、ついつい読んでしまうのです。

（中 略）

一日に一回は読むようになりました。今、図書室に「ミステリーランド」というシリーズの「ぼくと未来屋の夏」という本があります。長くて302ページもあつたけど面白くて、私は全部読めました。みんなも、できる人は長い本に挑戦してみてください。「ミステリーランド」をおすすめします。

作者に返事を書くつもりで、各自に読書生活をふりかえらせる。その中で、4月から読んだ本で「好きな本 ベスト5」を選定させる。

（2）読書生活調べの計画

友達だけでなく、身近な人の読書生活を調べ、そのよさを自分の読書生活に取り入れようと投げかける。

子どもから出た身近な人は・家族・中学生・読み聞かせをしているシニアボランティア・他となった。

(3) アンケート作り

身近な人に予め訊ねたいことをアンケートにして、答えてもらうことを伝え、質問項目を考えさせる。

アンケート項目

- 読書する時間と場所
- いい本の見つけ方
- 読んでみて、つまらなかったらどうするか
- 4年生の時の好きな本
- 図書館・本屋・古本屋にどのくらい行くか
- 本と漫画どちらが好きか
- 本の情報交換をしているか
- 読むようになったきっかけ

以上の項目を基本とし、独自質問も設けさせた。

(4) 中学生の読書生活

総合的な学習の時間で職業体験を行う中学生に、アンケートをしてもらい、教室に招き入れた。

「本を読むことが好きではない人にアドバイスをしよう」というテーマで話し合いを行った。簡単な本でもいい本がある。難しい文字があったら人に聞けばいい。本の具体名を挙げてすすめるなど、実感的なアドバイスがあった。

子どもたちは、アンケートから、中学生になると読む時間が少なくなることを読み取った。

子どもたちの話を聞いた中学生に授業のしめくりとして、読書についてのスピーチを頼んだ。

すると、一人の女子中学生が「本は必ず読まなくてはいけないものではないと思う。無理して読むということは、その本がかわいそうだ。みんなには、自分が読みたいものを読みたいときに読んでほしい」というスピーチをした。

これを聞いた子どもたちは、杓子定規な読書すべき論ではなく、いっそう読書への意欲を駆り立てられたように感じた。

(5) 家族の読書生活

家族にもアンケートを依頼し、家の人はどの

ような読書生活を過ごしているかを調べさせた。

教室で、そのアンケート結果を見ながら読書への思いをまとめた。

お母さんが一日に読む時間は40分ぐらいで、ほとんどが電車の中。読んでいるのは小説や賞をとった本だそうです。仕事先では回覧されてくる雑誌などを読むそうです。新聞は15～30分。未来に読みたい本は特になく、ぼくには読みたい本をどんどん読めばと言っていました。4年生の時は「シャーロックホームズ」「小公子」などを読んでいたそうです。(後 略)

ぼくも、読みたい本をどんどん探して読みたいです。

(6) シニア世代の読書生活(2時間)

本校では、休み時間に地域のシニア・ボランティアが図書室で読み聞かせを行っている。

子どもたちも顔見知りであり、時折低学年と一緒に読み聞かせを聞いている。そこで、このシニア世代にもアンケートをとり、さらにディスカッションの場を設定した。

(前 略)シニアの方の話聞いて、一つの質問をしたら、すごく細かくいろいろ話してくれて、親切な人でした。「絵本は友達」と聞いて、へえーそうなんだ、すごい表現だなと思いました。私も本は友達みたいな面白いものだなと思いました。

(7) 私の読書生活(2時間)

これまでの他者からの学びを、これからの自分の読書生活に生かすことをまとめさせる。

8 この授業を行うポイント

アンケート項目を自ら作っていくことによって、答えを読むだけでなく、その理由や背景を知りたくなる学習となった。

9 まとめ

子どもにとってメタ言語として読書生活をふりかえることは思いの外、高度な活動である。しかし、身近な人と係わることが学習の見通しを分かりやすいものとした。(新垣 英一)

読んでいる間に心にひらめいたものを大切にし、その感想を語り本の楽しさを友と共有する。

ウ(ア)多様なテキストに対応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

実生活における子どもの読書活動を一層推進していくために、題名読みや目次読み、そして比べ読みや重ね読みなど、多様なテキストに対応した読む能力の育成を図る。

2 主たる評価規準

自覚的な読みの能力を育成するために、「同じシリーズの本」を読む中で、まとめた自分の感じ方や考え方と他の人との感じ方や考え方とは違いがあることに気付いている。

3 単元・題材名

「本ってこんなに楽しいよ」
～ぼくの(わたしの)エルマー紹介～

4 指導のねらい

知識や技能が生活に生きる力として転移するためには、読書では、場面や段落で区切り詳細な読解をすることばかりではない。多様なテキストとの出会いを大切にし、さまざまな読み方を子どもに獲得させていく必要がある。

例えば、比べ読みや重ね読み、調べ読み、中でも結論から先に読む、目次読み、見出し読み、そして斜め読みなどでは、一冊の本をまるごととらえ摘読していくことの楽しさを子どもたちに味わわせたい。「すじ」とか「どういう人物が描かれているのか」という問いを避け、「休ませ楽しみを得る読書があること」を知らせたい。

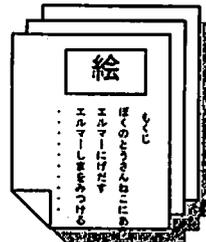
また、一冊の本であってもその人の既有経験・見方・考え方が違うように、感じ方や受

5 単元・題材について

「エルマーのぼうけん」「エルマーとりゅう」「エルマーと16ぴきのりゅう」(福音館)3冊のシリーズを扱う。読書単元の導入では、主人公エルマーやりゅうへの興味、そして学習活動への関心を高めるために、クイズやアニメーション等、ガイダンスの工夫する。

次に、どの子にも読んでいながら心にひらめきがもてるよう「手引き」を準備するとともに、グループを単位として個の言語活動を十分に保障をする。また、グループでの話合いが機能する手立てを講じる。

【目次の重ね読み】



最後に、選択教材(教科書教材のみ・いずれか一冊、数冊など)グループで、クイズ・絵・ペープサート・寸劇などにしての“紹介の会”を通して読書の楽しさを味わう。

学習後もファンタジーへの誘いととも情報(映像・web含)交流、そして個の読書生活につなげていく働きかけを行う。

6 使用するテキスト

テキストの中の文字言語ばかりでなく、表紙のイラストや題名、目次のイラストや文言、テキストの挿絵など、視覚的な非連続型テキストも対象とする。また、冒険地図は、シリーズを重ねて読んでいくことへの興味付けとなり得る。本テキストでは、作者のルス・スタイル・ガネットと挿絵画家ルス・クリスマン・ガネットは親子であり、挿絵とお話を重ねて読むことでそのテーマ性がうかがえたり、読み深めたい視点が見えてきたりするという特性もある。

7 授業の実際 (11 時間扱い)

- (1) これまで読んだ本やテレビ等、主人公やヒーローについて話し合う。シリーズの表紙や目次、冒険地図からさまざまな想像を膨らませる。(全ての子どもに対応できる冊数を準備する。)
- (2) 「エルマー、ライオンに会う」を読み、エルマーのすばらしさ(勇気や知恵)、様子が浮かぶところ等の感想をもち、話し合う。
- (3) エルマーシリーズをもとに、自分の紹介したいエルマーの魅力を求めて個の読みに入る。(十分に時間の保障)
エルマーの勇気(赤色付箋紙) エルマーの知恵(青色付箋紙)、様子が目に浮かぶ(黄色付箋紙)
- (4) 同じ本を選んだグループごとにチームを編成(3~4人ぐらい)統一テーマにするか、個々のテーマにするかは班にまかせる。
- (5) クイズ・寸劇・ポスター的絵・ことば・ペープサート等にして発表の準備をする。
- (6) 「ぼく(わたし)のエルマー紹介の会」を開き、意見交換し合う。

児童A

ぼくは、エルマーの本を読んで、「かれき町」にいるえいゆうは、やはり、りゅうを助けていろいろなぼうけんをした子、エルマーしかないと思います。これから、かれきまち、わかめまち、いろいろなことをえ地図を使ってみようかします。と中でなぞなぞなどもだします。エルマーのみりよくをなぞなぞやえ地図などでさがしてみてください。エルマーのみりよくは、やはりなんといつても頭のよいこと、ちえのことです。

児童B

ぼくは、「エルマーシリーズ」をよんで一番思えたことは、エルマーとりゅうはいつでも友じようをもっているということ。エルマーの友じようのわかるところをペープサートでしようかします。みてください。

- (7) 生活の中にある「ファンタジー」の作品を探す(ハリーポッター・はてしない物語など)、webなどで情報を得る(エルマークイズ等)他の図書の紹介とともに、読書生活計画を立てる。
長期休業の後に読書紹介を行う。

8 この実践を行う際のポイント

いずれも正解を問うのではなく、根拠を話し合うことを大切にして取り組む。

- (1) 題名(表紙)読み
エルマーは見た目どんな男の子で何歳?
お話の内容がよく分かる題名は?
- (2) 目次読み
挿絵と目次で3冊とも同じところは?
話の内容が分かる目次は?
- (3) 表紙・目次・冒険地図合わせ
表紙と目次と冒険地図合わせをしよう。
必ず根拠を付けて説明しよう。
「理由は、~だからです」
- (4) 心のひらめきを得る「手引き」
どの子どもも読む中で心のひらめきをもてるように「手引き」を工夫する。
 - ・ エルマーの勇気
こわいだろう、しんぼうづよいな、わたしだったらにげだしたくなるのに・・・
 - ・ エルマーの知恵・ユーモア
すごくかしこい、よく考えたな、思わずわらいだしてしまいそう
 - ・ その様子が目に浮かぶ
きれいだろうな、かわいだろうな、きもちわるいだろうな、こわいだろうな、つらいだろうな
- (5) 紹介する様式の明確化
どの子ども話したくなるような「話し出し」の手引きを準備する。
 - ・ わたしが紹介する本は「エルマーの〇〇〇〇」です。冒険地図を使ってたいへん好きな場面をお話します。
 - ・ この本を読んでいて思わず笑い出してしまいました。それは、こういう理由からです。
 - ・ 16びきのりゅうの家族を紹介します。女の子は6匹、男の子は7匹、それにボリスとお父さん、お母さんです。
女の子のりゅうの名前は・・・等

9 まとめ

多様なテキストを自覚的に読み、理解し、利用する能力は、実生活を送る上でかせない能力である。(永池 啓子)

調べたことをもとに、討論会で表現する

ウ（イ）自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

1 身に付けたい力

「カラス問題」について調べた多様な資料を、様々な視点、違った立場から多面的に読み取り、討論会の活動を通して、自分の考えを表現する能力を高める。

2 主たる評価規準

図鑑、カラス被害のインターネットサイト情報、インタビュー等聞き取り調査による資料、カラスに荒らされたゴミ捨て場の写真やビデオなど、さまざまな資料を多面的に読み取ることを通して自分の考えをもち、環境討論会の中で、人間とカラスの望ましいかかわり合いについての意見・主張を相手に伝わるように表現している。

3 単元・題材

子ども環境討論会を開こう

4 指導のねらい

身近な環境問題である「カラス被害」を扱うことで、既製の資料だけではなく自分で調査した資料を加え、多様なテキストから必要な情報を読み取っていくとともに、「カラスの行為を許せない」と考える立場、「人間にも原因がある」と考える立場など、自分なりの考え方で意見を表現する力を育てる。

テキストから情報を取り出し、解釈し、熟考し、意見を論ずるという読解プロセスをていねいに扱い、討論会の活動を通して、読んだことをもとに自分の主張を表現する力の向上を目指していきたい。

教科等の内容としては、国語科「共通理解や問題解決、新たな考えを生み出すために互いの意図や考えを積極的に出し合う」ことを重視すると同時に、総合的な学習の時間の「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」こと、理科「生物と環境とを関連付けながら調べ、見いだした問題を多面的に追及する活動を通して、生命を尊重する態度を育てる」ことなどについて横断的に指導する。

5 単元・題材について

カラスや動物など生き物による環境問題は多い。身近な問題を取り上げ、その対策について討論会を行うことは立場や意図を明確にした表現力を伸ばす活動として適している。

調査メモ、写真、文献、図鑑などの情報を読んだことと関連付けて、自分が感じたことや考えたことをわかり易く表現する能力を育てることが大切にし、意見や主張としてまとめ、討論する学習を行う。自分の経験や心情を伝えるだけでなく、被害者の立場、カラス擁護の立場から目的や条件を明確にして主張を交わすことを通して、人間とカラスの共存を考えていくような展開を組み立てたい。

6 使用するテキスト

カラスの生態を示す図鑑、インターネット情報等、紙面による情報のほか、写真やビデオ、聞き取り調査のメモなど、多様なテキストから総合的に読み解く学習を創造する。

7 授業の実際（総合・国語 計8時間扱い）

まちの中の身近な環境問題について知っていることを発表し合い、子ども環境討論会の開催の見通しをもつ。

- (1)まちの中の身近な問題を発表し合い、学習目的、討論会の形式を共通理解する。
- (2)カラス問題をテーマに、資料を収集する方法について考えを出し合い、調査、討論会開催の計画を立てる。

カラスの生態、カラス被害等について調査する。

- (3)図書室、視聴覚室などで、文献、インターネット情報を読み、基礎知識をもつ。
- (4)校外に出て、実際の被害の様子を調査する。
- (5)調べたことをもとに、地域の人々にまちの現状や住民感情などについて聞き取り調査をする。
- (6)調査したことを総合して自分の考えを明確にし、討論会の準備をする。

(7)子ども環境討論会を開く。

カラスの有害な行為を許せるか

●許せない

- ・カラスは、荒らしたごみをそのままにする。
- ・作物も荒らす。
- ・ごみを散らかすので、ごみ収集車の人が苦労している。「生ごみ」が10年前から散らかっている。
- ・ごみ捨て場がなわばりになっていて、人を襲う。
- ・近くに森はあるのに戻らない。
- ・カラスはやはり「害鳥」である。

●許せる

- ・カラスはごみを食べて生きているのだから仕方がない。
- ・ごみをカラスにとられないような袋に入れない人間が悪い。

- ・ごみをあさるだけで殺していいか。カラスは、雛を育てるときしか襲わないはず。
- ・森をこわしたのは人間だ。
- ・人間が森をなくしたのでハトの餌まで取るようになった。
- ・残ったわずかの森にはなわばりがあって町のカラスは戻れない。
- ・ごみを減らせばカラスも荒らさなくなる。

(8)まちのために自分たちができそうなことについて話し合い、活動意欲をもつ。

●まちのためにわたしたちができること

- カラスが餌を取れないようなごみの収集方法を考えよう（金属ネットの使用？）。
- 生ごみの出し方を工夫する。
- （生ごみを減らすため）食べ物を残さない。

8 この授業を行う際のポイント

- (1)多様なテキストから情報を取り出し、自分の主張として表現すること。
 - ・種類の違う資料から得た情報を総合化し、自分の理解を深め、討論会に生かすことのできる読解指導をする。
 - ・自分に必要な情報であるか考え、大切な情報を選んで取り出すように指導する。
 - ・テキストの中の難しい語句で説明された内容も相手(小学生)に分かる言葉で発言できるように指導する。
- (2)立場によって読み取り方が違うことに気づくこと。
 - ・同じ資料を読んでも違う立場の人は情報の受け取り方が違うことに気づき、相手の考えも尊重するように指導する。

9 まとめ

テキスト等から得た情報をもとに考えたことを表現するには、情報を十分理解して自分の言葉で話す必要がある。情報を取り出し、解釈し、熟考し、自分の意見を論ずるという一連の活動を各教科・領域で実践することが大切である。 (鈴木 彰)

二つの立場から多様な資料を読み、討論する。

ア（イ）評価しながら読む能力の育成

1 身に付けたい力

自分の立場から様々な資料を読み、主張に合う資料を選ぶ能力を高める。また、異なる立場から同じ資料を読み、批判的に考える能力を高める。

2 主たる評価規準

自分の意見を論じるために様々な資料を収集し、それら进行评估しながら読んでいる。

3 単元・題材名

我が国の国土の自然などの様子

討論しよう「住もう沖縄、住もう北海道」

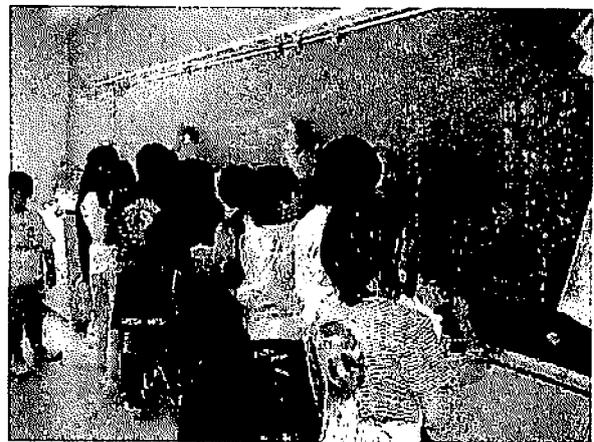
4 指導のねらい

資料の正確性や内容を吟味・検討し、それぞれの立場からその妥当性を評価する力を育てたい。まず、自分の立場から、様々な資料を読み、必要な情報を収集する。ここでは、集めた資料を読み、自分の主張を伝えるために最もよいものはどれかを評価し、選択する力を育成したい。さらに、同じ立場のグループで集まり、主張の根拠として最もふさわしい資料はどれかや、筋道の通った提示の仕方などを検討し、評価しながら読む能力を高めたい。

また、別の立場から、自分が選択した資料を見直す活動を行う。そうすることによって、異なる立場から見ると資料の評価が変わるということに気付かせたい。資料を多面的に見る力もここで育成したい。

5 単元・題材について

気候条件から見て特色のある地域の人々の生活や産業の様子について学習する単元である。「沖縄に住もう」「北海道に住もう」とそれぞれの立場に分かれて調べた資料に基づいて討論をすることを学習活動とする。自分の主張をするために、気候の特色や自然環境への適応の方法、人々の生活や産業の様子などを視点として資料を収集する。それらの資料から必要な情報を取り出し、解釈し、自分の主張に合うものであるかを評価する活動を行う。グラフや地図を読み比べその妥当性について考えることも必要になる。ここでは、その地域に「住みたい」と実感できる資料を根拠として提示することが大切になる。また、立場を変えて、相手の立場からの反論を予想して、それを翻すような資料も準備する必要がある。相手に反論をするためには、沖縄ならば北海道、北海道ならば沖縄のことも、上述した視点から調べなければならなくなる。



グループで論の根拠を整理する

それぞれの事実に対する自分の考えをもつことだけでなく、相手の立場からも多様なテキストを読み、評価する学習活動を展開する。

6 使用するテキスト

教科書や社会科資料集（できるだけ多くの出版社から出されているもの）、沖縄・北海道に関する図書資料、インターネットの情報、旅行会社のガイドブック、パンフレット等から必要な情報を読み取る。特に、ここでは写真やグラフなどを読み取り、解釈し、効果的に活用する。さらに、住んでいる人へのインタビュー、旅行や帰省の際に撮影したビデオなども必要に応じて利用する。

7 授業の実際

- (1)「住もう沖縄」「住もう北海道」というテーマをもとに自分の立場を決める。
- (2)それぞれの立場から自分の主張に必要な資料を集める。
 - ・自分の主張が裏付けされるような資料、根拠となるような資料を集める。（様々な視点から、沖縄または北海道のよさをアピールできるようにする。）
- (3)同じ立場のグループに分かれて話し合い、論の構成を考える。
 - ・自分の主張の根拠となる資料を選ぶ。（主張することに最も適した絵や図、写真、グラフなどを選ぶ。）
 - ・反論が出そうなことを予想し、反論に対しては、「確かに～だ。しかし～だ。」のような形で相手を説得することができる資料を集める。
 - ・プレゼンテーション用のスライドを作成する。
 - ・自分たちの主張の根拠として、不足している資料がないか確かめる。
 - ・提示の仕方を考える。
- (4)資料をもとに討論をする。
 - ・資料の妥当性について評価する。

（同じ資料でも見方を変えれば、反対のことを主張する論の根拠となることに気付く。）

(5)学習の振り返りをする。

8 この授業を行う際のポイント

- (1)まず、自分の主張に必要な資料を収集し、その中から自分の論に最も合うものを選択することが大切になる。次に、同じ立場のグループの中で、それぞれが根拠となる資料を持ち寄り、資料を評価し合う。ここで、立場を変えて見るように助言する。同じ写真やグラフでも立場を変えて見ると、違う主張の根拠となることに気付くことになる。違う立場の視点から考えることによって、さらに自分の論理を組み立てることができる。
- (2)討論は、ただ対立するのではなく、教室内に支持的な雰囲気をつくり、自分の言葉で積極的に話すことができるようにする。
- (3)資料をもとにして、自分の立場からの意見をまとめるだけでなく、異なる立場の資料について解釈する時間を設定し、批判的に読むことができるようにする。

9 まとめ

社会科の授業では、課題を解決させるために、多様なテキストを読み取り、自分の考えをもつという学習が行われている。それを「読解力」の育成という視点から考えると、資料を収集し、解釈し、その中から自分の考えの根拠としてより妥当なものを選択する活動がポイントになるだろう。その選択の中で、資料を評価したり、批判したりする力がより育つのである。立場を明らかにした討論と多様なテキストを評価しながら読むこととを結び付けることは、自分の考えを表現する力の育成にもつながる。

（安富 江理）

新聞記事を読みながら自分の生活をふりかえる

イ（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

1 身に付けさせたい力

12歳の現在について記されている新聞記事を読み、その中心のテーマについて、自分の生活を重ね合わせて、考えをまとめる能力を高める。

2 主たる評価規準

新聞記事について、自分なりのキーワードを見つけながら読み、理解し、そこから自己の在り方について考えを生み出している。

3 単元・題材

「夢のとびらノート」（卒業に向けて取り組んでいる大単元「夢のとびらをたたこう」の一題材という位置付け）

題材には新聞の短期連載記事を用いる。

4 指導のねらい

卒業式までのカウントダウンが始まる3学期は、子どもたちにとっては、精神的にゆれる時期でもある。子どもの内面がゆれるのと同時に、時代の変化もゆさぶりをかけてくる。そこで、本単元では、12歳の今、過去、近い未来を考え、行動することで、一人一人が地に足をつけた学びを達成できると考えた。

大単元「夢のとびらをたたこう」の一環として「夢のとびらノート」に取り組ませることを構想した。冬休みから始まった、新聞の短期連載記事を利用して、12歳の今について、自らの考えをもたせ、成長の一助としたい。

5 単元・題材について

「夢のとびらノート」を学習材とする。体裁はA4横二つ折り版とし、書き上げたものから

大単元のノートに貼り合せ、学習の記録(単元ノート)とする。

本題材では、A4横右側に新聞の記事を配し、左側に、題材の導入活動及び自分の考えを表記させる。

6 使用するテキスト

12歳の今をとらえた新聞短期連載記事(全8回掲載)。本題材で取り上げたテーマは、そのうちの5回分である。「生活アンケートと働く」「食事と栄養」「友達について」「伝え方 パソコン」「家族とテレビゲーム」。

7 授業の実際(6時間扱い)

(1) 「生活アンケートと働く」

アンケート12歳の現在を扱った全国アンケートと同じ項目のアンケートを行う。全員が終了したら、全国の集計とその解説を読ませる。解説のキーワードは「欲張らず」「クール」「平気感覚」。

将来を見据え、働いている子どもの記事を読み、アンケートと合わせて、自分の感想をまとめる。

(2) 「食事と栄養」

新聞連載記事の写真(3人家族の食卓のひとコマ)だけを見せ、何をしているところかを推理させる。推理したことを交流していくと、3人が家族であること、手前の子どもの行為に何かありそうだということが絞り込まれる。

自分にとって、気になる言葉を拾いながら新聞記事を読む。サプリメント、メディアリテラシーなどの解説を聞かせる。

自分の食事と新聞記事を重ね合わせて生まれた考えをまとめる。

(3) 「友達について」

自分が友達に良かれと思ってしていること、しないようにしていること。及び、友達にしてほしいこと、してほしくないことを具体的に箇条書きで記す。

互いの箇条書きを発表し合い、友達について日頃感じていることを共感し合う。

友達関係に悩む2人の事例を扱った新聞記事を読む。読んだことによって生じた違和感や共感を交流する。

自分にとって、友達関係とはどのようなものかをまとめる。

友達について考える	
○話をいっぱいしたい。	×嫌なやつは話さない
○自分がちかちか見えたら	×嫌なやつは話さない
×別にいい人という。	×秘密は守ってほしい
○困った相談するときは人と	×ケンカしてあげたらな、お
考えてくれる。助けてくれる	ちやまてほしい。
○友達には、てくれる。	×いいかげんはやめてほしい。
○コーンとかかきできる。	×おにぎりとかはいいけど、
○明るくて話しやすい。	×いたずら
○はげしく合う。	×冗談
感想	×嫌なやつは話さない
赤糸泉の戸外は、私もま	×感傷い
思います。黒糸泉のこ	×お母
は、まおそろい、た方がい	×無視
し思う。その家かしてもい	×強引
もので使われるかもしれない	×うそ
いから、反音論これでも自分	×反逆かろうせい
か、思う通りにはいえは	×自分勝手
くおれらより、その友達に本当の	
黒のなげねたて、沈黙か流れたら	
か、自分が昨日したことを私は	

(4) 「伝え方 パソコン」

友達に何かを伝えたい時の手段や方法を出し合う。・話す・手紙を書く・メールをする・

以心伝心・他の友達に頼む・電話をかける、他

この中で、自分がよく利用する、好ましく思うものと、あまり利用しない、好ましくないものに分ける。

分けた方法について、具体的な長所と短所、相応しい場面や内容、関係などを考えながら話し合う。

パソコンを利用している小学生についての新聞記事を読み、自分の生活と重ね合わせて考えをまとめる。

(5) 「テレビゲームと家族」

テレビゲームとの関わりを想起し、メモをする。自宅でテレビゲームをしている様子を発表し、交流する。そのことによって、家族の介入(禁止や制限など)が話題となる。

学校へも行かず、ゲームに熱中している少年に関する記事を読む。テレビゲームに熱中していること以外は少年を否定的には報じていない。

少年について討論をする。当初、テレビゲームのやりすぎはよくないが、将来はゲームクリエイターになれるかも知れない。家の手伝いもちゃんとしているから、親に迷惑はかけていない。といった少年に理解を示す意見が続いた。

しかし、一人の子が「この人は、親に迷惑はかけていないが、心配をかけているのでよくない」という意見を述べると、家族と少年が互いに相手をどう思っているかに討論の焦点が移った。

8 この授業を行うポイント

毎回、新聞記事を読むことの前に、自分の生活をテーマに沿ってふりかえったり、想像したりする活動を設定した。そのことによって、読むことの必然性や目的意識が高まった。

さらに、再度ラインを引きながら読むことで、内容を焦点化することができた。

9 まとめ

自分の生活と新聞記事に登場した12歳を重ねることで、子どもたちはそれぞれのテーマについて、考えを深めることができた。

卒業を控えたこの時期に、読むことを生かして、自己のあり方を見つめることができたのである。

また、学習の価値的な面だけでなく、新聞記事を漫然と読むのではなく、自分の考えをもって読んだり、読みながら考えたりするという読むことの一つの方法のよさを味わうことができた。(新垣 英一)

まちの人に思いを伝えることのできる表現力を育てる

ウ（ア）多様なテキストに対応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

まちについての文献、まちについて調べた他学年の資料を読んで、まちを愛する心を持ち、自分が暮らすまちを盛り上げ、高めようとする思いを表現する能力を高める。

2 主たる評価規準

「まちのお店のPR大作戦」の中で、自分が選んだ店のよさ、店の人と共に小学生の視点から考えた新メニューなどのよさについて、不特定多数の読み手に伝わるようにちらしの中に表現している。

3 単元・題材

大倉山と共に生きる～I love Okurayama～

4 指導のねらい

自分が住むまちを調べ、知ることを通して、子どもたちはまちを好きになる。まちの名前の由来や歴史、駅や商店街の特徴とそのよさ、まちで暮らす人々の思いを知ることによって、「自分の住むまちに対して、自分にできることは何か」と考え始める。これが、「小学生の視点から見た商店街マップ作り」「まちのお店のPR大作戦」へとつながっていく。

図書室、資料・教具室などに保管してある生活科、社会科、総合的な学習の時間で、まちについて調べまとめた作品、まちの歴史書、絵や写真、ホームページ、まちで集めた取材メモなどの資料を読み、まちのよさを理解していく。小学生の視点から、まちのよさをちらしの中に表現していく力を育てていく。

「まちのお店のPR大作戦」は、不特定多数の人に配るちらしを作る活動であるため、誰にも理解してもらえる表現でなければならない。また、新聞広告等と同じでは意味がないので、様々な資料を読み解いたことをもとに感じた「小学生の視点から見たまちのよさ」を表現しなければならない。ここに、自分の思いを表現する大きなねらいがあるといえる。

相手・目的・状況・条件・方法等を意識し、限られた紙面の中に表現する力を育てていきたい。

5 単元・題材について

まちでの活動は、たくさんの資料を読み、人とつながりをもつ中で進められていく。

児童・生徒が自ら調べ・まとめ・発表するなどの活動は、テキストから情報を取り出し、解釈し、熟考し、自分の意見を論ずることを内容とする「読解プロセス」と相通ずるものがある。資料を読み解いたこと、人から学んだことなどをもとに自分の考えを深め、自分なりの言葉でまとめ、表現することができるように単元を組み立てることが大切である。

まちの人と協力し、小学生の視点からまち（店）のよさをちらしにまとめ、表現することが活動の完成形となるように、活動を進めていきたい。

6 使用するテキスト

教科等の調べ学習の作品、歴史書、絵、写真、ホームページ、取材メモなど。

7 授業の実際(総合35時間扱い)

- 総合的な学習の時間のテーマ・内容について話し合い、見通しをもつ。

大倉山のまちを知ろう

わたしたちは、大倉山のまちに住んでいます。わたしたちの暮らしに大きな変化が起こらないかぎり、これからも大倉山に住み続けるのです。だから、わたしたちは、大倉山のことをもっと知って、大倉山を愛して、共に生きていきたいと思います。

- まちの名前の由来、まちのシンボルとなっている記念館について調べ、まちの成り立ちを知る。

「大倉山」という地名はない。なぜ、このまちの人はこんなにも「大倉」という言葉を大事にするのかな。

「大倉山記念館の大倉さんが立派だったから尊敬されているにちがいない。大倉さんについて調べにいこう。」「大倉山駅の駅員さんに、なぜこの名になったか直接聞いてみよう。」

- まちの人とつながりをもつ。
 - ・ 駅について調べる。
 - ・ 商店街を調べる。
- まちのために自分ができることについて考え、実行する。

大倉山のまちにかかわろう

「小学生の視点から見たエルム通りマップ作り」「まちのお店の PR 大作戦」に取り組んでみようよ。

「小学生お勧め新メニューを作りたい」とハンバーガーショップの人に言われたから、協力したい。

- まちと共に生きるために、どんな思いをもち続けることが必要か話し合う。

まちと共に生きよう

「大倉山梅まつり」や「太尾太鼓」は、どのように続けられたのだろう。わたしたちが大人になったときは、どうなるのだろう。

まちの行事を引き継いだり、商店街を活性化させ続けたり、これからも元気なまちにし

ていくことは、わたしたちの役目なのではないかな。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 総合的な学習の時間で、学級または個々の課題を解決していく活動の中に、読解力の育成を位置づけること。

- ・ たくさんの資料の中から自分に必要なものを選び、総合的に読み解いていく力を身に付けることができるように指導する。
- ・ 読み解いたことを基に、自分の表したいことをキャッチコピーのような短い言葉なども活用しながら、表現できるように指導する。
- ・ 体験活動等を通じて芽生えた課題意識を基にして、情報を自分の知識・技能と結び付けて考えるように指導する。

- (2) 各教科と関連させた取組をすること。

- ・ 国語科「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」、あるいは言語事項の取り出し指導、社会科の歴史など、他教科と関連した学習の進行を計画する。

9 まとめ

読んだこと、調べたことをそのまま書くのではなく、読み解いたことを自分に取り入れて小学生の視点から表現できるようにすること、まちを歩く誰が読んでも伝わるように表現できるようにすることが大切な学びとなる。

様々な資料や自らの調査の中から、まちのよさが感じられる内容を精査し、相手・目的・状況・条件・方法等を意識しながら、自分なりの意見を明確にしてPRの紙面を作り上げていくことは、教室での学びのみならず、日常生活に生きる学びとして、身に付いていこう。(鈴木 彰)

Ⅱ 中学校 国語科

筆者の表現意図を考えながら文学作品を読む

ア（ア）目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

1 身に付けたい力

物語の展開のしたかを中心に読むことから、表現意図を解釈する力を高める。

2 主たる評価規準

作者の意図を考えながらテキストに現れている表現や構成を読んでいる。

3 単元・題材

単元：「物語の書かれ方を読む」

4 指導のねらい

文学作品としての物語を読むとき、読者はその語り手の視点から物語の世界を垣間見ることになる。そして登場人物の感じたことや考えたことは、そのまま物語の世界での「真実」として語られる。その語りを肯定的に受けとめることによって、読者は感情の動きを共有し、物語から感動を得ることができる。

しかし、その物語は作者によって作り出された世界であり、作者はあるテーマを伝えようとする「意図」を持ってその世界を形作っている。それに気づくことにより、これまで気付かなかった作品世界があることを知り、よりテキストへの深い理解が生まれてくる。

今回は、東京書籍「新しい国語 1」に収められている「そこに僕はいた」を題材に、その物語の世界がどのように描かれているかを分析し、作者の意図について考える学習に取り組んだ。

この学習は、「自らの目的に応じてテキストの意味や構成を理解したり、表現の細部が全体においてどのような役割を果たしている

かなど、筆者の表現意図を解釈する力を高める」ことをねらいとしている。特に作品全体の構成と表現のされ方に焦点を当てて読むことにより、どのように「読まされている」かを実感させることに重点を置いた。

5 単元・題材について

今回の学習は、一人称の語りによって進められる文学作品を題材として選んだ。生徒が語り手の視点を借りて物語の世界に入りやすいからである。そして、語り手によってどのように世界が切り取られ、どのように描かれているかについて考えることにより、生徒自身が「どのように読まされているか」に気付くことを目標とし、「物語の作られ方を読む」という単元を設定した。

題材として「そこに僕はいた」を選んだ理由としては、まず、1年生の教材として教科書に掲載されていることが挙げられる。従来の「読解力」を育成する授業をもとに、PISA型の「読解力」へと視点を広げて行く意味でもわかりやすいからである。次に、この作品が、「僕」の語る一人称の形で書かれていることが挙げられる。作品の物語世界を生徒自身が語り手の視点を借りて主観的、肯定的に味わい、その後に視点から離れて読み直す作業を効果的に行いやすいからである。

6 使用するテキスト

「そこに僕はいた」辻一成（東京書籍1年）

今回取り上げたテキストは、作者である辻一成の小学校から高等学校までの出来事をつ

づった十八篇のエッセイで構成されている作品集の中的一篇である。PISA 調査における「読解力」で扱われるテキストとしては「連続型テキスト」に分類される。

物語を語っているのは「僕」であり、エッセイという枠で考えれば、それは作者辻一成として読むことができる。

中心となる話題は小学校3年生くらいの頃に一緒に遊んだ「あーちゃん」と呼ばれる少年の思い出である。「右足の付け根から先が義足」である「あーちゃん」と過ごした時間の中での「僕」の変化が描かれている。描かれている内容は、いくつかの出来事を経る中で「僕」と「あーちゃん」の心が通い合い、「あーちゃん」を理解するまでが描かれているように読むことができる。

しかし、実際には、作品中では「あーちゃん」が「僕」をどう見ていたかについては語られてはいない。「あーちゃん」と過ごした時間の中で「僕」がどのように変わっていったのかが「僕」の視点を通して語られているだけである。

二人の心が通い合ったように読めるのは、作中で「僕」によって語られる出来事の構成のされ方と、その出来事を通して「僕」が感じたことの描かれ方のためである。授業の中ではテキストを考えながら読むことで、具体的にその点に生徒が気付くことができるように心がけた。

7 授業の実際（4時間扱い）

- (1) 作品全体を通して読み、時間の経過、場面の展開、登場人物の関係について整理する。
- (2) 作者が伝えようとしたテーマについて考えを述べ、そのテーマを伝えるためにどのような工夫がされているかを、具体的な作品の書かれ方から考える。
 - ・「あーちゃん」に対しての「僕」の気持ちの変化。

- ・物語を構成するエピソードを取り上げた作者の意図。
- ・一つ一つの表現についての熟考。

例)「本当に自然に手を差し出し」た「僕」に「あーちゃん」の手が「ごく自然に差し出されていた」という表現は、本当に二人の心の通い合いを描いていると考えられるか。

- (3) テキストに現れた具体的な表現や構成を挙げながら、筆者の工夫について確認する。
- (4) 確認した点を意識してテキストを読み返し、文学作品の書かれ方について考える。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) まず初めに、作品を肯定的に読ませることで、その作品世界を理解させる。
- (2) 課題を与えることで、新たな視点で再度テキストを読ませる。
- (3) テキストに書かれていることを踏まえて、作者の意図を読み解いて行く。

9 まとめ

文学作品を作者の意図を考えるという視点で読んだ経験のない大部分の生徒には、とても新鮮であったことが授業の意見交換の様子からうかがえた。「僕」の視点でのみ語られていることに早くから気づき、「僕」と「あーちゃん」の心の通い合いを疑った生徒は、作者の意図した物語世界から離れられない生徒とまっこうから対立した。そして、テキストに現れた具体的な表現を挙げながら意見交換をすすめていく中で、自分が受けとめた物語世界とは違う新たな解釈が存在することに気が付いていった。

ただ物語を読むのではなく、「なぜそう書かれたのか」を意識して読むという視点を持たせることで、「読解力」の育成を意識した授業になる。(高橋 励)

新聞の「見出し」を検証しよう

ア(イ)評価しながら読む能力の育成

1 身に付けたい力

メディアが形作る「現実」を批判的(クリティカル)に読み取る力を高める。

2 主たる評価規準

事実と書き手の意見・評価とを読み分け、同一情報(事実)に基づく異なる表現を基に、その表現者の意図を考えたり、事実と表現の妥当性を評価しながら読んでいる。

3 単元・題材

新聞の「見出し」を検証しよう

4 指導のねらい

現代社会は、新聞・放送・インターネット等多様な媒体による情報化の社会である。こうした情報化社会においては、膨大な情報を速やかに処理・判断する力、必要な情報と必要でない情報を判断する力、多くの必要な情報の中から本質をつかみ取る力等が必要であろう。そして、こうした大量情報が加工情報である以上、常にその事実と意見の区別や意見・主張の妥当性への吟味・判断が、受け手には常に必要になってくる。その際の手立ての一つが「読み比べ」であろう。

生徒たちはウェブサイトの情報に関しては、「誰がどのような視点で作ったかわからない」という観点から、今日「読み比べ」や吟味・検証の必要性は実感しつつある。一方、マスメディアが送る情報に対しては、そのマスメディアたるゆえの信頼性において、吟味・検証する視点は持たない。あるいは、マスメディアの情報も加工情報であるという意識すら薄いのが現実である。

マスメディアの情報もやはり加工情報で

ある。「締め切り」という時間制約、紙面・放送時間等の情報量的制約、編集方針等により、同じ事実や情報源を基にしても、扱い方の異なりや記事内容が異なる。そして、表現者(編集者等)の意図の異なりを端的に表しているのが、紙面の扱いであったり、「見出し」であろう。

そこで、本單元では、

- ①マスメディアの情報も加工情報であることに気付く(表現者の意図やねらいが表現に表れていることに気付く)。
- ②情報源と考えられる事実(表現)や他紙の表現との「読み比べ」を通して、それぞれの記事・見出し(テキスト)の内容や表現を吟味・検討したり、その妥当性、適性を評価する。

ことをねらいに、学習活動を考えた。

5 単元・題材について

マスメディアの情報は個々の取材に基づいて行われる。それゆえに、紙面(情報)の異なりが独自の取材の異なりによることも少なくない。それゆえに、題材として取り上げるテキストの要件は、

- ①独自取材に基づく事実が極めて少ないと考えられる「発表」や「数値データ」等による記事及び見出し
 - ②「発表」や「数値データ」という同一情報源を基にしながらも、表現者(編集者等)の意図の差異が見出しに評価語として表れている記事及び見出し
- である。

具体的には、政府発表等に基づく記事であり、元の情報源(発表内容)をウェブ検索等で入手可能な記事(見出し)や、選挙結果等の数値データに基づく記事(見出し)等が考えられる。

6 使用するテキスト

(1) 第1時・第2時で使用するテキスト

- ①朝日新聞：平成17年2月16日朝刊
- ②産経新聞：平成17年2月16日朝刊
- ③日本経済新聞：平成17年2月15日夕刊・平成17年2月16日朝刊
- ④毎日新聞：平成17年2月16日朝刊
- ⑤読売新聞：平成17年2月16日朝刊
- ⑥地方新聞(京都新聞)：平成17年2月15日夕刊
- ⑦中央教育審議会総会第47回における文部科学大臣あいさつ

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/001/05021501/001.htm

(2) 第3時で使用するテキスト

上記6紙の平成16年7月12日付朝刊(第20回参議院選関連記事)

7 授業の実際(3時間扱い)

- (1)各紙の見出しを読み比べ、その違いを確認し、表現の違いから受ける印象の違いを考え、どのような事実・話に基づく記事かを想像してまとめる。
- (2)情報源となったと思われる「あいさつ」を読み、自分の印象や想像との同一点や差異を確認し、各紙の内容や表現の妥当性等を評価する。
- (3)表現には、事実に対する評価語等の表現の差異に、表現者の伝えたい意図やねらいが表れていることを確認する。

8 この授業を行う際のポイント

同一情報源を元にしてしていると思われる記事(見出し)においても、新聞各紙によりその「見出し」や「記事内容」が異なっている点をまず生徒と確認したい。各紙の紙面には、「ゆとり教育 秋までに全面見直し

文科相中教審に報告要請 指導要領 06年度にも改訂「ゆとり教育見直しを 中教審総会 文科相要求」「ゆとり教育全面見直し 文科相中教審に審議要請へ」「ゆとり教育見直し 今秋までに方向性 中教審、授業時間増を検討」「ゆとり教育見直しへ 中教審総会 中山文科相『授業時間

増を』」「ゆとり教育見直し 秋までに方向付け 中教審に文科相要請 2000年度にも改正着手」「『ゆとり教育脱却を』文科相中教審に要請へ」等の見出しが紙面に掲げられている。そして、第1時では、それぞれの表現の差異により、①「見出しにより、受け手(読み手)がどのような印象の違いを持つか」、②「文科相は中央審議会で、どのようなことを話し、要請したのか」を見出しから想像してまとめさせる。さらに第2時では、中教審での文科相の「あいさつ」を読み、自分の想像との一致や違いを確認し、「あいさつ」本文との比較から、各紙の「見出し」の内容や表現の妥当性等に対する自分の考え(評価)を持たせる。

なお、そうした際も文科省のホームページに挙げられている「あいさつ」も実際に総会でなされた「あいさつ」とは異なる加工情報である可能性や他の取材も加えた記事である可能性の余地は踏まえておく。

第3時では、何を一番大きな「横見出し」にし、どの順序で表現しているかから表現者の意図を考えたり、「敗北」「伸びず」「改選割れ」「不振」「躍進」「大躍進」等の同じ事実に対する評価語の差異から受ける印象の違いを考えさせたりする。その際にも、締め切り時間の差異から事実となる議席数の異なりも考えられるので、いつのデータに基づく表現かは確認して意見を持たせるようにする。

9 まとめ

表現は事実を写し取ろうとする記録でも、何を記述するのかという点に表現者の考えが反映されている。まして、選材、要約、デフォルメ等の編集を伴うものであればなおさらである。「評価語」は表現者の考えの反映であり、読み手はその表現に接し、表現者の考えと対話し、自分の考えを深めていく。「事実」と「評価語」をキーワードにする読みは、古典を含む随筆・評論等の学習でも意識したい。何を「あはれ」と感じ、何を「をかし」と表現しているのか等を確認する学習である。(今村 高治)

対象と目的を明確にした「お薦め本パンフレット」を作る

ア（ウ）課題に即応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

対象と目的に応じた文章を意識し、読んで解釈した内容を対象に訴えかける表現で書いて説明する力を高める。

2 主たる評価規準

「お薦め本パンフレット」選びの条件を満たした本を自分の読書履歴や図書室の本を参考にして進んで選び、目的や対象、構成を意識して条件に即した文章を書いている。

3 単元・題材

新入生に贈る！

「お薦め本パンフレット」を作ろう

（参考：三省堂）

4 指導のねらい

この学習で身に付けさせたい力は、提示された課題に即応し、自らの目的に合わせて分析的にテキストを読み、表現する能力である。自分で選んだ本がテーマと結びついているか、理解し、解釈した内容を、短い文章スタイルでまとめていくパンフレットという形式の中で表す読み方が必要になってくる。また、その際どんな相手に何を伝えるか、というこの言語活動の明確な目的意識も大切であろう。学習者の実態や進歩の状況に着目しながら、学習者一人ひとりの言語活動に対する意識を育てていくとともに、テーマと関連付け、整理し、既に身に付けた知識を使いこなしていく力を育てたい。

5 単元・題材について

この単元は、教科書掲載の「学校案内パンフレットの作成しよう」の展開を参考にし、図書紹介に焦点を当てた題材である。1年生ではこれまでの学びとして、1枚の葉書にイラスト入りで書き表す「読書郵便」や、簡単なスピーチの中での読書紹介を行ってきた。中学1年終了期という発達段階を意識し、新入生に伝えるという具体的な目的意識をもって、短い形式のパンフレットに書き表すプロセスを、「課題に即応した読む能力の育成」という視点からとらえてみる。

具体的には次のようなプロセスになる。

- ① 読書課題を知る
- ② 必要な情報に照らした本の選択
- ③ 課題に沿った熟考
- ④ 活用する、表現する

《パンフレットの書式・作成のための条件》

- ・100～150字程度で1冊を紹介する。
- ・読んでみたいと思わせる「キャッチコピー」を表題として入れる。
- ・あらすじのみではなく、選んだジャンルとの関連性についてふれる。
- ・対象（新入生）に向けた語彙を意識する。
- ・その他、関連するイラスト等を入れる。

「お薦め本パンフレット」を作成するという課題選択からの読書活動を通して、理解する読み方からより課題や目的に応じた表現する読み方へつなげることができると思う。

6 使用するテキスト

ここでは現在使用している教科書に掲載されている参考図書資料の他に、図書室に並ぶ本などが挙げられる。

- ・教科書等に掲載されるさまざまな「パンフレット」の紹介。過去の生徒作品の例。
- ・各教科書資料編の読み物
- ・図書室の本
(新刊本、絵本、授業で扱った作品に関連する本、図鑑、写真集、詩集なども取りあげるとよい。)

7 授業の実際(6時間扱い)

- (1)「お薦め本パンフレット」の学習内容を知る。
- (2)「お薦めジャンル一覧」の中から、自分の興味・関心に合うテーマに沿って本を探す。
- (3)共通するジャンルを選んだ者で、小グループを構成する。(1グループ4, 5人)
- (4)小グループの中で、それぞれが選んだ本がジャンルに沿ったものか検討し、パンフレットの概要を考える。
- (5)薦める理由、内容を明らかにして、パンフレットを作成する。
- (6)作成したパンフレットをもとに気付いたことを他のグループと相互交流を図る。

『お薦め本、ジャンルの例』

- ・元気になる時に読む本
- ・笑いたい時に読む本
- ・物知りになりたい時の本
- ・生きることや平和を考えたい時の本
- ・何かに感動したい時の本
- ・空想、ファンタジーの世界に浸りたい時に読む本
- ・やさしい気持ちになりたい時の本
- ・歴史や伝統とじっくり向き合う時の本など

8 授業を行う際のポイント

この授業では、学習者の興味・関心に合うジャンルの本を選択しながらも、パンフレットの受け手という対象を想定し、短い文章で、しかも限られたスペースに的確に表していく過程を大切にしたい。学習内容の理解や考えの構築までのプロセスに応じた指導を行うことが肝要であろう。課題とテキストの関連性を活用する学習のために、次の点に留意したい。

- (1)個人の興味や関心に合わせて選択できる課題を用意する。
→これまでの学びの連続性から考える。
- (2)一人ひとりが選択した課題にじっくり取り組ませる。
- (3)パンフレットの概要や字数、「読んでみたい」と思わせる表現例を示し、パンフレット完成までの条件を明らかにする。
- (4)小グループの交流を活性化させ、個人の気付きに結びつける。

9 まとめ

書かれている内容を整理し、ワークシートに答えを記入するなどの学習には慣れているが、目的に沿った課題を選択し、課題との関連性を見だし、自分の思いを表現していくためには、読むための目的や知識を生活に生かしていく学習を意図的に単元の中に組み入れていくことが肝要である。目的に沿った本を選び、本のあらすじにとどまらず、自分が薦める理由と、対象を明らかにすること(何をどのように伝えたいのか)、またそれが読み手(情報の受け手)にとってふさわしいものかどうかを、検証していくことが、これから求められる読解力、表現力の育成の基礎につながっていくのではないと思われる。

(竹下 恭子)

複数のアンケートの結果をグラフで表し、レポートを書く。

ウ（ア）多様なテキストに対応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

複数のグラフの情報を読み取り、推論を立て、情報を関連づけ、論理的に組み立て、結論を導き出し、わかりやすく表現する力。

2 主たる評価規準

- ・アンケート調査の結果をグラフで効果的に表現することができる。
- ・複数のグラフの情報を関連づけ推測したことをグラフから読み取ったデータを根拠として示しながら、論理的な文章で表現できる。

3 単元・題材

「21世紀の中学生のメディア状況」

アンケート調査の結果から読み解き、レポートを書く。

4 指導のねらい

非連続型テキストの読解において求められるのは、個別に提示される情報を結びつけ、文脈をつなげて文章（連続型テキスト）で表現する力である。

本時ではまず、生徒にアンケート調査をクラスの中で行わせ、その集計結果をグラフで表現させ、非連続型テキストの特性を理解させる。そして、他のグループが作成したグラフと共に、分析させ、そこから読み取ることができる内容から、一つの推論を立てさせる。それを、グラフのデータを根拠として活用し、論理的に立証させていくのである。

この活動を通して、非連続型テキストの読

解の仕方を理解させ、論理的に自分の考えを表現する力を養っていきたい。

5 単元・題材について

本実践では生徒自身が関心を持って取り組むことができる題材として、自分たちの日常生活におけるメディアとの関わりを振り返るアンケート調査を題材とする。

中学生にとって身近なメディアはテレビ、携帯電話、インターネット、ラジオ、雑誌などである。これらのメディアを「どんな時に、どれくらい活用しているのか」、「どんな情報を期待し、また、活用しているのか」、「メディアを活用する際の家庭でのルール」など質問をたてさせる。

集計結果をグラフにし、全員で結果を共有する。レポートでは一つ一つの結果を並列式に書き連ねるのではなく、二つから三つのグラフのデータを重ね合わせ、仮のクロス集計を行って、推論を立てさせていくとよい。レポートのテーマが「21世紀の中学生のメディア状況」であることをしっかり押さえ、傾向が浮かび上がるように考えさせていきたい。

6 使用するテキスト

生徒が作ったアンケート質問用紙とその集計結果をパワーポイントでグラフで表現したものを使用する。

7 授業の実際（4時間扱い）

- (1) 新聞などのグラフを示し、記事の内容を分析し、データの読み取り方と文章表

現の技法を知る。

班ごとにアンケートを作成し、クラスで実施する。

- (2) 前時のアンケート結果をパワーポイントで集計し、グラフで表現する。
- (3) 各班のデータを見比べ、「今の中学生の傾向」についてレポートを書く。
- (4) 互いのレポートを発表し合う。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 調査対象は級友とし、集計に時間をかけないためにも学級単位で行うとよい。グループ数は6つから8つが適当であろう。
- (2) アンケートの質問項目を立てるときに、レポートのテーマに即したものであることや集計をしやすいように答は記号選択方式で自由記述を避けるようにすることを指導しておきたい。また、それぞれのグループで内容が重ならないように、グループ発表を行い、互いの情報を確認させておくとよい。
- (3) 第2時で集計結果をグラフにするときに、棒グラフ、円グラフなど、どのような形式で表現するとアンケート結果をより分かりやすく示すことができるかを考えたい。

9 まとめ

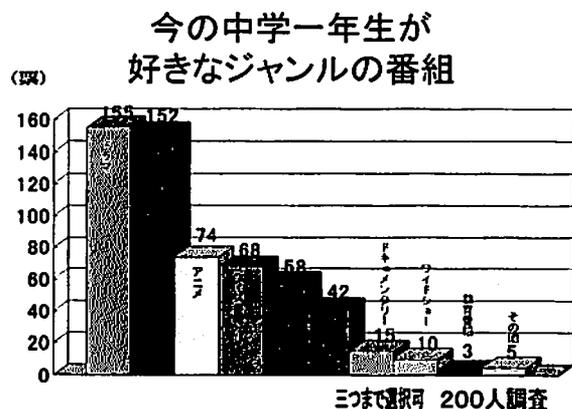
本実践では「中学生のテレビとのつきあい方」を主軸に据えて、アンケートを学年で実施した。

ランキングで示したい結果は棒グラフで、傾向をパーセンテージで印象づけたいものは円グラフで表現するように指導した。パワーポイントでは集計結果を打ち込めば、クリック一つで様々なグラフのデザインをすぐに表示できるので、幾通りか比較して考えさせることができた。また、色の配置によっても印象が変わってくることを示唆し、色彩構成も考え

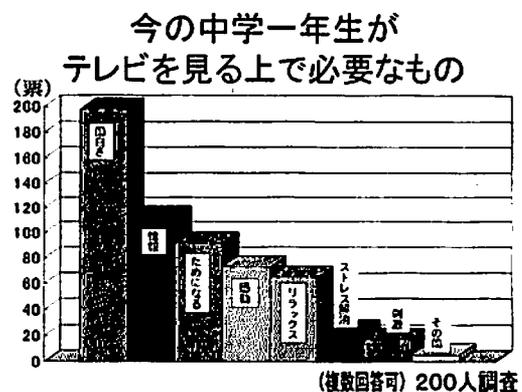
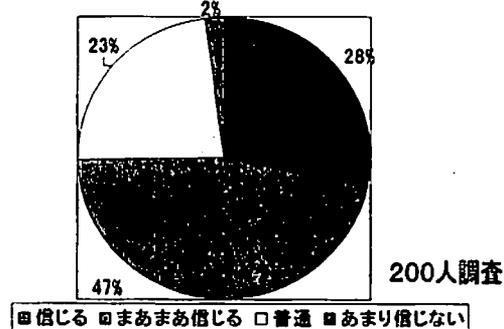
させた。

以下の集計結果から、「テレビに情報を期待する割にはニュース番組を見る人が少ないことから、ドラマやバラエティ番組の内容も情報と捉えている傾向があるかもしれない。また、それらの情報をほとんど鵜呑みにして信じているようだ」と読み解くことができていた。自らの知識や経験に照らし合わせて、考えることができる題材だけに、意欲を持って取り組むことができた。

(中村 純子)



今の中学一年生がテレビの情報をもどれくらい信じているか



教科書編集者の意図を読む

ア（ア）目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

1 身に付けたい力

テキスト（教科書）編集者の意図を解釈する能力を高める。

2 主たる評価規準

教科書編集者の意図を解釈し、登場人物の立場や心情を読みとっている。

3 単元・題材

単元：古典を楽しむ

題材：①「平家物語 那須与一」（平成14年版 東京書籍）

②「扇的 『平家物語』から」（平成14年版 光村図書）

4 指導のねらい

この単元では、「平家物語」の「扇的」を、クラス全体で群読するという表現活動を組み中で、「読解力」の視点を織り込んでみた。

群読の指導について高橋俊三氏は次のように述べている。「群読をするためには、文脈を、どこで読み分かつか、その部分を誰（と誰）が読み担当かをきめるための話し合いが必要となる。その決定は、作品の内容と文体の必然性によってなされることになるから、その話し合いは、当然、作品（教材）解釈の紹介のし合い、説得のし合いである。子どもたちは、この話し合いをとおして、他者の読みに触れ、自身の読みを深める。『学び合い』が生まれる。」（注1）高橋氏の指摘の通り、群読ではそれを作りあげる過程における「話し合い」、すなわち個々の生徒の解釈の交流

が重要である。

本校では東京書籍の教科書を使っている。光村版の「扇的」と比較してみると、東京書籍版の教科書には、以下の部分がないことが一読してわかる。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革をどしの鎧着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。

（中略）

「あ、射たり。」

と言ふ人もあり、また、

「情けなし。」

と言ふ者もあり。

この部分があるかないかで、与一の間像は大きく変わってくる。上記の部分が省略されている東京書籍版では、弓の名手としての英雄的な与一の姿が浮かび上がってくるのに対し、省略されていない光村版では、冷酷で非情な武士の一人としての与一の姿が浮かび上がってくるのである。ここに着目しようと考えたのである。群読のプランを作る話し合いの中で二つのテキストを示し、教科書編集者の意図を読み解く段階をおくことによって、「扇的」の読みを深めることをねらった。

これは、文部科学省が「読解力」の向上に関して、指導の改善の方向として示している項目のア（ア）、「自らの目的に応じてテキストの意味や構成を理解したり、表現の細部

が全体においてどのような役割を果たしているのかなど、筆者の表現意図を解釈したりする力を高める必要がある。」と一致していると考え。

5 単元・題材について

「読解力」を意識した授業を構想するにあたって、西辻正副氏は「学習指導を『読解力』という視点からとらえなおしてみる」(注2)ことの重要性を述べている。これを受けて本校では、「全く新たな視点として『読解力』を教科の指導に取り入れるというのではなく、これまでの指導を意識してカリキュラムを見直すことで、『読解力』育成への具体的対応を図ることがポイントになる」(注3)と考えている。

このような意味で、今回の学習は、従来取り組んできた群読の手法を生かした古典学習の指導の中に、一部「読解力」を意識した取り組みを入れたものであるとあってよいものである。(後述「7 授業の実際」の第2時が「読解力」を意識した部分にあたる。)

6 使用するテキスト

今回取り上げたテキストは二つの教科書に掲載されている「連続型テキスト」である。一方の教科書で一部が省略されていることに着目することで、教科書編集者の意図に気づき、主人公の立場や心情に対する「読み」が大きく変わることに気づかせたい。

7 授業の実際(4時間扱い)

- (1) ガイダンスを聞き、この単元における自分の学習目標を立てる。東京書籍版「平家物語 那須与一」の原文を繰り返して音読する。現代語訳を読み、大まかな内容をつかむ。
- (2) 光村版「扇の的 『平家物語』 から」を読み、東京書籍版との相違点に気づく。二つの教科書から受ける与一の人間像の

違いや教科書編集者の意図について意見交換をする。

- (3) 光村版「扇の的 『平家物語』 から」を用いて群読のプランについて話し合う。
- (4) 群読プランに修正を加えながら群読練習をする。単元をふり返る。



【源平に分かれての群読練習】

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 『学習指導要領』にある、古典の指導に関する「配慮事項」をおさえること。
- (2) その上で、「読解力」向上の視点を意識すること。

9 まとめ

「教科書だから人を殺す場面を載せなかったのではないか」「殺す場面を載せることによって与一の置かれていた立場、武士の生き方について考えることができる」といった意見が出された。これらは特に、「扇の的」末尾の「情けなし」の読み分担や読み方を考えるのに有効であった。(黒尾 敏)

注1 『講座 音声言語の授業④ 音読・朗読・群読の指導』高橋俊三編著、明治図書、1994年、P223

注2 「読解力の向上を目指した指導の改善」西辻正副、『中等教育資料』、ぎょうせい、2005年10月号、P17

注3 『「読解力とは何か」』、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校FYプロジェクト編、三省堂、2006年、P42

新聞の報道写真を見比べ、映像情報を読み解く。

ア(イ) 評価しながら読む能力の育成

1 身に付けたい力

写真が伝える情報を言語化し、比較分析することを通して、映像情報を評価しながら、クリティカルに読み解く能力を高める。

2 主たる評価規準

・報道記事の内容を最もよく映像で伝えている一枚を決めることによって、写真の情報を評価しながら読み解き、分析している。

3 単元・題材

「今日の夕刊・一面の写真を選ぼう。」

報道写真・編集会議

4 指導のねらい

本実践では、四～五人のグループでの編集会議という形式を取ることで、映像から読み取れる情報を言語化する必然性が生まれる。そこで、非連続型テキストの読解力が高まることが期待される。

さらに、自分が最もよいと思う写真を主張し、相手を説得するために、他の写真と比べて評価する必然性が生じる。この活動を通して、評価しながら読み解く力を養っていききたい。

また、生徒たちは、映像情報は事実をありのままに映し出していると考えがちである。新聞の報道写真やテレビのニュース映像で、世界中の出来事が居ながらにして見ることができると感じてしまいやすい。しかし、映像情報も送り手の意図によって構成されているものである。一つの事実でも様々な側面から

切り取られ、伝えることができる。新聞やテレビで見ることができる映像は、精選され、たくさんの情報が切り落とされた一部に過ぎないのである。その写真がどのような意図をもって事実を象徴的に表しているのか、分かりやすく伝えているかと評価しながら、読み解いていけるように、指導していきたい。

5 単元・題材について

本単元では、複数の写真の中から、最もよく事実を伝えていると思う1枚を選ぶ活動から、映像を評価しながら読む力を育てていく。

本単元の題材として扱うニュースは、天候に関するニュースが適切である。例えば、猛暑、台風、豪雨、落雷、大雪、季節の変化などである。社会問題のように、ニュースの背景の理解が難しくなく、どの生徒もその天候に関わる何らかの体験を持つことができるからである。ニュースの内容を身近にとらえることができ、ニュース素材の中でも最も中学生にとって取り組みやすい内容である。

本実践では夏の猛暑を報道するニュースを扱った。

6 使用するテキスト

・新聞記事(1つ)

報道の概要をつかませるために、「大見出し」「中見出し」と気象状況とその被害状況の一部を用意する。

・新聞写真(3枚)

同じ日付の新聞を複数用意し、写真だけを切り抜き、カラーコピーし、画用紙に

貼り付ける。

7 授業の実際（2時間扱い）

(1) ニュースの基礎情報を確認する。

- ・「都心で日中に史上最高の 39.5 度を観測」の見出しと記事の概要を読む。
- ・この記事を夕刊に載せるために写真を一枚選ぶための編集会議を行うことを確認する。
- ・各自、3 枚の写真からどのような情報が伝わるかを分析してワークシートに書かせる。
- ・グループで編集会議を行い、どの写真を採用するかを討議し、決定させる。

(2) 各グループがどの一枚を選んだのか、その理由を述べ、発表会を行う。

- ・実際の新聞記事を見せ、写真のキャプションを読み、自分たちが選んだ意図と比較分析をさせる。
- ・気づいたことをふりかえり、まとめる。

8 この授業を行う際のポイント

(1) 一枚一枚の写真からどんな情報が伝わるのかを「構図、色、光、被写体のポーズ、背景、アングル」などのポイントでしっかり分析し、それをどう評価したかの話し合いに臨ませるとよい。

カメラマンがどのような位置から、どんな効果を狙って撮影したのかについても推測し、分析させていきたい。

(2) 写真はありのままを写しているものと、とらえがちであるが、カメラマンの意図と報道の意図によって編集構成されていることをおさえる。

(3) 情報の送り手の視点から写真を比較分析を行う。話し合い活動をとおして、情報が受け手によって多様な解釈がなされることも同時に学ばせていきたい。

(4) 写真は言葉によって読む方向を決定づけられることも、実際の記事に添えら

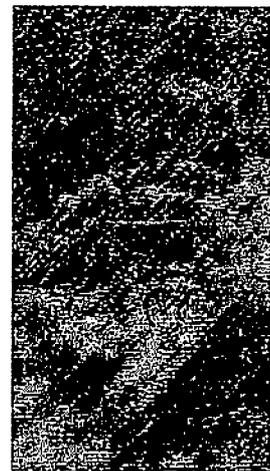
れたキャプションを読んで、確認しておくとい。

9 まとめ

この実践では、どの写真を選んだのか、グループで話し合わせる。話し合うことにより、評価の仕方について他者と比較することができ、自己の評価しながら読み解く力をより高めていくことができる。どの写真を選ぶかについては、正解があるわけではない。その写真を選んだ理由として、どのように評価したかをきちんと述べるができる点が重要である。評価して読み解く過程を大切に指導していきたい。

この実践を通して学んだことを日常生活の中でも活かし、新聞やテレビのニュース映像を意識して読み解くことを勧めていきたい。

(中村 純子)



新聞に自分の意見を投稿する

イ（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

1 身に付けたい力

- (1) 新聞に投稿された複数の文章を読み、書かれている内容を相互に関連付ける力
- (2) 新聞の投書内容と自分の考えや生活体験とを結びつけて考えをまとめ、表現する力

2 主たる評価規準

- (1) 新聞の投書から「思いを伝えることの大切さ」や「思いを伝える方法」等について、共通点や相違点を読み取っている。
- (2) 新聞の投書内容と自分の考えや生活体験とを結びつけ、「思いを伝える」というテーマで自分の考えを文章にまとめている。

3 単元・題材

新聞に自分の意見を投稿する

4 指導のねらい

本単元では、主なテキストとして新聞に投稿された複数の文章を取り上げるが、投書に対して、「賛成」「反対」という二者択一の観点から自分の考えを述べるのではない。まずは、それぞれの文章の共通点や相違点を読み取らせることで、文章の内容を相互に関連付ける力を身に付けさせたい。

生徒たちは、投書の共通テーマ「思いを伝える」に対して、様々な視点からの意見や考えを持つことが予想される。それを文章としてまとめる時間を設定する。その際には、自分の意見や考えを支える根拠の一つとして、投書内容や日常生活で実際に体験した内容を効果的に活用させていきたいと考えている。

5 単元・題材について

一人ひとりの生徒が書いた文章は新聞の投

書欄に実際に投稿する。生徒に具体的な活動目的を持たせることで「複数の投書（テキスト）を読むこと」と「テキストに基づいて自分の考えを書くこと」の2つの学習活動をより密接に結びつけたいと考えたからである。

また、このことは生徒の学習意欲を向上させることにもつながる。本単元開始時、新聞の投書欄へ実際に投稿することを予告し、学習への意欲付けを図っていく。

6 使用するテキスト

新聞に投稿された5つの文章が主なテキストとなる。具体的には次のような内容である。

- ①年賀状の文字がほとんど印字されたものとなっている。何か味気ない思いがする。手書きで書かれた文字からは、その人の温もりが伝わってくるようだ。
- ②携帯電話のメールで「行く？」と文字を打ったつもりが「行く！」になっていたようで、友達との行き違いが生じてしまった。メールは便利ではあるが、反面怖さもある。
- ③「子供は親の背中を見て育つ」という言葉を最近、実感している。子供に伝えたいことはたくさんある。言葉だけでなく、親の行動で、子供に大切なことを伝えたい。
- ④子供に何か話しかけると、「別に」という言葉が返ってくる。「別に」という言葉はコミュニケーションを遮るものと感じる。
- ⑤友達との間で「方言」が流行している。様々な土地の方言を組み合わせると会話を楽しむ。素直な思いが伝えられることもある。

この5つの文章は視点こそ異なるものの、「思いを伝えることの大切さ」について述べている点で共通する。それぞれの文章と関わりのある資料文や統計等、多様なテキストを用意し、生徒一人ひとりの学習を支えていく。

7 授業の実際（4時間扱い）

(1) テキスト（新聞投書）を読む。（1時間）

各自に用意させた新聞の投書欄を開かせ、そこに自分たちが書いた文章を投稿することを伝える。活動目標を明確にした上で、主なテキストとなる5つの文章を配布した。生徒たちはテキストを読み、その内容の共通点や相違点をワークシートに整理していく。相違点として挙げられたのは、「葉書やメール等、思いを伝えるための手段」「思いが伝わった例と伝わらなかった例」「言葉で伝えるか、態度で伝えるか」等であった。

(2) テキストの内容を自分の考えや生活体験と結びつける。（1時間）

テキストの共通テーマ「思いを伝える」に関して、日常生活の中で、どのような経験があるか、またそのことについてどのように考えるのかをワークシートに整理させた。ここで使用するワークシートは、文章を書く構成表の役割も果たしている。また、自分の考えを深めたり、考えを支える根拠として活用できるように、補助資料や統計等を用意した。必要に応じて、生徒に手渡していく。

(3) 「思いを伝える」ということをテーマとした文章を書く。（1時間）

前時に作成した構成表をもとに、文章（投書）を書く時間を40分間設定した。文字数は400字から600字の範囲内とする。生徒が書いた文章には次のようなものがある。

コンビニエンスストアに立ち寄る機会が多いです。お店に入った時に聞こえるのは「いらっしゃいませ」という店員さんの声。

それが、僕には機械がしゃべっている声に聞こえてしまうのです。（中略）。自分自身を振り返ってみて、毎朝登校したときに先生や友達に言う「おはようございます」も同じなのではないかと気がつきました。

形式的な「言葉」だけでは、自分の思いを相手に伝えられないのです。（後略）

この生徒は構想の段階で、テキスト①「年賀状の印字された挨拶文」の内容に自分の体験や考えを重ね合わせることができていた。

時間内で書き終わらなかった3名の生徒に対しては、放課後や休み時間を活用し、助言等を繰り返していった。

(4) 書いた文章を読み合う。（1時間）

書いた文章は学級内で読み合い、相互批評をしていく。文章に対して、「意見がはっきりしない」等と指摘するだけでなく、具体的にどのように書き直せばいいのかを話し合えるような学習の場づくりをおこなった。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 単元全体を貫くテーマを「思いを伝える」とした。生徒の考えや生活体験を導きやすく、また考えを深めさせたいテーマを選ぶ。
- (2) 複数の視点から意見が述べられているテキストを選択することで、文章の内容を相互に関連付けて読む力を育成する。
- (3) 書いた文章を互いに読み合う時間を設ける。そのことにより、学習目的の明確化と学習内容の深化を図っていく。

9 まとめ

新聞に投稿する文章を書くという活動目標に向かって生徒たちは意欲的に学習を進めることができていた。そのプロセスでは、テキストを読むことに、そして文章を書くことに「熟考する」生徒の姿をみることもできた。

（田沼 良宣）

本から得た情報や思いをPOP（ポップ）に表現し、伝える

イ（イ）日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

1 身に付けたい力

他者を読む気にさせ、実際に本を手に取り読ませるといった行為を促すためのPOPを作成することで、自分が得た情報を整理し、わかりやすく表現する能力を高める。

2 主たる評価規準

本を読んで得た情報や自分の思いを、POPの役割を理解した上で取捨選択し、短い言葉で端的に表現している。

3 単元・題材

「本から得た情報や思いを
POPで伝えよう！」
～POPを使って、顧客GET!～

4 指導のねらい

本を読んでみようという気持ちはあるが、何を読んだらいいのかわからないという不読者は多い。また、読書を習慣とする者も、次に何を読もうか常に情報を求めている。新聞やインターネット等、本の情報を得る方法は様々あるが、ここでは、自分が出会ったとおきの本を紹介し合い、今後、選書する際の情報を得る場を設定した。

具体的には、作成したPOPを介し、お互いが顧客となり書店員となって、自分が勧めた本をできるだけ多くの友達に読んでもらうことを目標に交流を行う。また、地域の同世代へも広く情報を発信するという目的で、POPを地域書店へ展示する流れも組んだ。

自分が得た情報や、再読して改めて感じた思いを、POPという媒体を通して言葉に表していく学習活動は、単にテキストを読むだけではなく、POPの役割を認識した上で、必要かつ重要な事柄を整理し、取捨選択しながら表現していく力の育成につながる。

5 単元・題材について

POPとは、書店に展示されているハガキ大の宣伝用カードである。購買意欲をかき立てる効果をもち、顧客に“本を手にとらせ、買わせる”アイテムとして価値をもつ。売り上げを伸ばすPOPの特徴について、書店員さんは次の3点を挙げた。①インパクトがある、②本の内容や実際に読んだ感想が書いている、③キャッチコピーがある。

売り上げを伸ばすPOPを作成するために、学習者は作品を再読しながら、クライマックス部分の確認や好きなフレーズの引用、面白く感じた理由を分析していく。その過程は、具体的な叙述を踏まえて深く考える機会を与えると同時に、次の表現活動の土台となる。そこで得た情報から何を選び取るか、彼らは限られた紙面に盛り込む内容を考え、伝える言葉を吟味し、書き表していくのである。

6 使用するテキスト

今までの読書生活の中からのとっておきの一冊が各自のテキストとなる。それは、いわゆる名作であったり、ベストセラーであったりするが、“手に入るもの”という条件以外

は特に指定をせず、自由に選択させた。展示を依頼した各書店は、以下の観点で学習者のPOPを選択、展示して下さった。

- ・ A書店：新刊本を中心に展示。
- ・ B書店：隠れた名作・佳作を中心に展示。

そして、これらのPOPが、次の選書を促す彼ら自身のテキストとなるのだ。

7 授業の実際（3時間扱い）

(1) 作品を分析する

○書かれていることを根拠に作品の面白さを考え、自分なりに分析する。

※本単元に入る一週間程前に、授業の目的・流れを説明し、紹介したい本の再読を指示しておく。

(2) 情報や思いを整理し、言葉に表す

○限られた紙面にどんな情報や思いを盛り込むかを考えながら、POPを作成する。

※以下の内容を入れるよう指示した。(キャッチコピーについては既習) ②③④に、学習者が選び取った情報や感じた思いが表れる。

- ①基本情報（書名・著者名・出版社・価格）
- ②キャッチコピー ③お気に入りのフレーズ
- ④購買者をひきつける一言（おすすめの理由や自分の思い、作品の内容等）

(3) 情報の交流をする

○POPを使って友達と本の紹介をしあう。
※交流の経過がわかるように学習プリントを用意するとよい。

(4) 学びを広げる

○紹介された中から選んだ一冊を実際に読み、感想をもつ。

○書店へ出向き、採用された友達のPOPを参考に選書し、本を読み、感想をもつ。

※単元後の活動となるが、学習プリントや読書記録ノート等で、結果を確認したい。

8 この授業を行う際のポイント

(1) ‘効果的な情報の選択’を意識させる

限られた紙面の中で何を伝えるのが効果的かを意識させることは、本当に必要な情報を



【本校専用コーナーを作ってくれたB書店】

取捨選択する視点を与えると同時に、自然と言葉を吟味し表現することとなる。

(2) 形や色、筆記具等における工夫

‘インパクトがあるPOP’という点において、形や色、レタリング等にこだわる気持ちが生まれるのは当然である。身に付けたい力と目的を確認した上で、適宜工夫させたい。

(3) POPを実生活で活用する

学んだことが、実生活に生きる場面を作ることで、学びの手応えを感じさせたい。

9 まとめ

「ほんの数行で作品の魅力を最大限に引き出さなければならないので、どの部分を取り上げ、どう言葉にすれば効果的か、どう書けば自分が紹介した本を手にとってもらえるかを考えるのがとても大変だった。実際に、POPが書店に飾られたときは、『世の中に通用するものを作ったんだ』と何だか不思議な気持ちになった」

POPの役割を認識した上で、必要な情報を選択し、わかりやすく表現しようと言葉を吟味している姿が伺える。

今回は学習者のために書店を探し、実生活における学びの場としての価値をもたせたが、逆に、書店の要望や顧客層に応じて学習者が選書したり、POPを作成するといった展開も日常的・実用的な言語活動として価値をもつのではないか。 (杉本 直美)

私たちの言葉について考える —— 統計や図表を読むことを通して ——

ウ（ア）多様なテキストに対応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

- (1) 自分の考えや生活経験と結びつけて、統計や図表の内容を的確に読み取る力
- (2) 統計や図表から読み取った内容を効果的に活用する力

2 主たる評価規準

- (1) 自分の考えや生活経験と結びつけ、統計や図表の内容を具体的に考察している。
- (2) 統計や図表から読み取った内容を効果的に活用して、レポートをまとめている。

3 単元・題材

私たちの言葉について考える

— 統計や図表を読むことを通して —

4 指導のねらい

情報社会を生き抜く生徒たちにとって、データを視覚的に表現した統計や図表の内容を読み取り、それを活用する能力は必要不可欠なものとなる。本単元では統計や図表の数字を漠然と受け入れるだけではなく、自分の考えや生活経験と結びつけて考察をすることで、統計・図表の内容を的確に読み取る力を身に付けさせる。

また、学習の過程では考察した内容をレポートにまとめるという表現活動を組み込んでいく。読むことの学習を表現活動と結びつけることにより、テキストを読む目的や視点を明確にし、さらには、読み取った内容を効果的に活用する能力を高めさせていきたいと考えている。

5 単元・題材について

本単元の学習活動は2つの大きなまとまりによって構成される。第1次は、統計や図表の内容（「国語に関する世論調査」）を考察するという学習活動をグループごとにおこなう。まずは「統計や図表から気付いたこと」「もっと知りたいこと」等の視点で読み取った内容を整理させる。そして、その上で再調査等の学習活動を展開していく。具体的な活動例としては次のようなものが予想された。

- ①中学生では「なにげに」「チョー」等の言い方がどのくらい使われているかを調べる。
- ②「なにげに」「チョー」等の言い方以外でどのような言葉が問題になるか調べる。

第2次は、第1次で考察した内容をレポートとして文章にまとめるという活動である。書いた文章は学級内で読み合い、相互批評もおこなっていく。また後日、レポートをもとにしたパネルディスカッション「私たちの言葉遣い」を実施することを予め伝えておく。

6 使用するテキスト

テキストの一つとして「平成15年度 国語に関する世論調査（文化庁）」の統計・図表を取り上げる。日常生活で使われる「なにげに」「チョー」などの言葉を8例挙げ、そのような言い方をするかどうかについて調査した内容である。「言葉」は生徒たちにとって身近なものであり、統計・図表の内容を自分の考えや生活体験に結びつけて読み取ることが比較的容易であると考えた。

また、生徒たちが考察を深めていく過程で

は、テキストとして「言葉」に関する30冊程度の本を用意し、必要に応じて読めるようにしておいた。また、新聞記事や雑誌・インターネットから検索した資料も手に取れるよう整えておくこととした。

7 授業の実際（6時間扱い）

(1) 第1次の学習活動（3時間）

第1次の学習の導入で「国語に関する世論調査」の統計・図表を生徒に示した。日常的に使用している「なにげに」「チョー」をはじめ、「あの人は走るのがすごい速い」「全然明るい」等の言葉に生徒は興味関心を持ったようである。「自分は使っていない!」「何でこの言葉はおかしいの?」等の発言が飛び交っていた。

グループごとに考察をする段階では、この調査の実施が平成15年度（2年前）であることに着目し、「現在」との比較調査をおこなうグループもあった。身近な友達や様々な年代の先生を対象として、「なにげに」「チョー」等の言い方についての再調査をおこない、対象者に「どのような場面で使用するのか」「使用することに違和感はないのか」等の追質問をすることで、統計や図表の内容を深めることができていた。

その他にも、各グループごとに考察を深めていく過程で、言葉の使い方に関する図書や新聞記事を読んだり、インターネットで資料を検索する等、多様な「読み」に自覚的に取り組む様子も多く見受けられた。

(2) 第2次の学習活動（3時間）

第1次で考察した内容をレポートにまとめるといふ活動を一人ひとりの生徒がおこなう。レポートの構成は「統計・図表から読み取った内容」「考察の結果」を柱とした。ある生徒は次のようにまとめている。

「(前略)特に、『なにげに』という言葉を使うという人の割合は、平成8年度から大幅に増加していることがわかる。その中でも、

若い人の割合が高い。私たちが実施した中学生(72名)への調査では『使うことがある』の割合が80%を超える。そこから…(後略)」

この生徒は、自らの生活経験から「なにげに」という言葉を使う中学生の割合が高いことを予め想定した上で考察を進めていた。

レポートは学級内で読み合い、読んだ感想や意見をレポートの横に書き込んでいく。考察段階では同グループであっても、視点の置き方が異なれば、レポートの内容も異なるのだということを実感する生徒も多かった。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 統計や図表などをテキストとして取り上げる場合には、その内容が生徒自身の考えや生活体験と結びつくものを選択する。
- (2) 「書くこと」「話すこと・聞くこと」の学習活動と相互に関連づけることで、読むことの目的を明確にさせる。
- (3) 統計や図表（非連続型テキスト）に限ることなく、多様なテキストを用意する。本単元では、生徒の学習活動を支えることのできる図書や資料を予め整えておいた。
- (4) 生徒一人ひとりの学習過程に寄り添い、具体的な支援をおこなう。特にグループ活動の段階で、考察を深めるための調査等における着眼点を示すことが必要である。

9 まとめ

実際の生活場面で、統計や図表を無目的に読むことは少ないはずである。そうであるなら、授業においても、目的を持って読む学習の場を設定する必要がある。生徒がまとめたレポートでは、自分の意見や考えを支える根拠として、統計や図表を活用することができていた。生徒一人ひとりが、それぞれの活動目標であるレポートの作成に向かう過程で、統計や図表の内容を的確に読み取り、それを効果的に活用する力を身に付けることができたのではないかと捉えている。(田沼 良宣)

「走れメロス」で作品のしくみを説明する

ウ（イ）自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

1 身に付けたい力

目的をもってテキストを分析し、分かったことや考えたことを、分かりやすく簡潔に説明する能力を高める。

2 主たる評価規準

作品のしくみについて分析して分かったことや考えたことを整理して、分かりやすく説明している。

3 単元・題材

「走れメロス」を読む

4 指導のねらい

自分の感じたことや考えたことを簡潔に分かりやすく表現する能力は、学校生活のいろいろな場面で要求されるだけでなく、社会に出て自己実現を図っていくためには欠かせない能力の一つである。

とくに相手意識を持って何かを説明する力は、分かりやすく表現する力の中心となるものである。

こうした説明の力は、各教科や総合的な学習の時間において意図的に育成していかなければならないものであるが、とくに国語科においても、話すこと・聞くこと、読むことのそれぞれの領域の中で育成を図らなければならない力の一つになっている。

そこで、今回は文学作品の読みにおいて、作品を分析して、その仕組みについて分かったことを分かりやすく説明することを考えた。

ところで、説明の学習のために文学作品を題材に取り上げたのは、次のような理由からである。

国語科においては、説明的文章を読んだり書いたりする単元で、説明する力を身に付けていく学習を展開するのは当たり前である。ただ、そうした単元以外のいろいろな場面で説明する活動を組むことは、説明の力の定着を図るには欠かせないからである。

5 単元・題材について

「走れメロス」を題材として取りあげて授業を行う。

「走れメロス」については、これまでに筆者としてもさまざまな実践を行ってきたが、どちらかと言えばメロスの心情を押さえることが中心になっていた。こうした授業では、どうしてもストーリーの枠内に閉じこめられた読みになりがちである。(注1)

そこで今回はテキストの枠組みについて考えるような授業(注2)を行いたいと考えた。具体的には、王が気持ちを変えたことについて、読者が納得して受け入れていくような作品の仕組みを分析する課題を設定した。

ところで、この課題がどうしてテキストの枠組みについて考えることにつながるのかというと、王の変心の理由はストーリーを追っているだけでは解決できないからである。王の変心を促すにいたった情報には、メロス数々の試練が実は含まれていないのである。読者は自分の知っている情報は、当然王も知っているものとして疑いもなく読んでいるので

ある。王の知っている情報を分析していくことで、テキストの枠組みについて考えていくことにつながってくるのである。

今回の授業では、作品を分析したことに対して、自分の考えを付け加えて、分かりやすく説明を書くという学習を行った。

このように、読むことの授業の中で、書く活動の機会を意図的に作っていくことは簡潔に表現する能力を育成するには重要であると考えている。

6 使用するテキスト

今回は、「走れメロス」（東京書籍2年）をテキストとして使用した。このテキストを使用したねらいとしては、文学作品の読みを中心とした単元であっても、目的を明確にして自分の考えを説明するといった学習を設定することが可能であることを示すためである。その意味ではどのような文学作品でもかまわないが、中学2年の文学教材の代表的なものを取り上げることで、「読解力」育成を考えた授業を工夫する際に参考になると考えたからである。

7 授業の実際（5時間扱い）

- (1) 作品の朗読 CD を聞き、大まかにストーリーの内容について理解する。
- (2) 「川の氾濫がなく、メロスが予想していた時間通りに刑場にやって来たら、王はメロスとセリヌンティウスをどうするか」という課題について話合う。
- (3) 「王がメロスたちを許すにあたり、どんな情報を持っていたのか」という課題の解決のために、作品を分析する。
- (4) 「王」の持っていた情報と、読者の持っていた情報を比較することで、「王がメロスたちを許すことをどうして読者が納得したのか」という課題をもとに、作品の仕組みについて検討する。
- (5) これまでの学習を整理して、「王の変

心を得させる作品の仕組み」について説明を書く。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) ストーリーに流されない読みの授業を行うには、作品の枠組みを意識した課題を設定していくようにする。(注3)
- (2) 学習のプロセスで分かったことや、自分が考えたことをメモしていく。
- (3) 穴埋め式のワークシートからの脱却を図っていく。自分の考えたことを、少しでも書くようにする。
- (4) 「第一に」「第二に」などのよく使う説明の書き方を、事前にいろいろな場面で使って説明に慣れるようにする。

9 まとめ

ここでのねらいである「目的をもってテキストを分析し、分かったことや考えたことを、分かりやすく簡潔に説明する能力を高める」ためには、書くことの機会を多くして、書くことに慣れさせておくということが欠かせない。

そのためには、この授業を行う際のポイント(3)(4)で示したように、読むことの授業改善ということを考えていく必要があるだろう。キーワードの整理に終わることなく、そこでの自分の考えを書いたり、自分なりに分かったことを整理させたりする学習を展開するようにしたいものである。(岩間 正則)

(注1) 牛山恵「子どもが読む『よだかの星』一擬制を撃つ」『日本文学』(日本文学協会編 2003年3月号 12頁)で、ストーリーに流されて既成の概念に閉じこめられた読みの脱却について述べている。

(注2)(注3) 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校研究紀要第44集 2005年度の国語科の提案参照

文章の再構成を通して、構成や論理の展開を評価しながら読む。

ア（イ）評価しながら読む能力の育成

1 身に付けたい力

構成や論理の展開の仕方について文章を評価しながら読み、目的に応じて再構成することで、文章の構成や論理の展開を批判的に読む能力を高めるとともに、目的に応じた構成や展開を工夫して自分の表現に生かす能力を高める。

2 主たる評価規準

文章の再構成を行い、より効果的な構成や論理の展開の仕方を考え、文章を評価しながら読んでいく。

3 単元・題材

論理の展開を考え再構成しよう

4 指導のねらい

現在、子どもたちの論理的な思考力や表現力の育成が求められている。論理的な思考力を高めるためには、まず、書き手の意図や文章の展開の仕方をとらえ、思考の流れをとらえることが重要である。次に、単に肯定的な読みを行うだけでなく、より目的に合った構成や展開の仕方を考えるなど、文章を批判的に読むことが必要である。そして、さらに自分の表現に生かすことにより、自分自身の論理的な表現力を高めることにもつながってくる。そこで、本題材では文章を再構成するという目的をもって文章を批判的に読むという言語活動を通して、文章の構成や論理の展開を評価しながら読んだり、目的に合わせてよりの確な構成や展開の仕方を考えたりする

ことを行い、論理的な思考力を高めることをねらいとしている。

5 単元・題材について

本題材は、PISA 型「読解力」に当たる、論理的な思考の確かさや目的や表現様式に応じた表現法の妥当性を考えながら批判的に読む能力を高めるものである。なお、本題材で目的に応じて構成や展開を工夫する能力を高めた後、次題材「説得力のある小論文を書こう」で、論理的に書く能力を高めていく。

6 使用するテキスト

本題材では、「マスメディアを通じた現実世界（光村図書3年）」を主教材として取り上げる。「マスメディアを通じた現実世界」は、マスメディアの情報の性質をおさえ、メディアの受信者としての姿勢について述べた論説文であり、序論・本論・結論の三段構成であり、具体的な事実を取り上げながら論を展開し、読みやすいテキストである。しかし、具体例が多岐に渡っているため取り上げた意図がつかみづらかったり、序論と本論で並立的に主張を述べているために、二つの主張の関係をとらえづらかったりする面もある。そこで、結論と具体例の関係を明確にして、頭括型・尾括型等の構成や「問題提起ー結論」「具体ー抽象」といった展開を工夫したり、より説得力のある具体例に換えたりして、読み手に筆者の主張を明確に伝えられるような文章に書き換える学習に適している。

7 授業の実際（7時間扱い）

(1) 基本構成や展開の仕方の確認（1時間）

第1時は、文章の基本的な構成や展開の仕方や効果について考えさせる。まず、いくつかの例文を読んで、文章の基本構成（序論・本論・結論、起・承・転・結）や結論の位置による構成（頭括型・尾括型）の違いの効果について考えさせる。次に、様々な展開の仕方について考えさせるとともに、「問題提起－結論」の流れの例文を作らせるなど、展開の違いによる効果を考えさせる。

(2) 「マスメディアを通じた現実世界」の構成や要旨の把握と分析（2時間）

第2・3時では、「マスメディアを通じた現実世界」を読み、文書の論理の構成や展開を評価させる。まず、文章を読んで内容をつかまえてから筆者の主張（結論）と段落構成をつかませる。次に「文章分析表」を用いて結論を導き出すための根拠・具体例の内容の適切さや、構成や展開の明確性・妥当性について評価させる。さらに、次時で目的や読み手を設定して再構成を行うことを知らせ、日常目にする様々な表現方法から自分が書き換える方法と工夫点を考えさせる。

(3) 「マスメディアを通じた現実世界」の再構成（2時間）

第4・5時では、「マスメディアを通じた現実世界」の再構成を行う。ここで行う再構成とは、筆者の主張を生かして、目的や読み手を設定して構成や展開、具体例等を工夫して文章を書き換えることである。生徒が再構成した主なものは次のようである。

- 統括型の小論文に書き換える。
- 研究レポートとして書き換える。
- スピーチやプレゼンテーションの原稿として書き換える。
- 小学生対象の新聞記事として書き換える。
- 若者向けの雑誌の記事として書き換える。
- 幼児対象の紙芝居の原稿に書き換える。

(4) 再構成の発表と目的に沿って主張を明確

に伝えるための構成や展開についての理解の深化（2時間）

第6・7時では、再構成文の発表・読み合いを通して、目的に沿った効果的な構成や展開の仕方についての理解を深めさせる。ここでは読み手や聞き手の立場になって、第2時で行ったような文章や話の評価を行い、目的に合った分かりやすい構成や展開になっているかを評価させる。

8 この授業を行う際のポイント

この授業では、目的に応じて文章の構成や展開の適切さを評価しながら読むといった批判的な読み方を随時行っていく。これを行うには日頃から、書き手の主張と具体例の適切さを考えながら読んだり、結論と構成の関係を意識しながら読んだりする習慣を身に付けさせることが必要である。再構成という活動を行うに当たっては、まず、短文で内容をとらえやすい文章で行うことが望ましい。場合によっては、「頭括型の文章に書き換える」「問題提起－結論」の流れを取り入れる等、教師が再構成の視点を示したり、説明的な文章を読んだ後、結論に合った別の具体例を考えさせたり、随筆文など、やや構成が曖昧な文章を提示して再構成させたりする活動等も有効である。

9 まとめ

論理的な表現力を高めるためには、論理的な思考を行う場や言語活動を設定することが必要である。目的に応じて文章を再構成するという活動を念頭に置いて、文章の論理の妥当性を考えながら読む活動は、生徒の論理的な思考を促すうえで有効である。また文章の再構成という活動も、既に内容は決まっているため構成や展開に絞って表現の工夫ができ、論理的な表現力を高めるためにも有効な手立てであると考えられる。（栗本 郁夫）

名探偵の推理が「たまたま当たったのか」

「当たるべくして当たったのか」を検証する

ア(ウ)課題に即応した読む能力の育成

1. 身に付けたい力

推定・断定、論の展開を含む叙述の吟味を通して、説明の文章に対する自分の考え(評価)を口頭発表を前提にまとめる力を高める。

2 主たる評価規準

推理(考察)過程を説明した文章の「推定・断定」表現の妥当性や論の展開の妥当性を分析して、「たまたま当たったのか」「当たるべくして当たったのか」に対する自分の意見を、表現に基づく根拠を示しながらわかりやすく説明している。

3 単元・題材

名探偵シャーロックホームズの推理

4 指導のねらい

「評価しながら読む力」とは、主張の根幹となる「引用事例や数値の正確性」や「論の展開」や「推定・断定の表現」の適性・妥当性等を吟味して判断する力である。そして、「課題に即応した読む能力」とは、こうした他者の表現に接し、筆者の展開する論理に飛躍はないか、主張の根拠となる「事例」や「推量」「断定」等の表現は適切かなど、文章が自分が納得しうる情報であるのかどうかを検討し、相手や目的を明確に意識して応答・対応する力であろう。

ここでは、情報に接し、その情報を分析し、その情報・主張に対する自分の考えを文章として表現する学習機会としたい。

5 単元・題材について

「叙述の吟味」する題材としては、次のような要件を満たす文章を選定する。

①論理的展開(根拠立て)が明確な文章

②「事実」と「判断内容」を区別した表現の文章(判断内容の妥当性を吟味しやすい文章)

③「推定」から「断定」に至る論理展開に論理性を含んだ文章

また、「自分の考え」を表明するという視点からは、

④どちらの意見も成立しうる文章を選定する。

※教材文として取り上げた文章では、類推の積み重ねを繰り返しているため、前段の【判断内容】が次には【判断材料(事実)】に変化しており、「推定表現」から「断定表現」への変化は、一方では「論理の飛躍」と評価されるべきものであると同時に、「四つの可能性が重なり合う条件」の吟味を経れば、確率的な「確からしさ」という蓋然性を踏まえた表現と評価されるべきものでもあり、「たまたま」「当たるべくして」双方の主張が成り立つものである。

さらに、「口頭表現」という表現手段に限定した意図は、文字言語に対して音声言語では、結論や根拠をナンバリングやラベリングをして述べる必要があるという特性を踏まえた手立てとしてである。

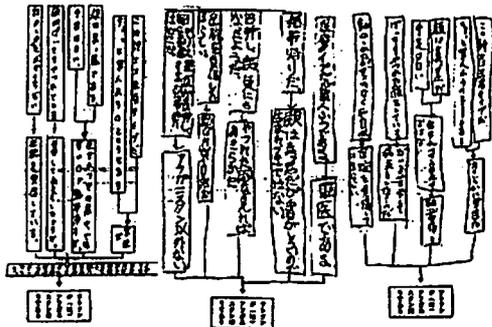
6 使用するテキスト

コナン・ドイル作「緋色の研究」より、ホームズが「ワトソンはアフガニスタン帰りである」と言い当てた推理過程を説明した部分の表現

7 授業の実際(5時間扱い)

(1)文章を読み、推理が「たまたま当たったのか」「当たるべくして当たったのか」の考えを持ち、根拠を挙げながら「口頭表現」前提にした文章に表現する。

- (2) 意見交流を通して、自分が挙げた根拠の妥当性について再検討する。
- (3) 再考した文章をグループ内で評価し、発表する。
- (4) シャーロック・ホームズの推理過程を『論理図』に書き、論の展開と問題になった表現を整理する。【C生徒に対する支援】



- (5) 最終意見の記述と単元の自己評価・今後の課題の記入。

8 この授業を行う際のポイント

文章を読んで自分の考えを持たせるとき、生徒たちに培いたいのは表現(テキスト)を吟味・評価する力である。本教材での生徒の書いた意見をその根拠によって類型化すると、次の5タイプが見受けられる。

A型【表現吟味型】：「推量表現の中から生じる例外の指摘」「可能性のある問題の論議」、**B型【権威追従型】**：「名探偵シャーロック・ホームズであるから…」、**C型【経験法則型】**：「私の知っているホームズは他の事件でも…」、**D型【驚**

異驚嘆型】：「初めて会った人に対して～すごい」、**E型【事実列挙型】**「(事実を列挙し、事実と結論の妥当性の吟味を経ず)筋が通っている」

生徒に意見を持たせる際、往々にして「まず、何でもいから自分の意見を持ちなさい」という場合が多いが、指導者が持たせたい考えは、実は〈A型：『表現吟味型』〉の意見である。そのためには、まず生徒にテキストの意見に対して「賛成・共感」等の肯定的意見であるのか、「反対・疑問」等の否定的意見であるのかという立場を明確にさせる必要がある。本教材の場合はそれが「たまたま」「当たるべくして」の立場である。もちろん、「混迷・判断材料不足」等の保留的意見も存在しようが、そうした場合にも、その根拠を「表現を基にして」行わせる必要がある。

そして、「表現」を吟味・検討する際の一つの手立てが、「根拠」と「結論(意見)」を図式化して妥当性を吟味する「論理図」と呼ばれるものであろう。また、その際に着目させるのが、伝聞・推量・推定等の助動詞や格助詞・副助詞を中心とする助詞の文脈の中での働きである。

9 まとめ

他の転移場面を使って評価する場合には、同作者の「四つの署名」の「ワトソンが郵便局に行ってきた」ことを推理する場面を活用すればよい。

また、こうした「推定・断定」表現の妥当性や論の展開の妥当性を吟味・検討する学習は、一事例からの主張の妥当性を増すために他事例を用いた【押し広げ】がなされる帰納的な論証の説明的文章を使った学習でも可能な学習である。帰納法で進められる説明的文章では、【押し広げ】の展開を経ることで、文末表現が「推量」「推定」から「断定」表現に変化する。そこに、筆者の展開する論理に飛躍はないか、主張の根拠となる「事例」や「推量」「断定」等の表現は適切かなど、文章が自分が納得しうる情報であるのかどうかを検討する学習を図れればと思う。(今村 高治)

テスト問題を作るために新聞のコラムを読む

ア（ウ）課題に即応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

テキストの表現や語句に着目して、文章構成を解釈する能力を高める。

2 主たる評価規準

文章構成を的確にとらえてテスト問題を作成している。

3 単元・題材

単元：文章構成を読む

題材：①新聞のコラムを用いた指導者自作のテスト問題

②新聞のコラム2編

4 指導のねらい

今回の学習では、段落ごとにバラバラに並べられた新聞のコラムを正しい順序に並べかえるという形式のテスト問題を作成する。この学習と、PISA 型「読解力」との関わりを挙げると次の二つに整理できる。

一つ目は、PISA 調査で測定される「読解のプロセス」のうち、「情報の取り出し」「解釈」を意識している点である。「情報の取り出し」とは「テキストに書かれてある情報を正確に取り出すこと」であり、「解釈」とは「書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論したりすること」である。

（注1）バラバラに並んでいる段落を正しく並べかえる際には段落相互の前後関係をとらえることがポイントになる。前後関係をとらえるためにはテキストの中にある「接続語」「指示語」「反復語」「頻出語」もしくは、これらを含んだ文に着目する必要がある。こ

れらを拾い出す作業は「情報の取り出し」であり、それをもとに、正答と誤答を含む選択肢を作成する作業は「解釈」にあたると考えている。

二つ目は、単なる選択肢式問題の作成・読み解きにとどまらず、誤答を作成する際にきちんとした「根拠」を考えさせることを意識している点である。学習者たちはこの3年間の国語学習の中で、書く能力・プレゼン力について一定の力を身に付けることができた。しかし、そうした成果の一方で「話すことや書くことの中味については深まりが出てきたものの、その裏付けとしての根拠の吟味がまだ不十分である」という課題も明らかになってきた。この課題については、PISA 調査および平成13年度小中学校教育課程実施状況調査を受けて、文部科学省が指導の改善の方向として示している「根拠を明確にしながら自分の考えや意見を述べる力の育成が必要」という指摘（注2）とも一致する。今回はこの課題にも焦点を当てて取り組んでみた。

5 単元・題材について

今回の学習では、「段落ごとにバラバラに並べられた新聞のコラムを正しい順序に並べかえるという形式のテスト問題を作成する」という活動を組むことによって、①文章構成を的確にとらえる力、②根拠を明らかにして説明する力、を育成することを意図している。この単元を設定した理由は次の二つである。

一つ目の理由は、生徒たちにテキストにある言葉にこだわってじっくりと物事を考えていくという姿勢を持ってほしいからである。

今回の課題であるテスト作問は、テキストの細部を構成している言葉に着目することによってはじめて解決することができる。作問の過程で、先に述べたような「接続語」「指示語」「反復語」「頻出語」といった言葉の働きを実感してくれたらと考えている。

二つ目の理由は、生徒たちに自らが発した言葉（＝自らが作成した問題）に責任を持つという態度を身に付けてほしいからである。今回の授業に置き換えて言うならば「この選択肢はなぜ誤答なのか」という問いに対して説明責任をもつことである。

6 使用するテキスト

今回取り上げたテキストは新聞の1面にあるコラムであり、「連続型テキスト」である。これを取り上げた理由は、今回の授業が「テスト問題を作る」という内容だからである。どの新聞のコラムも、字数としては600字前後、段落数としては5～6段落の長さであり、主張が明確であることから、今回の授業の主たるねらいである文章の構成を読み解くには適切である。現実にも入試問題として多く取り上げられている。また、実生活において幅広い範囲の文章を読むことにつながっていくものと考えられる。

7 授業の実際（3時間扱い）

(1) 指導者が作問したテスト問題を解き、テストの形式を知る。ガイダンスを聞き、この単元における自分の学習目標を立てる。



【問題を解く】

(2) 指導者が用意したテキスト（新聞のコラム）を読み、テスト問題を作成する。

(3) 作成した問題を交換して解きあう。作成した問題について意見交換をする。学習目標にてらして単元をふり返る。



【作成した問題について意見交換する】

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 「テストは受けるもの」という生徒たちの既成観念を転換して、モチベーションを高めるようにする。
- (2) テスト問題の形式を示すことで、作問の難しさに対するハードルを低くする。
- (3) 生徒の実態や関心に応じてコラムを選んでおく。

9 まとめ

テスト問題を作るという課題そのものが生徒たちにとっては新鮮であったことが学習感想からうかがえた。文章構成を読み解くために、文中のどのような言葉や表現について着目すればよいのかを生徒たちは意見交換を通じて感じ取っていたようである。今回は指導内容を「文章構成」に絞り込んだことで、生徒たちがどのような力が求められているのかを自覚することができた。（黒尾 敏）

注1 『PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向』、文部科学省、2005年1月、P1

注2 『読解力向上に関する指導資料』、文部科学省、2005年12月、P12

自分の考えを企画書にまとめてプレゼンテーションする

イ（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

1 身に付けたい力

自分たちの身の周りの状況を見つめ、各自が問題意識をもち、改善していくアイデアを企画することで、自分の考えを簡潔にまとめ、表現する能力を高める。

2 主たる評価規準

近隣の公共図書館の状況をレポートし、そこで得た情報と学校図書館の現状を比較しながら、自分の考えを「一枚企画書」（A4）に簡潔にまとめている。

3 単元・題材

「自分の考えを企画書にまとめ、
プレゼンテーションしよう」
～〇〇中学校 図書館改造計画～

4 指導のねらい

読書活動が盛んになると、書店へ足を運ぶ学習者は格段に増える。が、学校図書館を利用する者は意外と少ない。学校図書館は学習者にもっと利用されていていいし、利用されるべき場所である。そこは自分の考えを広げ深めるための手助けをしてくれる有効な場所となるからだ。そこで、使い勝手のいい、親しみのある学校図書館にするための工夫を、利用者である学習者自身が考える。その考えを企画書にまとめ、提案し合い、実際に学校図書館を改造していくという流れを仕組みことで、自分の考えを簡潔にまとめ、表現していく能力の育成を図った。

5 単元・題材について

発想や考えは、何かと比較したり、ずらしてみたりするところから生まれる。ゆえに、まずは学習者自身が“考えるための材料”をもつことが肝要である。そこで、いくつかの着眼点を携えて、近隣の公共図書館へ出向き「図書館レポート」を作成することで、各自に自分の考えを支える実際的な根拠をもたせた。その上で、公共図書館を訪れて得た情報を交流させ、最終的に構築された自分の考えを「一枚企画書」にまとめ、提案型プレゼンテーションに臨む。読み手にわかりやすく伝わる「一枚企画書」を書くことは、そこで使用する言葉や表現を吟味する機会を学習者に与えると同時に、他者の目から見ても納得のできる流れであるかを意識しながら、自分の考えの筋道の適否を問うていくことになる。また、プレゼンテーション後、支持を得た企画は実現に向けて実際に動くことで、学びが日常生活に広がっていく実感をもたせた。

6 使用するテキスト

今回は、学習者の日常生活そのものがテキストとなる。具体的には、近隣の公共図書館の状況をレポートした学習者の「図書館レポート」と、実際に自分たちの目で確かめた学校図書館の現状である。また、それらをもとに仕上げた「一枚企画書」は、プレゼンテーション時のテキストとなるとともに、読み手を納得させる表現や考えの筋道の表し方を学ぶテキストとしての価値をもつ。

7 授業の実際（8時間扱い）

(1) 自分の考えをもつ

○「図書館レポート」を書く。

※本単元に入る一ヶ月程前に、授業の目的・流れを説明し、公共図書館をレポートするよう指示する。一月かけて各自が進める課題となるので、レポートの書き方、着眼点（本の並べ方の工夫や特別コーナーの設置、カウンターの様子等）を丁寧に確認する。

(2) お互いの考えを確認・交流する

○「図書館レポート」を用いて、お互いが知り得た情報・学校図書館で実行可能と思われる提案についてグループで交流する。

※グループに関しては、各自の「図書館レポート」の着眼点をもとに、指導者が編成するとよい。

(3) 考えを整理する

○提案内容をグループで一つに絞り、改善点確認後、各自で「一枚企画書」を作成する。

※企画書の書く際は、書き方とともに書くべきポイントを明示する。今回示したのは以下の通り。(①キャッチコピー②現状③アイデア④根拠)

(4) 考えを表す1

○各自が書いた企画書を持ち寄り、グループとしての企画書を完成し、プレゼンテーションに向けての準備を行う。

(5) 考えを表す2

○プレゼンテーションを行い、クラスとしてぜひ実現させたい企画を決定する。

(6) 考えをかたちにする

○企画内容によっては、代表者が学校長にお願いに上がる等、実現に向けて動く。



【学校長に企画を説明する学習者】

8 この授業を行う際のポイント

企画書を書くという学習活動が、より实际的で充実したものになるよう、以下の点に考慮した。

犬中 ビフォーアフター!!

めんどくさい返却を簡単に、利用をスムーズにするためにあるBoxを設置します… 題して

楽々返却作戦! 何でもBox(仮)がポイント!!

現状

今、図書館は新刊本が入り、リジビンスワーク新しい名前なども決まり、利用者も増えていきました。しかし、本を期限内に返さない人も増えていきました。原因として、カウンターでの返却がめんどくさい・昼休みに来れないなどがあると考えられます。そのため、利用者が利用しにくい状況にあるため、また減少してしまうおそれがあります。

解決案

①何でもBox(仮)を設置する。
②返却口手直し

1. 貸出時、本の封筒にカードを入れる。
2. 返却時に本をBoxに返し、カードを図書員がカウンターに見る。
3. 図書員よりBoxの前の返却した本を見る。

根拠

本を返却しない人の原因として、手戻しがめんどくさい・昼休みに来れないなどの問題がなくなる。
+α 相模原市図書館の本にこのBoxに返却Boxがある。このBoxは貸出時、返却時に目録簿(リクエスト)が設置されている。

なぜ… **何でもBox(仮)を設置する**

これにより、本の貸出をスムーズにし、めんどくさい・時間がないといった利用者の問題を改善できる。また、本に関するアンケートやリクエストも取るようにし、より本への関心を深められる。他に、Boxの外側におすすめがスターやお知らせなどを貼るスペースを設けることで、返却口付近に見える。

【学習者が作成した一枚企画書（A4）】

(1) 考えるための材料（根拠）をもたせる。

公共図書館へ訪れて得た情報は、自分の考えを支える切実な根拠となる。

(2) プレゼンテーションを行う。

学習者同士が新しい視点を取り入れながら、よりよい考えを導くことが可能となる。

(3) 企画を実際に実行する。

学習を通して構築された考えが日常生活に生かされる場面を用意する。

9 まとめ

「限られたスペースに自分の考えをまとめるのは思ったより難しかったが、何度も書き直しているうちに、最後には一番言いたい内容だけが残りに、すっきりまとまった。友だちにも自分の考えをうまく伝えることができたのでよかった。」

今後とも他者を意識した学習の場を設けていく中で、自分の考えを簡潔に相手に伝えることの意義とその必要性を実感させながら、目標とする力に迫りたい。 (杉本 直美)

郷土の詩人「朔太郎の世界」をパンフレットで紹介する

イ（イ）日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

1 身に付けたい力

解説書や作品集から必要な材料を集めたり、自分の感想を適切にまとめたりするとともに、目的に合った構成を工夫して書く力を高める。

2 主たる評価規準

朔太郎の詩人としての業績を適切にまとめたり、代表作の鑑賞文を書いたりするとともに、構成を工夫して紹介パンフレットの記事を書いている。

3 単元・題材

郷土の詩人「朔太郎」の紹介パンフレットをつくらう

4 指導のねらい

現在、書く活動についても、日常生活の中で用いられるような言語活動を取り入れ、社会生活に生きて働く書く力を育成することが重要である。本題材では「紹介パンフレットづくり」を取り上げ、解説書や資料から必要な情報を取り出したり、自分の感想をまとめたりするとともに、項目に合った構成を考えて書く活動を行う。この活動によって、テキストから必要な情報を取り出す能力や、目的に応じた構成を工夫して書く能力の育成を図っていく。さらに、紹介パンフレットだけでなく、日常目にするポスターやチラシ、新聞等を作成するために必要な目的や読み手を意識して書く能力を高めていく。

5 単元・題材について

本題材では、「必要な材料を集め、自分のものの見方や考え方を深めること（B書くことア）」「文章の形態に応じて適切な構成を工夫すること（B書くことウ）」を身に付けさせるための題材である。本題材で扱う萩原朔太郎は、郷土の人々に愛されている前橋出身の詩人であり、口語自由詩の確立という近代詩を大きく変えたわが国を代表する詩人である。前橋に住む生徒にとって、郷土の詩人についての知識を深め、作品を鑑賞することによって自分なりの感想や考えをもつことは重要である。また、それを紹介パンフレットという形態に合う構成を考え、目的に応じて書く能力を育成することも重要である。

6 使用するテキスト

「郷土前橋の詩歌」（前橋市教育委員会編）

「ふるさとの文学」（群馬県小学校中学校教育研究会中学校国語部会編）

本題材では、朔太郎を取り上げた二つの資料を中心に材料を集めていく。この資料により朔太郎の詩人としての業績の他、代表作の鑑賞により、鋭い感情の高ぶりをあらわに表現した独得な詩風や、朔太郎の郷土に対する思いなどを読み取ることができる。本題材で朔太郎を取り上げることで生徒は、表現に着目して作者の心情を自分なりに読み味わうことができたり、普段なじみの少ない近代詩に触れて詩への認識を深めたり、郷土の文学への興味・関心を高めるきっかけをつかんだりすることができる。

7 授業の実際（6時間扱い）

(1) 朔太郎の作品を読み合ったり、詩人としての業績を調べたりして、朔太郎に対する興味をもつ。（1時間）

まず、市内にあるすべての朔太郎の詩碑を紹介し、市民に愛されている朔太郎について興味・関心を高めさせる。次に、テキストを活用して「広瀬川」や「竹」等の朔太郎の代表作を読み、朔太郎の詩に親しみ作風を感じ取れるようにする。さらに、島崎藤村の詩と比較させ、口語自由詩を確立した朔太郎の業績について考えさせる。

(2) 「朔太郎紹介パンフレット」の全体の構成を考え、材料を集める。（2時間）

最初に、いくつかのパンフレットの例を示し、朔太郎のことを知らない他県の中学生など読み手を設定させ、パンフレット全体の構成を考えさせる。その際、朔太郎の生い立ちや詩人としての業績など朔太郎を知る上で必要な情報を記すことと、自分が気に入った朔太郎の詩を紹介しそれについての鑑賞文を記すことを条件とする。次にテキストを読んで必要な情報を収集する。ここでは、自分が感じ取った朔太郎の世界を伝えられるようにするために、「口語自由詩を確立した朔太郎」や「郷土をうたう朔太郎」など、情報収集の視点を見いださせ、必要な材料を集めさせる。

(3) 構成を工夫して「朔太郎紹介パンフレット」の記事を書く。（2時間）

必要な材料を収集できたならば、2～3のパンフレットの記事を書く。ここで中心となる記事は、400字以上とし、三段ないし四段構成で、読み手の興味を引き、分かりやすい文章となるように構成を工夫させる。ここで重要なことは、単に朔太郎の詩人としての業績や作品の概要をテキストから引用するだけでなく、自分が感じ取った世界を明確にして、それを読み手に伝えることを中心とし、構成を組み立てさせることである。

(4) 「朔太郎紹介パンフレット」を互いに読み合い、評価する。（1時間）

ここでは、互いに作ったパンフレットを読み合い評価する活動を行う。ここで重要なことは、例えば「解説書や作品集からパンフレットに必要な材料を集めている。」

「自分が感じ取った朔太郎の世界を伝えるための構成を工夫している。」等、本題材で身に付けさせたい力を基に観点を設定し、評価させることである。

8 この授業を行う際のポイント

この授業では、パンフレット作りという言語活動を通して、テキストから必要な情報を取り出す能力や、目的に応じた構成を工夫して書く能力の育成を図ることをねらいとしている。パンフレット作りというと生徒は、単に羅列的にテキストから情報を写し出したり、レタリングや写真等、装飾面のみに目を向けがちな面もある。そこで、自分が伝えたい内容をテーマ（視点）として明確にさせ、それにかかわる情報を集めさせたり、読み手を意識して内容や構成を工夫させたりすることが重要である。

9 まとめ

本題材で扱った「萩原朔太郎」は郷土前橋を代表する詩人である。紹介パンフレット作りという活動を通して、生徒たちは郷土の詩人についての知識を深め、作品を味わいながら郷土文学への興味・関心を高めていくことができる。パンフレットという現在、様々な場面で目にする媒体づくりを行うことで、書く能力を高めることはもちろん重要であるが、その過程の情報を収集する活動においても、新たな知識を獲得したり作品を自分なりに鑑賞したりして、知識を豊かにしたり、ものの見方や考え方を深めたり、文学や言葉への興味・関心を高めたりすることも国語の力を高める上では必要である。（栗本 郁夫）

収集した情報を読み、パネルディスカッションのためのメモを簡潔に書く

ウ（イ）自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

1 身に付けたい力

自らの立場を明確にしなが、読んで理解した内容を関連付けて、自分の考えや思いを、簡潔に効果的に伝える力を高める。

2 主たる評価規準

読んで理解した内容について、自分の考えや思いを明確にし、簡潔で効果的に伝えるための具体的なメモを書いている。

3 単元・題材

パネルディスカッションで自分の思いを簡潔に述べよう。(三省堂)
～テーマ「平和な世界を築くには」～

4 指導のねらい

パネルディスカッションでは、自分の立場や意見を明確にして、理由や根拠を具体的に述べる力が求められる。この学習では「平和な世界を築くには」というテーマを設定し、中学生としての自分の考えを述べることを中心に置く。そこで討論するのに十分な意見を出していくために、ある想定した立場に身を置く設定でパネルディスカッションを展開する。意見を述べるまでに今まで読んで解釈してきた文章、資料、写真などを分類し、自分の立場に合わせて論点を明確にしなが、簡潔に説明するための能力を高めていくことを考えたい。

5 単元・題材について

「パネルディスカッションをしよう」という単元の中の、話すためのメモを書くプロセスを「読解力」の視点から見直してみたい。これまでの学びでは、伝える工夫を考えるポスターセッションや、立場を意識する討論ゲームなどに取り組んできた。今回は、資料を読み、感じたり思ったりしたことを、パネリストとしてどのように簡潔に分かりやすく表現できるかということを目指し、簡潔なメモをどのような書式に表していくかを丁寧に考えたい。

また、これまでの「読むこと」においては、『平和を築く』『凧になったお母さん』『地雷と聖火』など、平和をテーマに据えた読書活動や読書郵便などの言語活動に取り組んでいる。平和というテーマを中心にしながら、自分自身の成長とともにどんなこと発信できるか自ら考え、意見を明らかにしていく学習指導に結びつけていく。

《パネリストとしての立論のメモを書くためのヒント集》

- ・ 書式 A4、1～2枚
- ・ 事実を確かな根拠から述べる。
→具体的な数字や事例など
- ・ 自分の主張をどのように伝えるのか、はっきり盛り込む。
→立場、論点を明確にすること。
- ・ 使う資料を（写真や掲示物）示す。
- ・ 予想される意見を想定する。

6 使用するテキスト

- ・ 教科書を中心にこれまで扱ってきた平和をテーマにする読み物。
- ・ 図書室の写真集
- ・ インターネット情報

7 授業の実際（7時間扱い）

（1）パネルディスカッションの概要を知る。

- ・ テーマ「平和な世界を築くには」を確認する。

（2）テーマと立場を確認し、発表内容の検討をする。

《主張する立場－例－》

A 人との交流から考える立場（国際交流）

B 政治や経済から考える立場

C 過去の歴史から学んでみよう

する立場（世界、日本の現代史から学ぶ）

- ・ テーマに沿った立場を設定する。
- ・ 立場ごとのグループで意見を出し合い、意見の根拠となる情報の収集、整理を行う。
- ・ グループごとに、発表内容を検討する。

（3）収集した情報をもとに、具体的な提案主張の根拠、予想される反論や質問などを考える。

- ・ グループを代表して完成した原稿メモをもとにパネリストを選ぶ。

（4）パネルディスカッションを開く。

- ・ 自分たちの選んだ立場から、情報や事例を通して意見を簡潔に述べる。
- ・ パネリスト以外にも、フロア（聴衆）となり、討議に参加する。

（5）パネルディスカッションを振り返る。

8 この実践を行う際のポイント

この学習では、パネリストが自分の立場を述べる際、明確な意見と理由を短い時間内にまとめて発表していく力が必要になる。たくさんの資料から何を読み取り、何を発信していくか、場面や発言の状況に応じて自分の話し言葉として簡潔にまとめて発表する学習者一人ひとりの力を付けるために次の点に留意する。

（1）全員がパネリストの立場を想定し、原稿を考える。（グループの代表だけが発表するという意識ではなく、学習者それぞれに自分の考えをもたせる。）

（2）パネリストとしての立論のメモを書くためのヒント集を示し、具体的な意見の組み立てとして活用させる。

（3）自分とは違う立場の意見を聞き、自分の表現に役立てていくことを意識させる。

9 まとめ

自分の考えを相手に明確に伝えようとするプレゼンテーションの能力は、将来社会に出てから欠かすことのできない力である。学校という社会で互いのコミュニケーションが成立するような活動を1年次から積み重ねていくことが重要である。特に3年では、用意した原稿をそのまま読み上げるのではなく、場面や必要に応じて発言し、説明することのできる力がいっそう求められる。情報の取り出しから、熟考、自分の考えを論じていく活動の中で、何をどんな風に発信したら相手に効果的に伝わり、自分の思いが伝えられるか、吟味していく授業を組み立てていくことが大切である。

（竹下 恭子）

Ⅲ 中学校 国語以外の教科

等角図で描かれた立体を第三角法による正投影図で表す

ア（ア）目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

1 身に付けたい力

等角図で描かれた立体を読み第三角法による正投影図で描き直すことにより、頭の中で立体を想像しながら理解し図を解釈する能力を高める。

2 主たる評価規準

簡単な立体を描いた等角図を読みとり、形状や寸法などを理解し、第三角法による正投影図で表現することができる。

3 単元・題材

ものづくりの基礎を学ぼう

4 指導のねらい

どんなものを作る場合でも、設計という作業はとても大切で欠かせないものである。製作品の機能・構造・材料・加工法などについて検討したことをもとにして正確な設計図が描けるかどうかで作品の完成度まで決まってしまうと言っても言い過ぎではないだろう。しかし中学1年生の段階ではものづくりの経験が浅いので、頭の中に思い浮かべた立体を紙の上に描く作業は難しい。

そこで、ここでは等角図で描かれた簡単な立体を第三角法による正投影図で描き直すことにより立体を頭の中だけで正確に想像する練習をする。このような学習を通して図を正確に読み、そして表現する能力を高めていきたい。

5 単元・題材について

「技術とものづくり」の学習では最終的に自分で必要なものを構想・設計し製作する問題解決的な学習を目指したい。しかしそれを実現させるためには工具の使い方はもちろん、きちんとした構想の検討と正確な設計図を描く能力の育成が欠かせない。中学校入学後最初の実習となるこの題材では、ものづくりに必要な技能や知識の基礎を体験を通して身に付けさせることをはじめ、構想を検討する際に必要な機能・加工法の検討といった思考力・判断力の育成までもを目標としている。

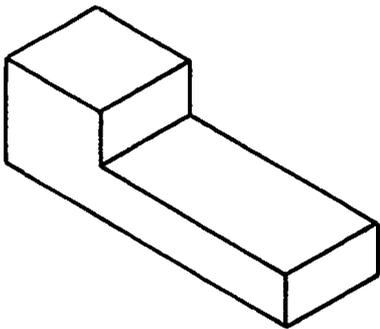
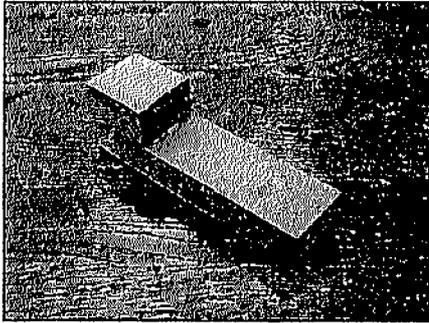
6 使用するテキスト

今回は等角図で簡単な立体を描いた図を使用するテキストとして取り上げている。等角図では一つの図だけで立体の全体を描くために各面がゆがんで描かれており、各面の正確な形や水平・垂直以外の辺の長さは想像して判断することになる。等角図を読み取り第三角法による正投影図で正確に描き直すためには、頭の中で立体を見る角度を変えたり回転させたりしながら立体の形状や寸法を考える必要があり、思考力・判断力・想像力を高めることにつながる。

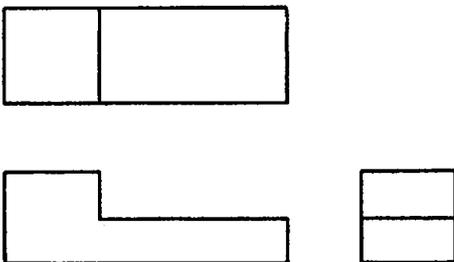
7 授業の実際 (10時間扱い)

(1) 設計図のはたらき、必要性、特徴などを考える。

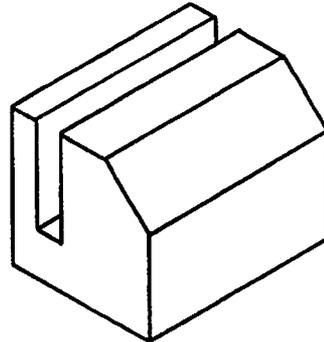
(2) 練習用の立体を使って等角図の描き方を練習し身に付ける。図と実物を比較し等角図の特徴を考えさせる。



(3) 等角図のときと同じ練習用の立体を使って第三角法による正投影図の描き方を練習し身に付ける。二つの方法で描かれた図と実物を比較し、それぞれの図の特徴を考える。



(4) 等角図で描かれた立体を第三角法による正投影図で描く。



(5) 自分が製作する作品の設計図を等角図で描く。

(6) 設計図に従って作品を製作する。

8 この授業を行う際のポイント

(1) 読み取る等角図はいくつかの難易度のあるものを工夫して用意する。図にする立体は直方体をベースに数カ所を削り取ったり溝を切った程度のものでし、難しくなりすぎないようにする。

(2) 生徒は製図に慣れていないので等角図用には斜眼紙、正投影図用には方眼紙を使わせるとよい。

9 まとめ

紙に書かれた図を読み取って頭の中で立体の正確な形を想像する力を身につけるためには、何度も繰り返し練習することが必要である。製図の指導は作品の製作のためだけでなく、読解力の向上にもつながるので大切にしていきたい。

(朝比奈 忍)

レシーブの構え(フォーム)から、次の動きを予測する

ア(ア)目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

1 身に付けたい力

空中をボールが飛び交うバレーボールにおいては、瞬時にボールの落下点を見極め、仲間(自チーム・相手チーム)の動きを予測して動いていくことが必要とされる。場面や状況に応じて、どのような動きが必要とされ、また、どのように動くことが効果的であるかを図から読み取り、その場面での自分の動きをイメージする力を高める。

2 主たる評価規準

教示文と図に示された場面から状況を読み取り、次に起こるプレーを予測することができる。その場面で必要とされる自分の動きを理解し、実際のゲームでの動きとして生かすことができる。

3 単元・題材

レシーブの構え(フォーム)から、次の動きを予測する。

4 指導のねらい

相手コートからのボールをレシーブする仲間の構え(フォーム)から、接触後のボールの動きを予測し、ラリーを長く続けるために自分はどう動くべきかを考える。

レシーブの際に陥りやすい状況を図で示し、良い例と比較しながら、その問題点・修正が必要な点は何かを考える。また、良い例の構えでレシーブした時とそうでない時とのボールや人の動きについても比較し、1つのプレーが次のプレーにと連動していることを明らかにする。

実際のゲーム場面をイメージすることから自分の体の感覚として捉え、基礎的な技能の見直し、ボールコントロール能力の向上を図ることにもつなげていきたい。

5 単元・題材について

バレーボールの主な特性として、次の3点が挙げられる。①相手チームとネットを挟んでプレーをする。②ボールを持って(静止させて)はいけない。③同じプレーヤーが連続してボールに触れてはいけない。これらの特性を理解し、バレーボールの楽しさをより味わえるようにするには、基礎的な個人技能を身に付けることはもちろん、各プレーヤーが次のプレーを予測してカバーし合う動きが必要とされる。

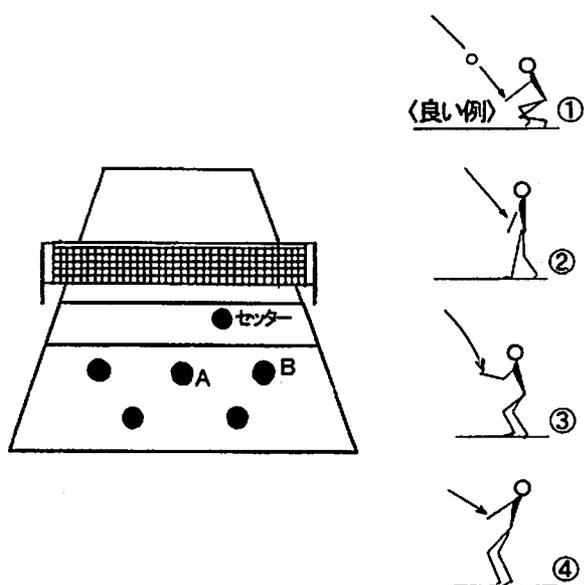
しかし、実際のゲームの場面では、ネットの高さやネットとの距離を意識したり、他のプレーヤーの動きを視野に入れながら動いていくことは容易ではない。そこで、客観的に動きを分析することによって、ラリーがより多く続くためには自分がどのように動くべきかを理解する。また、分析を通して自分以外のチームの仲間の動きについても注目させ、それぞれの役割をより明確にしていきたい。



6 使用するテキスト

次に示す、図と教示文をテキストとして用いる。

相手コートからオーバーハンドパスで返球された、山なりのボールをAの選手が、下図①～④のような構えでボールに触れようとした時、Bはどのように動きますか。相手コートには3本で返球することとします。



7 授業の実際（8時間扱い）

- (1) 基本的技能（パス・スパイク・サーブ）を実際に動きながら確認する。
- (2) 簡易ルールของเกมを行う中でボールに慣れ、カバーリングの動きを意識しながら、ラリーを続ける感覚を身に付ける。
- (3) 試しのゲームを行い、個人やチームの課題をチームごとに話し合い、学習ノートに記録する。
- (4) レシーブの良い例を参考にしながら、各プレーヤーのレシーブ時における問題点・修正が必要な点をチームごとにアドバイスしあう。
- (5) 良い構えでレシーブした時とそうでない時とのボールや人の動きについて書き上げ、比較・検討する。
- (6) ゲームを行い、動きの変化について着目して意見を出し合う。個人やチームの課題を再確認し、どんな練習が必要かを検討する。

8 この授業を行う際のポイント

レシーブの構えの良い例と悪い例をただ単に見て理解するだけではなく、その構えでボールに触れた後のボールや他の仲間の動きを予測する活動を通して、基礎的な技能をしつかりと身に付けることの大切さに気付かせたい。

この展開例では、相手コートから「コート中央に位置する」選手Aのところに「オーバーハンドパスで山なりのボール」が返球された。その時、「Aの構えは①～④」であった。これが、その後のBの動きを予測し、読み取るポイントとなっている。どのような場面を設定しているのかを明確にし、生徒たちがその場面をイメージしやすいように条件を示すことが大切である。

技能レベルが低い場合には、図に示すコート内の人数を減らし、技能レベルが高い場合には、コート内にいる全員の動きを考えさせるなど、技能レベルに応じた場面設定の変化も可能となる。また、同じ位置にきたボールでも、その球質やスピード、チーム内での役割やポジションによって、ボールの見え方は変化し、動きも異なってくる。いずれにしても、1つのプレーが次のプレーへと連動していることを理解させることが大切である。

9 まとめ

ボール遊びの経験が少なく、自分の体をどのように使ったら思い通りにボールをコントロールできるかを理解できていない生徒も数多い。今回のように客観的に動きを分析することで仲間の動きも広く見えるようになり、チーム内での自分の役割が更に明らかになる。同時に、動きに連続性や連携が生まれ、ラリーをつなげることによって楽しさを感じるバレーボールの特性をより味わうこともできる。

瞬時に判断し、その場に応じたプレーが必要とされる球技においては同様な取り組みが必要であり、可能であるといえる。(鷺田 千夏)

マトリックスの作成を通してテキストを理解・解釈する

ア（ア）目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

1 身に付けたい力

テキストに書かれた情報を解釈する力をつける。

2 主たる評価規準

マトリックスの作成を通してテキスト（文字情報）の内容を適切に理解し、解釈している。

3 単元名

「エネルギー資源の利用」

学習指導要領 1 分野(7) 科学技術と人間 ア.エネルギー資源(ア)

4 指導のねらい

理科では、実験結果や様々な情報が図や表・グラフなどで表現されていることは多い。図や表・グラフなどの図解は何かの情報を伝えるときに非常に分かりやすく簡潔になる。ここで取り上げる図解の1つであるマトリックスは、タテ/ヨコのマス目に区切られたセルに情報を整理する方法で、複数のものを並べて見ることで、不足や不整合、同一項目に関する差に気がつきやすくする利点がある。通常、マトリックスは資料として与えられていることが多いが、この指導では、未完成なマトリックスを完成させる学習を導入することにより、テキストの内容を深く理解し、解釈を加えながら読み取る力を育成させたい。

5 単元・題材について

本単元は、電気を得るために利用されてい

る資源について、特に火力・水力・原子力を取り上げ、各発電の長所と短所について、資源の確保と自然環境との関連を考察させ、エネルギーの有効利用の大切さを学ばせるものである。これらの内容は、教科書に「水力発電」「火力発電」「原子力発電」と小見出しが付けられ、文章及び図・表も含め1ページ程度の記載がされている。

次に、これらの内容を読解力育成の視点においてどのように扱うかを述べる。文章読解の方法について次の3つパターンを考えた。

(1) 文中に答えを示す明確な表記がある場合
文中にあるキーワード（「〇〇などの問題がある」「〇〇など効率がよい」等）に注目して答えを見つける事ができる。

(2) 文意を考えれば理解できる場合

「〇〇の原因のひとつになっている」等は、読み手が「〇〇の原因」は長所なのか短所なのかを解釈して答える。

(3) 直接的に文章で表現されていない場合

この場合は、「筆者の考え、意図」を既習事項の知識をリンクさせて理解しなければならない。例えば文中に「化石燃料」の表記があれば、「化石燃料は埋蔵量に限りがある」という知識をリンクさせて理解する。

(1)～(3)のような文章の読解は、通常文章を読み頭の中で思考し理解することで終わってしまうことが多い。しかし、ここではマトリックス作成を導入することで、文章内容ひとつひとつを理解・解釈し、簡潔な文に要約して表現する学習過程が組み込まれること

になる。これによって読解力がどの程度あるか評価をすることができる。また、ここで取り上げる3つの発電方法は、日常よく耳にする馴染み深いものであるので、5(3)のような読解パターンでも比較的容易に読解ができると考えられ、その点において題材として意義深い。

6 使用するテキスト

あえて使用している教科書会社以外の教科書をもとにテキストを作成し、図や表は入れず、文字情報のみ取り扱う。次に示す資料1は解答編に用いたもので、教材として生徒に配布するときは、下線部及び表の(ア)～(コ)のマス内の表記はない。又、表内の網掛け部分は、あらかじめヒントとして与えてある。

問題 次の文章に含まれる情報、またはそこから推測されることを整理分類して図1の空白部分を埋めなさい。推測できない場合は「不明」と書きなさい。

現在、日本の発電所での発電は、水力(ア)発電、火力発電(イ)、原子力発電(エ)の3種類の発電方式で行われている。

水力発電は、日本では山の多い地形を生かし、1960年代までは発電の中心を占めていた。また、二酸化炭素などの発生が少なくクリーンなエネルギー(カ)である。しかし、大規模なダムを造る場所が少なくなった(ク)ことや、ダムを造ることによって地域の自然環境を大きく変えるなどの問題(ケ)が生じ、現在では大規模な水力発電所の建設は難しくなっている。

火力発電は、発熱量が大きく液化して運べるなど強いやすい。しかし、化石燃料(キ)の燃焼によって大量のエネルギーを得るために、大量の二酸化炭素の発生(ク)をともなう。二酸化炭素は熱を吸収する性質があるので、二酸化炭素は熱を吸収する性質があるので、二酸化炭素が増加すると、地球温暖化の原因(ケ)のひとつになっている。

原子力発電では、燃料として放射能を出す物質(イ)が用いられる。少量(エ)の核燃料(イ)から大量のエネルギーが得られて効率がよい(エ)。放射能は、医療技術や農作物の改良などに利用され、生活に役立っている反面、人体や作物に大量にあたると危険なので、常に厳しく監視して、安全を確保する必要(コ)がある。また、万一事故が起きた場合の放射能汚染防止や、使用済み核燃料の安全な処理(カ)など、今後さらに研究して解決しなければならない問題が残されている。

図1

	水力発電	(ア)火力発電	(イ)原子力発電
エネルギー源	(ア) 水力	石油・石炭・天然ガス・石炭	(イ) 放射能物質、核燃料
利点	(カ) 地球温暖化の原因になる二酸化炭素の発生が少なくクリーンなエネルギー	燃料費が安く、大量のエネルギーを得ることができる	(キ) 少量の核燃料から大量のエネルギーが得られ効率がよい
地球に与える影響	(ク) 広大な土地が必要 広域の自然環境の破壊	(ケ) 化石燃料の埋蔵量に限りがある 地球温暖化の原因になる大量の二酸化炭素発生	(コ) 常時厳しい監視と安全確保が必須 事故時の放射能汚染防止 使用済み核燃料処理

(資料1)

7 授業の実際 (1時間扱い)

(1) 教科書や資料集などは一切見せず、文字情報のみ表記されたテキストと未完成なマトリックスを表示した資料1を配布する。

(2) 15分でマトリックスを完成させる。このとき、教師は机間指導を行い、つまづいている生徒にはヒントを与える。

(3) (ア)～(コ)について、どのような文を記述したか、それは、テキストのどの部分の表現をもとに考えたのか発表させる。このとき、教師はすぐに「正解」などとは言わず「なるほど」「他の考えはありませんか」などと対応し、内容が同じでも違う表現をしていた場合や、根拠となるテキストの文章が違う場合も積極的に発表させ取り上げていく。

(4) 生徒からでなかった答えについては、マトリックスの表を使い「(コ)の部分では、まだ答えがあります。気づく人はいませんか？」などと発問する。

(5) まとめる

8 この実践を行う際のポイント

(1) テキストでは「5 単元・題材について」で述べた(1)～(3)の読解パターンを取り入れる。例を次に示す。

読解パターン(1) : (ア)(イ)(エ)等
 読解パターン(2) : (カ)(キ)(ク)等
 読解パターン(3) : (ケ)の「埋蔵量に限りがある」(コ)の「利点(長所)」等
 註 (ア)～(ケ)はマトリックス内にある記号

(2) 答えを発表させるときは、すぐに「正誤」のコメントを避け、様々な考えや表現があることを引き出させ、自分の意見や考えをしっかりと人前で述べさせる。

9 まとめ

教科書を読んで内容を図表でまとめさせる活動をすることで、より深く読解する学習になる。学習難易度を上げるときは、マトリックスの表を全てつくらせる。また、別の方法として、同じような図表をいくつか提示し、テキストに書かれた内容を理解するのに一番適している図表を選ばせ、なぜ選んだのか理由を述べさせるなどの学習も考えられる。

(渡部 光昭)

課題の本質をつかむための考察をうながす

ア（ア）目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

1 身に付けたい力

テキストから何が課題であるかを自ら読み解く力、その課題を数学的にとらえ解決する力、さらに、解決の過程をふり返り問題の本質を見抜く力を高める。

2 主たる評価規準

批判的な読みの中から論理的でなければならない部分を自分で見つけ出し、今後何をすべきか考えることができるか。深く読み込むことから物事の本質を捉えることやそのような活動へ意欲的に取り組むことができるか。

3 単元・題材

三平方の定理の証明

4 指導のねらい

三平方の定理の証明は多種多様であり、どれも興味をそそるものである。証明には中学生で学習する図形の性質を数多く盛り込んでいて、図形領域の総まとめとして意義深い単元である。本授業で取り扱う証明の意義として次の2つのことが考えられる。

①視覚的に成り立ちそうなことを論証する際に、何を証明すればよいかを考えさせる場面を設けることができる。

②証明の内容と切り方を照らし合わせ、どのように切ったから証明が完成したか、違う切り方

をしたら証明は完成しないのかといった、切り方の本質を考えさせる部分が残っている。

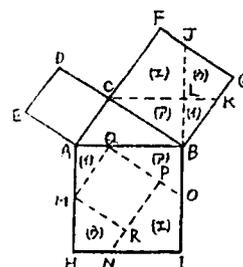
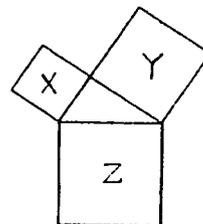
このようにテキストを深く読み込むことから物事の本質を捉える力やそのような活動への意欲を育成することができると思う。

5 単元・題材について

三平方の定理が成り立つことをパズル的に認めることができるので、取りかかりやすい説明の方法である。また論理的に証明する際に、何について考えればよいかを自分で見いだす必要があるところに主体性を求めることもできる。さらに証明の内容を深く読み解くことによって切り方の本質がつかめ、より一般的に切り方を見つけることができる。

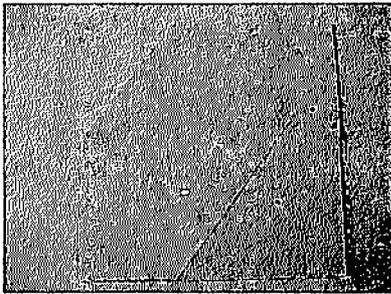
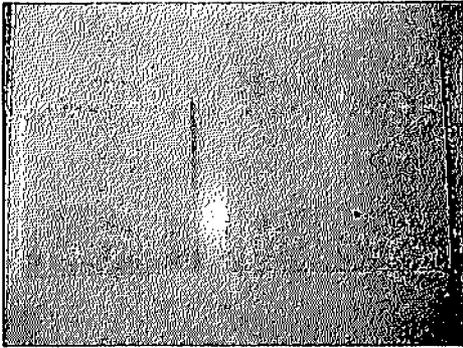
6 使用するテキスト

図形を動かして $X+Y=Z$ になることを確かめよう



7 授業の実際（5時間扱い）

(1) Xと4つに切り分けたYの計5枚の図形を組み合わせたものがZと一致することを確認させる。



(2) ぴたりと一致することを証明するには、どんなことを示せばよいか考えさせる。

- 図形の中に隙間や重なりがない。
- Nが線分HI上にある。
- 四角形MRPQが正方形である。など

(3) (2)で取り上げた内容を証明させる。

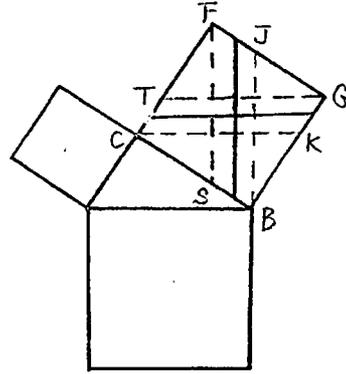
- $\triangle ABC \cong \triangle KCB \cong \triangle JBG$ より
- $AB = KC = JB$
- など

(4) 切り方について、変更してはいけない条件、変更しても大丈夫そうな条件を検討させる。

- $AB \parallel CK$ 、 $AH \parallel JB$ は変更できないのではないか。
- $JB \perp CK$ は変更できないのではないか。

(5) 学習のまとめ

縦、横ともに切り取り線が点線内であればよい。
(縦はJBに平行でFSまでの間、横はCKに平行でTGまでの間)



8 この授業を行う際のポイント

- (1) 視覚的にできたことを論理的に考察する際に何を証明しなければならないか自ら探し出す必要があるが、その際テキストを批判的な読み方をする必要がある。
- (2) 証明した後に、「切り方を変えることはできないか」という指導者の発問から、証明の内容を読み返し、融通が利きそうな部分を見いださせることにより切り方を一般化させる。
- (3) 課題を解決した後に、条件をかえて考察することで、問題の本質をつかませる。

9 まとめ

読解力を身につけるには、与えられたことを解決するだけでなく、本実践のように自ら課題を見つけ、考察し、本質を見抜くというような活動も重要である。

(田中 修二)

図形の性質を証明する記述を評価する課題

ア(イ) 評価しながら読む能力の育成

1 身に付けたい力

文章を読み、それにふさわしい図が正しくかけるようになる。また、その証明が根拠に基づく正しいものであるかをクリティカルに読み、改善すべきところを的確に、理由付けて指摘することを通して、評価しながら読む能力を身に付ける。

2 主たる評価規準

他の人がかいた図形の証明を読んで理解し、その証明に不適切な部分がないかを吟味でき、もし不適切な部分があればそこを指摘でき、他の人に納得がいく説明ができる。

3 単元・題材

「平行四辺形になるための条件」を利用した証明について考える。

4 指導のねらい

証明を苦手とする生徒が多いことから、記述されている証明を熟読し、改善点を考える。また、別の証明方法を考えることを通して証明する力を高める。

5 単元・題材について

本単元では、前章で学習した初歩的な証明の進め方を基に、定義から図形の性質を証明し、その定理を根拠に次々と証明を行うことで、論証について理解を深めることをねらいとしている。「平行四辺形になるための条件」

は「平行四辺形の性質」を表す命題の逆として条件をとらえさせて証明を進めるが仮定・結論を正しく認識できず、命題と逆の命題を同一視してしまうことで条件についての理解が十分ではないことに気付くことが多い。また、「平行四辺形になるための条件」を利用して、仮定を基にして、結論を提示して証明を考えるのではなく、自ら結論を推測し、その推測した結論について証明を進めることができる題材である。

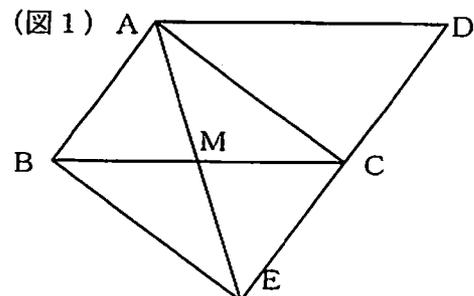
6 使用するテキスト

様々な問題で実践可能であるが、例えば次のような証明問題を取り上げる。

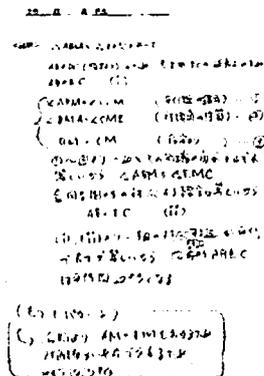
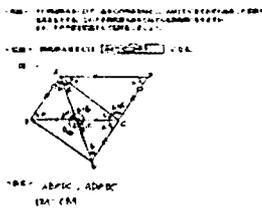
「平行四辺形 $ABCD$ で、辺 BC の中点を M とし、 AM と DC をそれぞれ延長した直線の交点を E とする。このとき、四角形 $ABEC$ はどのような四角形になりますか。また、そのことを証明しなさい」

7 授業の実際(1時間扱い)

(1) 各自テキストを読み取り、正しい図形を描く。(図1)



- (2) 各自が結論を推測し、その結論に到達するべく証明をする。(資料1)
(資料1)



- (3) 不適切なところがある証明(資料2)を提示し、その問題点を考えさせる。
(資料2)

△MABと△MCEにおいて

$$\begin{cases} BM = CM & \text{(仮定)} & \text{①} \\ \angle BMA = \angle CME & \text{(対頂角)} & \text{②} \\ AM = EM & \text{(仮定)} & \text{③} \end{cases}$$

①②③より

2辺とその間の角がそれぞれ等しいから $\triangle MAB \equiv \triangle MCE$
合同な図形の対応する線分なので

$$AB = CE \dots \text{④}$$

同様にして

$\triangle BEM \equiv \triangle CAM$ なので

$$BE = CA \dots \text{⑤}$$

④⑤より

2組の対辺がそれぞれ等しいから
四角形ABECは平行四辺形である。

- (4) 不適切であるところを指摘させ、改善させる。(資料3)
(5) 別の証明方法について発表させる。
(6) それぞれの証明を全体で評価しあう。

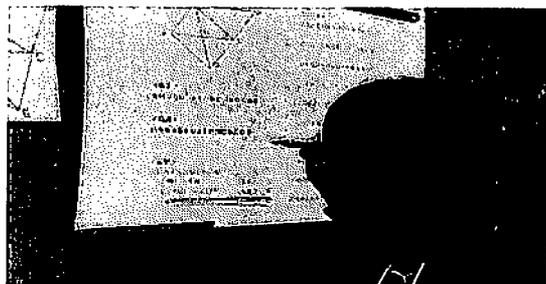
8 この授業を行う際のポイント

- (1) 問題の提示は、図を添えずに文章だけで表現し、生徒が図をかくことができるか、また図に等しい線分や角を記号を使って書き込むことで問題を正しく読めているかを机間巡視しながら判断できる。
(2) 不適切なところがある証明をどのように作るかが問題になるが、生徒の実情や授業進行に合わせて工夫することが大切であると考え。
(3) できれば様々な証明方法が考えられる問題で実践し、様々な証明方法を発表させたり、お互いに評価しあうといった活動も盛り込みたい。

9 まとめ

- (1) 「読解力」をつけるという視点から授業を展開する場合は、生徒が証明を板書した際に、すぐにその説明をさせるのではなく、その証明を評価しながら読むという機会を与えることも必要であると考え。
(2) 図形の証明では、文章だけで問題を提示し、それから正しく作図できるかというところから始めることで、テキストを目的に応じて理解し、解釈する能力の育成も望める。(大谷 一)

(資料3)



消費者の一人としてどのような「選択」をしていくべきかを考える

ア（イ）評価しながら読む能力の育成

やサービスの適切な選択・購入・活用ができるようにするために、情報を見極め評価し、日常生活に生かすようにする。

1 身につけたい力

自分の課題に必要な情報を収集し、その特質を見極め、評価しながら読む力を高める。

2 主たる評価規準

収集した情報のもつ特質を理解して、自分に必要な情報を選択している。

3 単元・題材

消費者の一人としての「選択」をする

4 指導のねらい

情報収集というと先ずインターネットから・という生徒たちが多い。しかし、情報はインタビュー、書籍、CM、パンフレットなどからも得ることができ、それぞれに特質がある。それを見極め自分なりに評価して日常生活に活かしていくことが重要である。

そこで、適切な情報提供方法を選び、効果的に提案するために、さまざまな販売方法の特徴や消費者保護について収集した情報を見極め、選択させる。さらに収集した情報の特質を自分なりに評価し、分析する力を高めさせたい。これらの活動が多面的なものの見方や思考力の向上につながるものと期待する。

5 単元・題材について

設定の目的は、あふれる情報に囲まれた環境の中で生活している生徒たちに「情報の中から自分に必要な適切な情報を収集・分析・選択できる」力を身に付けさせることと、消費者の一人としての的確な判断力と意思決定力を身につけさせることにある。

具体的には、さまざまな販売方法の特徴や消費者保護について知り、生活に必要なもの

6 使用するテキスト

教科書の他に、横浜市消費生活総合センターの「これであなたも買い物達人」、かながわ中央消費生活センターの「かしこい消費者になろう！」のリーフレットなど、比較的新しい図表やデータなどを含んだものを共通の情報源とし、インターネットやインタビューなどは、生徒の自由裁量で活用している。

7 授業の実際（7時間扱い）

- (1) 自分の購入したいものの情報源であるちらしや広告、雑誌などを持参する。その情報を「購入者としてどこに着目して選択するか」「販売側として何を意図して情報を提供するか」を、それぞれの立場になって考え、意見を交換する。
- (2) 販売方法別の5人のチームを編成し、各チームごとに、その特徴に関する情報収集と調査活動をして、使える情報の選択、課題の分析後、提案の情報提供方法を考え、プレゼンテーションの制作をする。
- (3) チームごとに模造紙、紙芝居、ビデオ、ロールプレイング、コンピュータソフトでのプレゼンテーションなどを組み合わせて5分で発表し、相互評価する。
- (4) 他チームからのコメントも参考に、プレゼンテーションをふり返り、自分やチームが収集してきた情報と、その特質を評価してクラスで共有する。

★他チームの情報提供の方法から学んだこと

- ・何よりも相手に伝わらなければ意味がないので、聞き手の目を見て話す速さと声の大きさ、活字の大きさや色に気を付ける。
- ・実際に目の前で劇をしたり模造紙での発表は、聞き手の要望に応じて声量などを調節でき、分かりやすい。また活字にすることで聞き取れなかった箇所も理解できるので、今後活かしていきたい。
- ・ビデオにすることで、失敗したら撮り直しがきくので、みんなには完成した形で伝えられると思った。ただ聞き取りづらかったという人がいたので、声量には気を付けるべきだと思う。
- ・情報の特徴は何かを考え、その特徴を活かす発表方法を考え、簡潔にまとめる。
- ・できるだけ難しい言葉は使わずに、正確な情報を全員に分かるように、具体例や体験談などを入れて、インパクトある表現方法を考える。
- ・紙にまとめる場合は、図やグラフなどで見やすくする。
- ・書いてあることとは別に情報を伝えると聞き手も話し手の方に集中できる。
- ・トーク番組やクイズ形式にすることで、面白く分かりやすくなる。
- ・単なる説明より、演技したり重要なところを協調する発表は自然と頭に入り、しっかり聞こうと思った。

★収集した情報源とその特質を評価する

- インターネット
 - ・誰が提供しているか明確でないため、情報が確かなものか分からない。豊富な情報が簡単に手に入るといった利点はある。更新していない情報については、古いものがあるので正確性は保証できない。
 - ・公式と個人サイトでは信頼性に違いがあるが、それを見極めて判断するのも大切なことだと思う。
- 雑誌や本
 - ・提供している人が明確なので、ほとんど

信頼できるものが多い。ただ欲しい情報が少ししか載っていなかったり、なかなか見つけれなかったりすることがある。

・図書館などの本の中には、古いデータの場合もあるので注意が必要。

○インタビュー

・直接本人に聞くので、情報提供者が最も明確。知りたい情報だけ手にはいるので、一番効率がよいが、本人の話があいまいだったりすると、不確かな情報になってしまうので、完全に信頼できるとは限らない。

・こちらの必要な課題の質問にも直接答えてくれるが、偏った意見のこともある。

○教科書や授業で配付された印刷物

・信頼性はあるが、インターネットと比べると情報量が少ない。

○テレビ

・視覚的に状況が分かるが、その部分だけで、背景や全体が見えにくい。

8 この授業を行う際のポイント

(1) 情報は複数から得て、その内容を十分吟味、評価しながら活用することの重要性を実感させる。

(2) 立場を変えてものごとを考えたり、その立場での考えをまとめる力の向上が、多様なものの見方や考え方の原動力になることに気付かせる。

9 まとめ

「今回、耳から入る情報と目から入る情報とでは、まったくというほど伝わる速さなどが違うということが分かった」という気付きをもった生徒がいた。このようなテーマ設定から調べ学習、発表、ふり返りの一連の学習活動を行うことは、自分に必要な情報をいかに収集し、その情報を的確に見極め評価して、より適切な選択をするにはどうしたらよいかを体得できる一例と思われる。その成果が実生活に応用されて初めて、生きた「読解力」となるであろう。 (西岡 正江)

時刻表・運賃表をもとにして数量関係を読み解く

イ（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

1 身につけたい力

テキストの中にある数量関係を読み解きそれに対して自分の考えを説明する力を育てる。

2 主たる評価規準

与えられたテキストの中から目的に応じた二つの数量を取り出し、それらの間の変化や対応の関係について自分の考えをまとめている。

3 単元・題材

一次関数の利用

○時刻表・運賃表をもとにして

4 指導のねらい

時刻表や運賃表は日常生活でよく目にするものである。その中にある数値を目的に応じて取り上げ、関数関係を見いだすことで列車の動きや運賃の決め方などテキストにある様々な仕組みを読み解くことができる。読み解いたことをもとに自分の考えをまとめ、発表することで根拠にもとづきわかりやすく説明する力を育成する。

5 単元・題材について

本単元は、一次関数について理解するとともに、事象から関数関係を見だし表現し考察する能力を養うことがねらいとなっている。時刻表や運賃表は厳密に言えば一次関数として扱うことができるものではないが、一

次関数として考察したり近似することで仕組みを読み解くことができる場面が多々含まれている。授業では、関数関係にある二つの量を生徒自身が取り出し、表やグラフに表現し直して分析する活動を取り上げる。

6 使用するテキスト

鉄道会社の時刻表及び運賃表を扱った。時刻表・運賃表は出発・到着時刻や行き先までの運賃などが数字として羅列してある。この数量関係を調べることにより、運賃がどのような仕組みで決められているのか、列車のダイヤがどのようなになっているのかについて考察を与えることができる。例えば、時刻表の中から、走行距離と走行時間の2量を取り出せば、列車のおおよその速度がわかる。また、速度と距離の関係を用いて、到着時刻の予想をすることもできる。さらに運賃の仕組みを知ることができれば、料金の予想をつけることができ、他社の運賃と比較することもできる。

7 授業の実際（3時間扱い）

(1) 運賃の仕組みを考えよう

ある駅を起点とした運賃表から、駅間距離と運賃の関係を見いだす。「(路線の途中にある) A 駅を起点とした運賃表を作ろう」という発問から表をただ眺めるだけではなく、分析的に表を読解する活動に入った。距離と運賃を対応させ、そのグラフを作ること等で運賃の決まり方が

見えてくる。その分析をもとに様々な駅間の運賃を予想し、その予想が妥当であるかどうかについて話し合った。

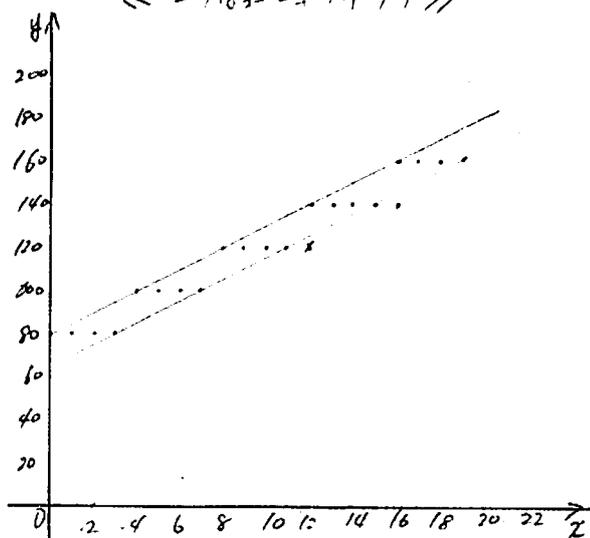
(2) 到着時刻を予想しよう

時刻表にある駅間距離と出発・到着時刻から列車のおおよその速さを知ることができる。このことからさらに先にある駅の到着時刻を予測した。また、前後の列車との関係を調べ、特急や急行、普通列車がどのように運行されているのかについて分析し、各自の考えを発表した。

(3) いろいろな路線で比較しよう

これまでの2時間で調べた路線とは異なる会社の運賃表と比較して、各社どのような特徴があるか話し合った。

なぜ線もなにもこうなるのか
「こうなる時の1分」



8 この授業を行う際のポイント

- (1) 生徒はいろいろな分析（読解）を試みるが、気がつかないうちに直前に習った内容を用いていることが多い。発表後のまとめの段階では単元（一次関数）内で習った言葉（傾きや切片など）を用いてよりよい表現に直すよう指導し、直前の授業と適切に結びつけるようにする。
- (2) 話し合いは小グループ（4人程度）で行い、グループ内で司会役等を決め、全員が意見を述べるができる環境を作

る。

- (3) クラス発表をするときに、どのような内容をどのような順番で述べるかなど簡単な発表計画を作成するようにする。その後、さらに効果的な発表ができるように発表に対する自己評価を書くようにする。

9 まとめ

今回用いたテキスト（時刻表・料金表）は多くの生徒が日常生活でよく目にし、活用しているものである。これらテキストは様々な意図をもって仕組まれたものであり、一般的に信頼されているものである。我々はそこに示された数値で列車の時刻を調べたり、料金を支払うなどしている。今回それら日々の生活でよく活用するテキストを分析的に調べたことで「なぜそのような仕組みになっているのか」について知り、その分析をもとに自分の意見を表現する機会を得ることができた。例えば、郊外にある鉄道の料金よりも都中心部の料金の方が割安であるということについても単なる感想を述べていた状態から客観的な資料にもとづいて表現することができるようになった。また、なぜ都中心部の料金が割安であるのかという新たな疑問を生み、追究することができた。

このように多くの生徒が利用しているテキストについて、その内容を課題や条件に応じて関連づけながら表現することは自分の考えや意見を持ちやすく生徒の興味・関心も高いようであった。また、自分の考えを表現したり、友人の生活経験を聞くことで新たな課題や比較対象を生む結果となった。以上のように数学科においても生活経験と結びつくテキストを用いて情報作成者の意図を数値等で示しながら読み解き、それを説明する学習を積み重ねていくことが可能であり、重要である。

（水谷 尚人）

第二次世界大戦のドイツを読み解き、自分の考えを書く、まとめる

イ（ア）テキストに基づいて自分の考えを表現する能力の育成

1 身に付けたい力

歴史的な事象を資料から読み解いて自分なりの見解をもち、的確に表現する力を高める。

2 主たる評価規準

第二次世界大戦へのドイツの参戦理由を様々な資料から読み取り、分析したことを自分の考えとして明確に表現している。

3 単元 現代の日本と世界

4 指導のねらい

本単元は、歴史的分野の最後の内容で二学年としても最後の学習内容となる。

第二次世界大戦は現代の日本社会の成立や世界情勢の経緯と密接な関わりをもっている。この大戦が起きた原因を日本のみならず、他の国の事情から政治、経済、民族・宗教、同盟・条約の資料から読みとり自分なりに考え、表現させることを試みた。

このように1つの戦争を様々な立場から考えることで思考を深めることが可能になる。それによって民主主義や平和の大切さとそれを守ることの責任の重さを自覚することができるのではないかと思う。

また、さらに他の戦争を考える時にも応用できる思考方法になる。繰り返して同じような思考をすることで戦争の本質的な原因とは何かということを考えられるようになるのではないかと考える。

5 単元・題材について

第二次世界大戦のきっかけは 1939 年にド

イツがポーランドに侵入したことがきっかけである。ただそれだけを授業でとりあげて、丸暗記をさせるのでは、自分の考えをもつ機会とはならない。様々な資料からそう決断していくことになった、ドイツ国内の情勢を読み解いて参戦理由を思考させる。

6 使用するテキスト

第一次世界大戦から第二次世界大戦までの世界の国々の動きやベルサイユ条約の大まかな内容がわかる年表、教科書の説明文、及びワークシート。教科担任が作成するワークシートにはドイツだけではなく、他の国の参戦理由などを示しイメージをつかみやすくして思考を助けるように工夫する。

【資料1】ワークシート

第二次世界大戦 ワークシート NO52 第二次世界大戦

【学習のねらい】

【学習の目標】

年	出来事	学習のねらい
1914	第一次世界大戦の始まり	第一次世界大戦の始まり
1918	第一次世界大戦の終結	第一次世界大戦の終結
1919	ヴェルサイユ条約の締結	ヴェルサイユ条約の締結
1920	ロンドン条約の締結	ロンドン条約の締結
1921	ワシントン海軍軍縮条約の締結	ワシントン海軍軍縮条約の締結
1922	ロンドン海軍軍縮条約の締結	ロンドン海軍軍縮条約の締結
1923	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1924	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1925	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1926	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1927	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1928	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1929	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1930	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1931	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1932	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1933	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1934	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1935	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1936	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1937	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1938	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1939	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1940	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1941	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1942	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1943	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1944	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン
1945	ドイツのハイムシュツツェン	ドイツのハイムシュツツェン



7 授業の実際(6時間扱い)

- (1) 第一次世界大戦が始まりから、世界の国々の動きやベルサイユ条約の大まかな内容を理解させる。
- (2) 世界恐慌と各国の対策やそれぞれの状況を理解させる。
- (3) 理解できた様々な世界の国々の状況からドイツの参戦理由を考えさせる。
- (4) 各自が考えた理由について発表することで相互の考えを共有する。また、その内容に関して史実との整合性を確認しつつ教師もコメントする。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 今回重点的に着目して取り组ませるのはドイツの参戦理由であるが、関係したすべての国について考えさせることでさらに史実をしっかりとらえることができる。
- (2) 正答が一つだけではなく、しかも自分の考えを文章にするということに不慣れな生徒は多い。そのために最初は取り組みに抵抗感を持つ生徒も少なくない。そのためにワークシートにはあらかじめヒントになるような記入例を入れておくなど、指導に工夫をする必要がある。
- (3) 単元の学習の初めから自分なりに思考する活動があることを伝えておくことが大切である。また、一時間の授業の最後に繰り返し同じような投げかけをして思考する機会をつくり、その都度思考を試みるように促す。

【資料2】生徒の記入例

④ なぜ第二次大戦に参戦したのだろうかそれぞれの国の理由を説明してみよう。

アメリカ	イギリス	フランス
アメリカは、ドイツが世界を支配しようとしているのを、止めるために参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。
ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。
ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。

④ なぜ第二次大戦に参戦したのだろうかそれぞれの国の理由を説明してみよう。

アメリカ	イギリス	フランス
アメリカは、ドイツが世界を支配しようとしているのを、止めるために参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。
ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。
ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、アメリカは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、イギリスは参戦した。	ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。ドイツは、世界を支配しようとしているから、フランスは参戦した。

9 まとめ

第二次世界大戦と関係した様々な国や立場に立って考えるためには多くの資料を読みとって理解する必要がある。これにより「ア テキストを理解・評価しながら読む力を高めること」が期待できる。また、読みとった資料を様々な国や立場に置き換えて多角的に考えまとめてみることは「イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること」に関連する。さらにこれをもとにして「戦争の原因は何か。どうしたら防げるのか」などをテーマに単元最後のまとめとしてレポートを書かせることで、「ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること」になる。

あらかじめ計画的にこのようなカリキュラムを設定して学習を進めれば、単に「日本の受けた被害状況の深刻さやファシズムの台頭を批判して不戦を誓う」というやや一面的な印象を受ける学習にとどまることはないだろう。(三藤 あさみ)

参考文献：西岡加名恵「ウィギンズとマクタイによる『逆向き設計』論の意義と課題」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第14号、2005年、pp.15-29。

書籍やインターネットで学習した内容をミニレポートにする

イ（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

1 身に付けたい力

書籍やインターネットに書かれたテキストの内容をただなぞるのではなく、自分の「考察」を加えたレポートを書く能力を高める。

2 主たる評価規準

学習した内容を相互に関連づけたり、総合的にとらえたり、生活経験と結びつけて、レポートが書けている。

3 単元・題材

第2分野 生物の細胞と生殖

「生命誕生」

4 指導のねらい

「生命誕生」という、理科にとどまらず、保健体育科や家庭科などにも関連する幅広く奥が深い学習内容を、本やインターネットで自ら学習し、それをレポートにするという活動を行う。

本来、このような奥が深い内容を個別の自主学習にする場合は、発展的な学習を期待するものである。生徒も、「調べてまとめる学習」には慣れており、学年が進むにつれて難解なレポートを書こうとする。

しかし、そのレポートの内容は、本やインターネットのテキストそのものであることが多く、理解の程度はわからない。今回はあえて、時間を制限し、記入する用紙サイズを限定したミニレポートにすることと、書き直す作業を取り入れることで、自分の考えを表現する能力を高めていく。

5 単元・題材について

この単元は、生物の体のつくりや生殖を、細胞レベルで見ていくことで、生殖によって親から子へ形質が伝わること、生殖によって生命の連続性が保たれること、を理解し、その学習を通して、生命を尊重する態度を育てるというものである。今回はこの単元を利用して「レポートを書くこと」が題材となる。

6 使用するテキスト

「生命誕生」に関わる書籍、またはインターネットのホームページを使用する。

書籍の例：

驚異の小宇宙・人体「生命誕生」

日本放送出版協会発行

7 授業の実際（4時間扱い）

(1) 図書室、パソコン室等で「生命誕生」に関わる学習を個別に行わせる。

調べる時間は1時間であること、メモはいいが、コピーやホームページのプリントアウトは認めないこと、レポートは次の授業時間1時間で書くこと、を伝え、個別学習をスタートさせる。

(2) A4版1枚の用紙にまとめる。

1枚の用紙に、次の2項目の内容についてまとめさせる。

① わかったこと（知識・理解）

② 考えたこと（科学的思考）

授業時間の終了で提出させる。

(3) 評価したミニレポートを返却し、レポートの書き方についての指導を行う。

評価を記入したミニレポートを返却し、その問題点、課題を確認する。レポートの多くは、本やホームページのテキストそのものと、感想や疑問だけしか書かれていない。

ミニレポートの記述例

<p>1. わかったこと (知識・理解)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・胎児の手の細胞が死んでいくことで形ができる。 ・精子は1つだけ受精する。 ・ヒトデは細胞再生をする。 ・卵子：直径は0.2ミリメートル(人体細胞の中で最も大きい) ・精子：長さ0.02ミリメートル程度である。 ・胎児の背骨は最初まっすぐである。 <p>2. 考えたこと (科学的思考)</p> <p>人間ってというのは、すごく不思議な生き物なんだなと思いました。子供がおなかにいるお母さんなど、そのときに体が変わったりします。血液の流れや、体のふくれなど、そういうものは、私たち人間にとってなければならぬことだけど、宇宙のようにすごく不思議な世界だなと思いました。</p>

レポートの書き方の要点を指導する。

☆結果

- ・事実やデータをそのまま書く。(感想や考察を入れる必要はない)
- ・文章で書く場合は、自分の言葉にして書く。

☆考察

結果の内容をそのままなぞる(繰り返す)のではなく、

- ・それ(事実、結果)はどういうことか。
- ・それはどうして起きるのか。
- ・それによってどのようなことが起きるのか。
- ・それに関連して考えを広げる。(他の例、日常生活での例など)
- ・将来、未来への展望

(4) 同じ形の用紙を配り、ミニレポートの書き直しをさせる。

新たに調べる時間はとらず、ミニレポートの書き直しをする。新たな知識が入ってこない分、レポートの書き方の改善が図られる。

書き直したミニレポートの記述例

<p>1. わかったこと (知識・理解)</p> <p>何億もの精子の中でのたった1つが卵子の中に入り、受精卵となる。これが命の元となる。そしてその命には重力が欠かせないものであり、その重力があるこの環境でこそ私達は命を育み、成長することができる。この私達の体の元となるのは体内にある60兆もの細胞であり・・・</p> <p>2. 考えたこと (科学的思考)</p> <p>宇宙に行ったニワトリの卵はほとんどが死んでしまったので、重力がある環境が生命にとって重要だということがわかる。しかし、教科書にあった「宇宙に行ったメダカ」が生きていることもあり、必ずしも重力がないだけで生きられないわけではないことがわかる。これから考えることは、成長が終わった、または終わりそうな生命はあまり宇宙のダメージを受けず、成長が初めのものは宇宙の重力のない環境に大きく作用されるということ・・・</p>

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 調べる時間やレポートを書く時間を最小限にすることで、情報量や文章量ではなく内容の質を意識させる。
- (2) 小学校以来多くの教科、活動場面でやってきた調べ・まとめ学習(今の生徒はこのような学習に慣れている)が、科学的なレポートにはならないことがあることを確認する。
- (3) 1度書いたレポートをもう一度書き直すことで、書き方そのものを意識させる。
ここで違う題材にしたり、新たに調べる時間を取ってしまうと、書き方よりも新たな知識でレポートを改善しようとしてしまう。

9 まとめ

理科では、1年生より観察・実験レポートを書く学習活動は行われている。その活動を通して、自分の考えを書く能力を育成していることにもなる。しかし、今回のように、本やインターネットに書かれた文章からレポートを書く場合は、文章そのものに影響され、自分の考えを文章で表すことが難しくなる。

文章を一度自分の頭で消化し、新たな自分の文章にすることが大切である。

(五十嵐 俊也)

教科書のインプットからアウトプットへの流れ

イ（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

1 身につけたい力

教科書本文の内容を効果的に導入し、最終的には、テキストで述べられている事柄を前提に自身の経験や思いを関連付けて表現することをねらいとする。テキストに呼応したアウトプット能力を高める。

2 主たる評価基準

教員の英語を聞き教科書本文のイメージや大まかな流れ、キーワードを理解することができる。

テキストの内容をふまえ、英語を用いて自身の考えを明確にしている。

3 指導のねらい

人間のコミュニケーションは、どんな感情であれ実際に目と目を合わせて発せられた生の言葉から伝わることを基本とする。同じ英文であっても、実際に目の前で表情を見ながら伝えられる場合と、CDなどの模範的な音声教材では生徒の理解に大きな違いをもたらすことから明らかである。

そこで、音声教材やピクチャーカードに頼った教科書本文の導入ではなく、生徒の反応を見ながら教員が実際に板書をし、実物を見せ、リピートや問の投げかけといった生徒とのインタラクション（やりとり）を織り交ぜながら、これから学習する本文の概要を導入する。このようにしてテキストのインプットを行い、それぞれの課の最後にはテキストに応じる形で、アウトプットの課題をもうけ、テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めることをねらいとする。

5 単元・教材について

本校で扱っている光村図書“Columbus 21” English Course3 unit6 を一例としてあげる。イギリスに行った友人が主人公に向けて、ロンドンの名所などを巡りながら撮ったビデオレターがテキストの内容である。英文は全て相手に語りかける体をとっている。ビデオを送った人物の近況やイギリスの文化的背景などにも触れられており、ビデオレターの受け取り手への投げかけや質問も多い。

6 使用するテキスト

ここでは一例として教科書本文を挙げているが、まとまった情報量のある英文であれば、投げ込み教材を用いての指導も当然のことながら可能である。しかしながら、一年生当初の英語学習入門時には扱える情報量が限られているため、2,3年生を対象に考えたほうがよい。

7 授業の実際

(1) 教科書を閉じたままピクチャーカードや実物、黒板へ図や絵、キーワードを書き込みながら、本文の内容を生徒に導入する。教員は‘Do you know ~?’ ‘What is famous for England?’と問いかけたり、黒板に書いた文字をリピートさせるなどして、適宜生徒へ呼びかけながら、オーラルイントロダクションを行う。

(2) 生徒が概要をつかんだところで、聞き取りのポイントとなる部分について質問を載せたハンドアウトを配る。教科書は閉じたまま本文指導用 CD を聞きながら、質問に答える。

(3) テキストを見ながら、教科書本文の内容を詳しく理解する。

(4) アウトプット課題として「あなたが主人公となり、このビデオレターに返事を書きなさい」という条件で自分の意見、感想などを述べたレポートを書く。

8 この授業を行う際のポイント

(1) 教員のオーラルイントロダクションでは、新出語や重要文型を必ずおさえるようにする。また、初めてふれる教材なので、ハンドアウトにある質問の答えとなる部分についても触れておく。

(2) 生徒とのインタラクションを大切にす

(3) 生徒に提示するレポートの題材は、生徒の意見や創造性、自由な表現が引き出せるよう工夫をする。また手紙形式、スピーチ原稿、e-mail など、様々な英語の表現を網羅できるように 3 年間のシラバスを見通して考えるとより効果的であろう。

9 まとめ

導入の際、ひと工夫することで生徒の理解や取り組みがずいぶん変化するものである。ここに挙げたものは、文字テキストの読解を手助けするインプットの方法である。また教員の使う英語がその後のリプロダクションや、アウトプット活動(レポート、スピーチ)につながることは確かである。

テキストに応じる形で返事や自分の意見を書いたり、人称を変えて再構成するなど、様々な条件で、本文読解にとどまらない表現活動を日常的に取り組むことで、より生徒は主体的に教科書で学ぶことができるであろう。

(杉浦 千恵)

生徒作品例

ミンサーのビデオレターに、タクになったつもりで返事の手紙を書きましょう。60語以上

Hi. Thank you for your video letter. Suddenly, I want to write to you this letter. The tape was so exciting that I was interested in England. I began trying to study English harder, too. You are taller than before. I'm really surprised. You are splendid because the tape says you thought you have a lot of things to do. I can't think as you. But, I have a dream. I do my best. You, too? I want to hear from you as soon as possible. Bye.

(86 語)

身近な題材を内容としたテキストを活用して、コミュニケーション能力を育成する

イ(イ)日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

1 身に付けたい力

日常生活でよく使用する表現を知ることによって、コミュニケーション能力を高める。

2 主たる評価規準

身近な題材を基にしたテキストから得られる情報を活用して、自分の考えを述べる活動へとつなげている。

3 単元・題材

身近な題材を読む。

4 指導のねらい

実践的なコミュニケーション能力を育成するには、運用するのに前提になっているのが知識であり、その知識を取り入れる手段の一つがリーディングであると捉えている。リーディングを通して、英語の語句や慣用表現がインプットされる。このインプットする語句や慣用表現を増すことで、さらに話せたり、聞けたり、書けたりすることへつながっていくものである。そして、読む内容が身近な題材であれば、普段の生活の中のコミュニケーションにすぐに使える英語の語句や慣用表現を学ぶことにつながり、実践的コミュニケーション能力の基礎を養えると考えたい。

そして、コミュニケーション能力の中でも、自分の気持ちや考えを伝え、生きた英語に対応できる能力を育成することができればと考えた。

5 単元・題材について

生徒たちは日々多くの時間を、学校生活で送っている。したがって、学校生活をテーマにしたテキストは、生徒たちの身近な題材という理由から、最適なものと捉えることができる。その中でも、学校行事などは生徒たちのスキーマ(経験や学識などで培われた知識)を呼び起こすものであり、とりわけ取り組みやすい題材であると考えた。

6 使用するテキスト

学校生活を題材にすることから、当然自主作成教材になる。そして、中3段階での語彙力、表現力には限界があるので、テキストの内容ができるだけ、1、2年で学習した語彙や慣用表現を中心に構成されるように努めた。また、テキストの最後の部分で、その内容に対するQ&Aと自分の考えや感想を書く欄を設けた。

作成から生徒たちに提示するまでには、ALT等によるネイティブの校正が必要となる。場面によって、使用される語句や慣用表現が限定されることもあるので、作成上注意しなければならない。また、文脈の妥当性、生徒を見据えた難易度の確認をしておかなければならない。

内容の例としては、入学式、体育祭、文化祭、合唱コンクール、〇〇先生について、修学旅行、進路等、対象の生徒が興味を示そうなものを考えていくべきであろう。

7 授業の実際

(1) 初回のワークシートから

Let's enjoy reading!

Hello, everyone!

週3時間の内の1時間。それもわずか15分間ですが、「何が書いてあるか。」に集中して、読み取ってみてください。

それでは進め方について説明します。

①プリントが配られたら、まずはトピックを見て、頭の中に様々なことを思い浮かべてみましょう。

②思い浮かべたら、さっそく「何が書かれているか」を読み取ってみましょう。

ここまでに5分

③さて、1回音読をしましょう。先生の後に続けてください。

④ Q&A を行います。質問文の書かれているものは、時間を与えますので、答えを書きましょう。空欄のところは先生が質問文を言いますので、それを書き取り、答えを書いてください。そして、答え合わせをします。また、自分の感想についても書きましょう。

答えは、英文が良いですが、単語でも構いません。

例：What animal do you like ?

I like dogs. / Dogs.

ここまでに10分

⑤再び音読をします。先生の後に続いて読みましょう。

自分が読む時には、できるだけ本文を見ないで言ってみましょう。

⑥ワークシートを集めます。次回の時に返却をします。ここまでに15分

●次回のワークシートで答えを確認します。各自でしっかり復習をしてください。

(2) 実際のワークシート（自主作成教材）から

Today's topic :

A school trip

We often go to Kyoto and Nara on our school trip. There are a lot of temples and shrines in Kyoto. Kinkakuji Temple is very famous, because it is covered with "gold". It is bright and beautiful. Every year Many students visit Kinkakuji Temple. . . .

Q&A

1. Why is Kinkakuji Temple very famous?

2. What do students do by experience?

3. Please tell me about your school trip in Japanese.

★感想等を書いてみてください。できるだけ英語を使って。

8 この授業を行う際のポイント

(1) 短い時間での学習なので、集中力をもって行う。

(2) 英語の質問に答えたり、自分の考えを述べる場面では、できるかぎり英語を使うことを指示するが、全体の内容把握、興味関心を損なわないように、日本語でも構わないことを確認する。

9 まとめ

コミュニケーション能力の育成には、インプットした情報がどれだけアウトプットにつながるかがポイントになろう。したがって、自分の考えを述べる場面では、インプットした語句や慣用表現がどれだけ利用されているかも大切なポイントである。そのためには、一度得た語句や慣用表現が定着するために、反復させる活動が必要となってくる。

(小嶋 丈典)

地形図から地域の特色を読み取り人々の暮らしを想像する

ウ(ア)多様なテキストに対応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

地形図から地域の特色を読み取ることができる力、さらにそこで暮らす人々の生活を想像できる力。

「身近な地域」の学習を進める前提としてこの力を身に付けることは重要である。そのため、地形の特色を読み取りやすい国土交通省国土地理院発行の大縮尺の地形図（5万分の1、2万5千分の1）を用意して、地形図読図の基礎を身に付けさせたい。

2 主たる評価規準

「大縮尺の地形図」の等高線から、その地域の地形の特色をつかむことができる。土地利用の特色を読み取ることができ、その地域の人々の暮らしを想像することができる。

3 単元・題材

「地域の規模に応じた調査・身近な地域」

4 指導のねらい

「身近な地域」の調査をする上で、大縮尺の地形図を読み取る力は必要である。大縮尺の地形図の中でも、国土交通省国土地理院発行の地形図は正確であり、最も信頼度が高い。そこで、地形の特色が比較的読み取りやすい地形図を用意し、全員が実物の地形図に触れ地形の特色を読み取り、意見交換することによって、また教師がアドバイスすることによって、地形図の正しい読み取り方を身に付け読み取った結果から、その地域で暮らす人々の生活について想像できるようにしたい。その力の基礎を身に

付けることによって「身近な地域」の学習を進める上で、大縮尺の地形図の利用が可能となり、学習に深みをもたせることが可能になる。

5 単元・題材について

「身近な地域」「都道府県」「世界の国々」と地域の規模に応じた調査は、中学校社会科地理的分野の学習を進めていく上で、重要な部分である。その一番基礎となるのが「身近な地域」の調査である。それは、実際に地域を歩き、自分の目でさまざまな地理的事象を見ることができ、そこにいる人に聞き取り調査をすることが可能だからである。

自分の目で見て、聞き取り調査をする前提として、「身近な地域」の大縮尺の地形図を読み取り、地形図から読み取れる地形の特色地域の特色を把握しておく必要がある。そのため、「身近な地域」の学習のはじめに大縮尺の地形図の読図を位置付けている。

6 使用するテキスト

地形図の基礎の学習については教科書にも記載されている。しかしそれは簡単な地図記号であったり、屋上から見える景色と地形図の比較、あるいは新旧地形図の簡単な比較程度のものである。

国土地理院発行の大縮尺の地形図を使う学習をする上で、是非実物の地形図に触れさせ実物の地形図からさまざまな情報を読み取らせたい。授業では、5万分の1広島、5万分の1阿蘇山、2万5千分の1浜島の

3枚の地形図を読み取らせた。地形図の読み取りがある程度できるようになった上で、「身近な地域」横浜の2万5千分の1の新旧地形図を比較して読み取らせることになげた。

7 授業の実際(3時間扱い)

(1) 教科書を使って、縮尺(縮尺の意味、大縮尺と小縮尺)、等高線(等高線間隔と地形の傾斜の関係)、方位(16方位)、地図記号(代表的な20程度の地図記号の意味や由来)について、基礎的なことを知る。

(2) 特色のある地形図として、5万分の1「広島」の地形図を読む。

地形図中東側を北から南へ流れる太田川は広島湾に注ぎ込むところで分流して大きな三角州を形成し、三角州上には広島の市街地が発達している。三角州の先端は護岸に囲まれているので埋立地であることが想像できる。太田川本流と元安川の分岐点の相生橋の南に平和公園があり、元安川の対岸には原爆ドームがある。広島城や県庁にも近いこの場所付近が爆心地であったことが読み取れる。西側の地域は山がちな地形で標高千メートル近い山も見られ、針葉樹林や広葉樹林である。谷筋を流れる川添いの狭い平地は田として利用されている。新幹線もトンネルの部分が多いことなどが読み取れる。

全員で、1時間かけてじっくり地形図を読み取り、発表させて確認する。

(3) 特色ある地形図として5万分の1「阿蘇山」2万5千分の1「浜島」の地形図を読み取る。

「阿蘇山」からは、地形図の西半分に特色ある地形が見られる。南側には噴気孔のある中岳を中心に阿蘇五岳がある。よく観光ポスターになる草千里ヶ浜もある。豊肥本線の北側には等高線のほとんどない阿蘇谷があり、田として利用されている。その

北側には等高線の混んだ地域があり、急傾斜の外輪山があることが分かる。つまり、阿蘇谷は噴火によって陥没したカルデラの谷である。

「浜島」からは、出入りの多い複雑な海岸線が目につき、賢島周辺の英虞湾内には真珠養殖場がたくさんある。これは典型的なリアス式海岸であり、波静かな湾は養殖に適しており、御木本幸吉翁以来世界的にも有名である。真珠養殖場と書かれている点線の場所は養殖用筏の設置場所である。集落はリアスの湾の周りがある。

以上のような大縮尺の地形図の読み取りをもとに、その地域で暮らす人々はどういう生活をしているのかを想像させた。阿蘇山地域では水田が広がっていることから農業中心の地域であろうとか、温泉が多いことから観光に関わって生活する人が多いだろうという意見があった。浜島地域では、英虞湾内に真珠養殖場が多いことやゴルフ場、国民宿舎があることから、真珠養殖や観光に関わって生活する人が多いだろうという意見があった。

8 この授業を行う際のポイント

(1) 実物の地形図をもたせてじっくりと読み取らせること。

(2) 各自が読み取ったことを発表させ、共有させること。

9 まとめ

「大縮尺の地形図」という非連続型テキストをじっくり読み取り、各自の読み取り結果を共有することによって自分の読み取りをふり返り、読図力を向上させることができる。

ここで身に付けた読図力を生かして、自分が暮らす「身近な地域」の地形図を読み取り地域の特色をより正確に把握することができるようになる。(本田 清)

テキストを用いたサッカーのゲーム分析

ウ(ア)多様なテキストに対応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

スポーツに関する新聞、雑誌、TVスポーツ番組などさまざまなメディアからの情報をよく検討・理解ことを通して読む力を高める。また、まとめた情報を分析することで自身の問題発掘や課題解決につなげることができる能力を育成する。

2 主たる評価規準

読む目的・ねらいを明確にしながら、情報を読み、まとめることができる。また、注意深くじっくりと考えることができる。さまざまな情報に対して自分の意見を理論的な思考に基づいて導き出すことができる。

3 単元・題材

球技領域におけるサッカーのゲーム分析をする。

4 指導のねらい

サッカーは、多くの国々で大変親しまれているスポーツである。小学校より体育の単元として扱われているほどである。また、生徒たちも幼少の頃からサッカーに触れる機会が多い。たとえサッカー経験が浅かったとしても、Jリーグやワールドカップなどサッカーが注目されている場面が多く見られる。

最近では、新聞、雑誌、TVスポーツ番組でも何かと取り上げられ、注目されることも多い。生徒たちは、そのようなメディアからサッカーに関するさまざまな情報を受信している。

けれども、その受信した情報をそのまま鵜呑みにしただけでは、サッカーの魅力を味わうには十分ではない。

サッカーは、その技術や体力だけを競ったりするスポーツではない。2チームに分かれたそれぞれ11人のプレーヤーの体格や身体能力、ポジショニングを考えたチームプレーを第一に考えた判断力・分析力を大変要するものである。だから、サッカーの基礎的な技術やルールなどの基本的な知識の習得とともに、多角的な情報収集や直観的な観戦を通して、ゲームを客観的に分析・評価できる力を培うことを考える。

そのような力を身に付けた上でゲーム観戦したり実践したりするとき、はじめて自己の持っている知識や経験を結合させることができるようになることを考える。情報収集や観察するスタンスとしての「観る」ことができる、そして熟考し自己の意見をまとめあげることができる力を培うためのプロセスを踏むことができるようにする。

5 単元・題材について

座ったままで学習することは、球技領域におけるサッカーの単元においてあまりそぐわない。けれども、サッカーのゲームで必要とされる判断力・分析力は、単にゲームを実践したり、ゲームを「見ている」だけでは身に付かない。

判断力・分析力を身に付けるため時間確保、つまり運動実践を抜きにした学習時間がある程度必要であると考えられる。サッカーの基

礎的な技術やルールなどの基本的な知識を土台にして分析力・判断力を役立たせて、ゲーム実践に応用・発展させていくことができるようにする。

題材としては、さまざまなメディアに取り上げられる多方面において際だって注目されているゲーム（Jリーグやワールドカップなど）を題材とする。

6 使用するテキスト

以下のような情報ソースを例を挙げて具体的に提示する。

- (1) 雑誌関係：サッカー専門誌
スポーツ誌
- (2) 新聞関係：一般紙
スポーツ紙
- (3) HP関係：各サッカー協会のHP
サッカー関連のHP
選手のHPやブログ

7 授業の実際(3時間扱い)

- (1) 読む力を高める取組：

○収集した情報のまとめ・整理をする。

- (2) 自分の考えを書く力を高める取組：

○観点をおさえながらゲーム観戦をする。

○ゲームを観戦では得点シーンを注目しがちになる。けれども、得点したりされたりするまでに至るゲーム展開を丁寧に追うことができるようにする。

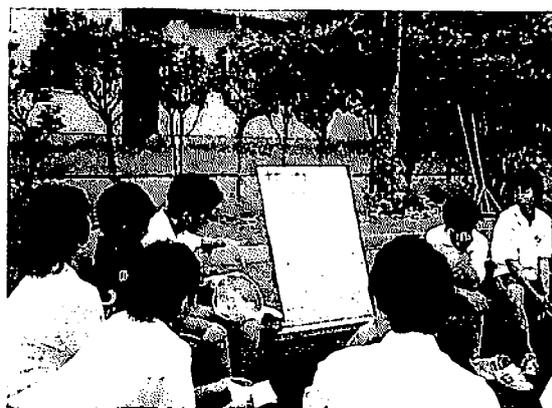
○ゲーム終了後、結果などについての解説や批評などの情報の収集を行う。

○試合前の情報と実際のゲーム経過や結果との合致や相違点を探るなどして分析をする。

- (3) 自分の意見を述べたり、書いたりする取組：

○試合前の情報と実際のゲーム経過や結果との合致や相違点を探るなどの分析レポートを作成する。

○それを発表する機会を設ける。



8 この授業を行う際のポイント

(1) 学習課題を引き出すためのゲーム分析となるようにする。つまり、生徒自身のサッカー学習にどう生かしたかよいか、生かせるところを見い出していく。

(2) 教師と生徒との「読解力」育成にとっては欠くことのできない教師と生徒との問いかけ（Call）&反応（Response）の場면을意識的に授業の中で展開していけるようにする。

(3) 最終的にゲームを振り返る際には、分析の視点を絞ることができるようにする。

(4) ゲーム分析によって内容は、様々となる。生徒同士でいくつかの分析をつき合わせてみることも大切となる。

(5) 生徒に学習させたい課題や内容が当面している生徒の思考の対象となっていることが大切である。

9 まとめ

いくつかの情報ソースを読み、連関させて信頼性や妥当性を検討することは時間のかかることである。けれども、その取捨選択能力は、知識や経験を重ねるによって洗練されていく。それに伴ってゲーム中での分析力や判断力が身に付いてくると考える。

ここでは、球技領域のサッカーのについて取り上げたが、他の球技の内容についても同様な取組が可能であろう。（末岡 洋一）

様々なテキストを読み「ゲルニカ」を鑑賞する

ウ(ア)多様なテキストに対応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

複数の異なる範疇のテキストを読み取り、目的にあわせて総合化し、理解する力。

2 主たる評価規準

美術書、ノンフィクション、文学作品など、異なる範疇のテキストを読み取り、その内容から学習の目的に即して必要な要素を抽出したり、総合化して理解することができる。

3 単元・題材

ピカソ「ゲルニカ」～作家とその作品～

4 指導のねらい

美術科の学習内容のうち鑑賞の領域は近年、生涯を通じた学習へのへの広がりを持たせる上でこれまで以上に一層、重視される傾向にある。中学校の美術科授業では美術を愛好する心情を培うことを目標のひとつとしている。これに続き、卒業後も生涯にわたってこの姿勢を保っていくためには、種々の文献や資料に自ら触れ、それを読み解いていく能力も要求されることになる。ここでは著名な作家や作品を題材として取り上げるものの、それについて限定的な解説を加えるだけで鑑賞活動を終わらせるのではなく、それに必要な内容を多様なテキストから読み取る力を身に付けさせ、主体的な愛好の心情を生涯にわたって自ら培い、維持する姿勢に結びつけたい。

5 単元・題材について

ピカソとその代表作である「ゲルニカ」は、美術作品として著名なだけでなく、戦争の世紀とも言われる20世紀の象徴でもある。併せ

て、後期印象派からキュビズムへの流れ、作家個人の制作スタイルの変容、作品生み出す原動力となった情動、複雑で困難な時代背景など多様な学習要素を持つことから、作品への様々なアプローチを可能にする題材である。ここでは、様々な資料を読み取ることを通して、他の作家の作品や、多様な造形作品を鑑賞の対象とする際にも応用できるような力を身に付けさせたい。

6 使用するテキスト

「ゲルニカ」図版、ピカソ資料など

教科書や市販の資料集に掲載があればそれを活用する。

[連続的なテキスト]

- ・作家ピカソの略歴
- ・後期印象派からキュビズムまで
- ・スペイン内戦の概要

ネット上の「フリー百科事典」などによるものが、簡潔かつコンパクトでよい。

その他

- ・ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』
- ・キャパ『ちょっとピンぼけ』(写真作品も)
- ・リチャード・ウィーラン『キャパその青春』(沢木耕太郎 訳) など

以上、文庫化されるなどして入手しやすい文学作品やノンフィクション作品の中から評価の高いものを選び、関連する箇所を抜粋し、掲載写真と併せて提供する。

[非連続的なテキスト]

- ・年表枠(美術・一般、一部空欄)
- ・国際情勢を示す図表(地図・統計)

7 授業の実際（2時間扱い）

(1) 作品をみる

ピカソ「ゲルニカ」とキャパ「崩れ落ちる兵士」を提示し、ディテイルをチェックしながら、両作品の時代背景、関連などを洞察させる。

(2) テキストを読み進める

種々のテキストを読み進めながら、関連事項を抽出し、年表の空欄を埋め完成させていく。併せて読み取った内容を図式化して整理させる。連続型テキストについては状況に応じ生徒を指名し、音読させるなどして扱う。アプローチのポイントはグループごとに指定するが、その他についてはそれぞれの生徒の興味・関心に応じ、取り組みやすいものから着手させる。この段階で映像資料などを適宜、提示する。教科書や資料集なども必要に応じて参照するよう促す。

(3) 感想を述べ合う

読み取った内容について興味をもったこと、感じたことなどを、グループごとに発表し合い、読み取り方や読み取った内容の交流、共有、補填を相互に行う。

(4) まとめと確認をする

作品「ゲルニカ」を制作するに至った経緯や、時代背景などについてグループ代表の生徒の発言を交えながらまとめを行う。

8 この授業を行う際のポイント

(1) テキストの出典を明らかにする

この題材では質量ともに盛りだくさんのテキストを与えることになる。事後の発展的な学習への広がり視野に入れ、生徒にとってそれらが「先生から一元化され与えられた」だけのものに終わらないよう、出典や書き手、送り手のキャラクターを明らかにする必要がある。

(2) 補助資料を活用する

抵抗感が強いと思われる連続型テキストを興味深く読み進めるための補助資料とし

て、あるいは総合化した内容の確認手段として、比較的抵抗感の少ない映像資料や学習漫画などを用意しておくといよい。

(3) 発展的な学習の資料を提供する

授業で提供するテキストの出展元とした書籍や、関連する資料、インターネット端末などを授業中あるいは事後、日常的に生活する場で常に参照できるよう環境整備をしておくといよい。

9 まとめ

ここでは「ゲルニカ」を鑑賞する手だてとして、種々の資料を活用する局面を用意した。生徒に与える資料として示したものは、連続型テキストから報道写真に至るまで多岐にわたり、これらを読み解き活用する上での抵抗感も生徒によって異なると思われる。逆に言えば、生徒が興味関心に応じて選択できるよう、鑑賞する作品へのアプローチの仕方を複数用意していることにもなる。

種々の作品を鑑賞する手立てとして、その対象を互いに連鎖させる試みはこれまでも多く報告されてきた。20世紀以降、現代に至る時代の作品は、制作の動機となった事柄が多様であり、関連する写真や映像資料も多く、それ自体を次の新たな鑑賞対象とすることができる。

教科書や資料集でおなじみの作品は、美術館に収められ展示されている作品のように、現実世界とは切り離され独立した存在のように思われがちである。ここで取り上げた（報道）写真作品やノンフィクション、映画化もされたような文学作品はともに、生徒が生きる現代や、現実社会につながるものとして、現実味を帯びた形で両者を結びつける。多様なテキストとの出会いと「読解」という営為を、これら多様かつ現実味を帯びた連鎖の仲立ちとすることができるといよい。

（三浦 匡）

単元の最後に自分がさらに深めたい事柄を一枚レポートにまとめる

ウ（イ）自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

1 身に付けたい力

単元で学習した内容を元に、これまでの学習で疑問に思った点や、さらに自分で深めたい事柄を調べる学習を通して、論理的で分かりやすく表現する能力を高める。

2 主たる評価基準

図表、グラフなどの「非連続型テキスト」を活用して、調べた内容を分かりやすく表現している。

3 単元・題材

単元：「動物の生活と種類」

題材：単元末の一枚レポート

4 指導のねらい

教科書の学習内容を通して学んだ知識や思考・表現の仕方は、単に教科の枠の中で終わるものではなく、他教科や実生活にも活きるものである。

そこで、ここでは理科学習で学んだことを活用し、自分で調べたことを自分の言葉で表現する活動を取り入れていく。この学習を通して、論理的で分かりやすく表現する能力を高めていくことができると考えたい。

5 単元・題材について

この章は、身近な動物についての観察、実験を通して、動物のからだのつくりとはたらきを理解させるとともに、動物の種類やその生活についての認識を深めることを目的とし

ている。このような身近な内容についての学習は、生徒の興味・関心を引きやすい。また、ここで得られた知識は、実生活にも活かし易いと考える。そこに、さらに自分の興味のある事柄について調べ学習を行うことにより、科学に対する興味も高めることができる単元としても考えられる。

6 使用するテキスト

ここで使うテキストは、教科書や関連図書の他にインターネットの利用などが考えられる。よって文章で表される「連続形テキスト」とともに図表や写真や動画など「非連続形テキスト」も多く含まれる。このような資料を活用することで、より実生活に近いものとなり、学校教育終了後の社会参加の中で活用できる表現力を高めることにつながると考える。

7 授業の実際(5時間扱い)

(1)教科書の内容やこれまでの学習の中で、疑問に思ったことやさらに深く調べてみたいことを書き出す。(0.5～1時間)

【例1】「教科書には、無セキツイ動物については非常に簡単に書かれているが、その分類はどうなっているのか知りたい。また、無セキツイ動物にはどんな生物がいるのか知りたい。」

【例2】授業では、(…………)について学んだが、さらに(…はどうなっているのか)などの点について深く知りたい。

(2) 疑問に対する自分の予想を記述する。

(0.5時間)

※ここでは、正解を追究するのが目的ではなく、これから調べ学習をしていくための視点を明確にするために行うことを説明するとよい。

(3) 関連図書やインターネット等を利用して調べたい内容の資料を検索する。(1時間)

※インターネットで調べる際は、検索キーワードが大切であることを伝えとよい。そのためにも、何が疑問点なのか、何について調べたいのかをはっきりさせたい。関連図書については、昼休み等を使って事前に図書室で閲覧させておくと効率がよい。

【キーワードの例】

無セキツイ動物・分類

【インターネットで検索した例】

目録のない動物を無セキツイ動物とします。セキツイ動物と比べるとする際に「人の骨(骨格)」があり、わたしたちにとって非常に重要な動物といえます。ここでは以前学習した無セキツイ動物のうち、無足動物をおおむね紹介いたします。

無セキツイ動物の種類

どんな動物がどんな分類に属するのか、紹介しましょう。

原索動物	アメーバ・ゾウリムシなど	
キョウヒ動物	ヒト・ウニ・ナマコ・クマノエなど	
節足動物	昆虫類	バッタ・アリ・チョウ・セミ・トンボなど
	甲殻類	エビ・カニ・ミジンコ・フシソバなど
	クモ類	クモ・ダニ・ワサリなど
	多足類	ヤスデ・ムカデ・アリなど
軟体動物	イカ・タコ・ナメクジ・エビ・アフリカなど	
環形動物	コカイ・イソムシ・ミミズなど	
線形動物	ワムシ・イタチムシなど	
扁形動物	カイチュウ・キョウチュウなど(寄生虫)	
扁形動物	プラナリア・シストマ・ワナダムシなど	
扁形動物	ヒドランソウ・クワガタなど	

おこしほどつくり複雑な動物になっていきます。下から順に通じ、知られてきました。

(4) A 3用紙一枚のレポートにまとめる。その際、○知りたい内容のポイント(キーワード)を明確にする ○必ず図表やグラフを用いて表現することを共通条件とし、それらの資料を活用して、調べたことをまとめる。(2.5~3時間)

【生徒のレポートの例】

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 毎回の授業の最後に、振り返りカード等を用い学習内容で疑問に思ったことなどを記録させておく。
- (2) 日頃の授業の中で、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実する。また、実験の目的をはっきりさせたり、結果と考察の関連を明確にして自分なりの考えを述べられる機会を意図的につくっていく。
- (3) 検索する際に的確なキーワードが見出せるように、授業のなかに、パソコンによる学習形態を取り入れていく。

9 まとめ

生徒はこうした方法で、教科書の学習内容を出発点にしてさらに知りたいという人がもつ自然な探求心を高めるとともに、改めて学習したことの意味を見出すことができる。このような実践を、一回だけでなく時間の許す限り多くの時間を使って取り組むことにより、論理的で分かりやすい表現の仕方が身に付くと考える。

(関谷 育雄)

自己紹介(発表活動)

ウ(イ)自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

1 身につけたい力

自己紹介の英文を参考にして、その英文を自分のことに置き換えて、わかりやすく相手に伝える能力を高める。自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力を高めさせたい。

2 主たる評価規準

I'm、やI likeを使って自分の名前や出身地、好きなことについて簡潔に自己紹介している。

3 単元・題材

自己紹介の書いてあるハンドアウトを参考にして、英語で自己紹介する。

4 指導のねらい

自己紹介は、入学してすぐに行いたい活動である。いくつかの教科書にも、1年生の初めに自己紹介を扱っている。ここでは、人前にでて、英語で自己紹介する。中学校で初めて英語にふれる生徒も多いので、「英語は難しい」「英語が嫌いだ」と思わせないように、配慮しながら指導する。

自己紹介するとき、聞き手を意識した表情や声の大きさに留意させ、日本文と英文の語順の違いも認識させる。このような活動を通して、他の人の前で説明する力や自分のことを表現する能力も高めていきたい。

また、学年が上がるにつれて、自分の経験や感じたこと、意見などを発表させる活動が

あるので、この活動が最初の発表活動で基礎となる。ほぼ全員の生徒が満足する活動にしたい。

5 単元・題材について

自己紹介は、いくつかの教科書で、1年生のLesson1で取り上げられている。題材としては、外国から来た友達が、皆に自己紹介をする場面や、お互いに初めて出会う友達どうしが、挨拶や自分のことを紹介しあう設定になっている。

初対面のあいさつや人の紹介に関する表現を理解し、応答することや、人前やグループの中で自己紹介ができることをねらいとした題材が多い。

6 使用するテキスト

使用している教科書の本文を利用するか、以下のような英文を与え、下線部を自分のことに置き換える。英文は1年生の夏休み前までに習う文法事項である。

Hi !

My name is _____.

Call me _____.

I'm from _____.

I'm a junior high school student.

I live in _____.

I like _____.

Thank you.

時期や生徒の状況により上記の自己紹介の文に新たな文を付け加えたり、削除しても良い。

7 授業の実際

- (1) 授業で教師が実際に自己紹介を英語でおこなう。生徒はその英語を聞き、名前、住んでいる場所、好きなことが理解できたかを日本語または英語で、教師が生徒に質問する。
- (2) 生徒に自己紹介のテキストを提示して、教師のあとについて、リピートさせる。その後、下線部のところに自分の名前や自分の住んでいるところ、自分の好きなことを入れ、暗記して言えることを目標にして、たくさん音読練習をする。
- (3) Walk around して、できるだけ多くの生徒と定められた時間内に、自己紹介をお互いにする。
- (4) ペアを作り、机を向かい合わせて、片方の生徒が、立って自己紹介する。次は交代して、他方の生徒が立って自己紹介する。交互で自己紹介が終了したら、片方が隣の席に移動して、新しい友達と自己紹介していく。できるだけ多くの生徒と自己紹介をする。[写真]
- (5) クラスの前に出て自己紹介をする。(発表活動)
- (6) 自己紹介を聞いていた生徒は、メモをとるなどして、話し手の内容をしっかり聞き、後で、その内容の質問をされたときに答えられるようにしておく。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 入学して初めての活動なので、間違いを恐れず、積極的に取り組むように配慮する。
- (2) アイコンタクトをしっかりとするなど適切な発表の態度と発表者の話しをしっかりと聞く態度を確立する。
- (3) 適切な声の大きさ、強勢、イントネーションなど、基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音させる。
- (4) テキストの本文を暗記させ、自己紹介の

パターン慣れ、スムーズに発表させる。

- (5) 本文を暗記して、自己紹介のパターンを確立させる。新しく習う文法事項を付け加え、1年の後半ではさらに詳しい自己紹介ができるようにめさず。

9 まとめ

PISA 調査の指導と改善の方向に、「学習指導要領のねらいとするところの徹底が重要である」とされている。自己紹介は、学習指導要領で取り上げるよう示されている。

自己紹介は、他人とコミュニケーションをとるために不可欠なもので、効果的に社会参加するためには、身につけておかなければいけないものである。他の人の前で自分のことについて話すことや何かを説明する能力の育成は、英語科で意欲的に取り上げることができる。その際、人前で自己紹介やプレゼンなどをする場合に、相手を意識して豊かな表情で話す、相手が気持ちよくうけいれられるような表情や雰囲気を作るなどの効果的な方法を身に付けさせたい。そのほかにもペアで道案内をする、自分が昨日したこと、自分の感じたことや考えたことを述べるなど発表する機会をもうけ、相手にわかりやすく表現できるようにしたい。



(平間 貴志)

美しいハーモニーを響かせるために楽譜を読む

ウ（イ）自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

1 身に付けたい力

楽譜から、さまざまな音楽のしくみなどがわかる力を身に付ける。

2 主たる評価規準

音や音楽、楽譜から、音楽のしくみなどがわかり、その良さをとらえ、合唱表現にいかすことができる。

3 単元・題材

音楽のしくみなどを感じ取り、より豊かに音楽を味わう

4 指導のねらい

音楽には、大小様々な構造がある。より音楽を楽しむためには、その作品がどのような音楽的な構造をもち、どのような表現をしているのかを考えた上で表現活動を行ったり、鑑賞活動をすることが大切である。

今回は、まず、既習した教材から音楽の構造としての多声的ハーモニーと和声的なハーモニーを知覚し、その後、楽譜にふりかえるという取り組みをする。楽譜という視覚的なものから音楽のしくみについて考え、そのおもしろさや美しさに気づき、表現活動にいかすことをねらいとした。

このような取り組みを通して、生徒一人ひとりの様々な音楽に対する興味・関心をさらに高め、自分なりの価値観の形成が図られるであろうと考えた。

5 単元・題材について

今回は読解力育成のために、声部の役割と

いう音楽的な構造に着目した。教材は、多声的、和声的なハーモニーが特徴的な合唱曲と「小フーガト短調（J.S.バッハ）」とした。

多声的なハーモニーと和声的なハーモニーを、楽譜を参照しながら歌い比べたり聞き比べる活動を通して読解力の育成を図る。

6 使用するテキスト

楽譜が最終的な読解力を育成するための書かれたテキストと設定したが、授業の展開場面では、実際の音や音楽そのものもテキストとしてとらえることにした。音楽の専門的な学習をした者であれば、楽譜そのものから音楽を読み取る力はある程度身に付いている。しかし、中学校の必修教科の中でそこまでの読譜力は必ずしも必要ないであろう。そこで生徒たちが実際に歌ったり聴いたりした音や音楽そのものをテキストの一部として考えた。授業の中では楽譜というテキストを読むために音や音楽そのものもテキストとしてとらえていくことが大切であると判断したからである。このテキストのとらえ方が音楽科において「読解力」育成を考えていく上では大きな特徴であると考えている。

以上のようなことをふまえ、先に述べた題材の楽譜を中心として、その他様々な音楽そのものというテキストも準備した。

7 指導の実際例

(1) 既習の学習から

多声的なハーモニー、和声的なハーモニーについて、既習した合唱曲を歌うことを通してそれぞれのハーモニー（音の重なり）

を確認する。

(2) 知識

それぞれのハーモニーの特徴を知る。(ここでは、いわゆる基礎的・基本的な知識として押さえる)

(3) 能力【知覚・感受力】

他の様々な合唱曲や「小フーガト短調 (J.S.バッハ)」などの器楽曲の楽譜を見たり、実際の演奏を聴いたりしながら、それぞれのハーモニーの働きが生み出す音楽表現の効果を感じ取る。

(4) 能力【鑑賞力】

新曲を聴き、ハーモニーを味わい、感じたことをまとめ、発表し共有する。

(5) 能力【表現力】

ハーモニーを感じながら、その良さをいかして既習の合唱曲をみんなで歌う。

(6) 関心・意欲・態度

それぞれのハーモニーについて、進んで聴き取ろうとしたり、表現にいかそうとしたり、主体的に自分で考えようとする。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) 参考例として聴く曲は、全曲ではなく、それぞれのハーモニーを特徴的にとらえられる箇所のみとし、合唱曲を中心に教材を選ぶ。
- (2) 自分の考えをまとめる際に、ポイントを押さえたキーワードとして短文でまとめる。(3) 知的な側面ばかりではなく、表現活動などから、感じる心や表現活動を仲間と共有するよろこびなどにも十分配慮をする。

9 まとめ

一人一人の子どもが人間として成長・発達していく過程を大切にしながら、豊かな人間性を形成していくために、想像力を働かせて自分の思いをかたちにしていくことが必要である。(中央教育審議会審議過程報告 平成18年2月13)

日 より引用)

今回の楽譜、音、音楽というテキストを用いた「読解力」の取り組みを通して、あらためて音楽科で取り組むことのできる「読解力」の育成が、非常に幅広く、重要であることがわかった。音楽科の学習内容の中には「読解力」を必要とする場面が数多く含まれていることが明らかになったからである。書かれたテキストとしての楽譜はもとより、音や音楽そのものから思考、創造できることは、言葉やグラフなどよりもより自由なものである。この点が音や音楽の特徴であろう。このような音や音楽をより深く思考、創造するために重要な力として「読解力」が位置づけられるのではなかろうか。音楽における「読解力」は、生徒一人ひとりがより深く音楽を味わうために重要な力であり、この力の育成が、より深い思考、創造を生み、音楽科が担うべき部分である、「豊かな創造力、豊かな人間性と感性の育成」へとつながるのである。

以上のようなことから、「読解力」の育成は、音楽の学習において大切な取り組みであるということが明確になった。

以下、今回の取り組みの際に、心にとめておいたことをまとめる。

- (1) 「読解力」育成のための新しい計画や授業を作るのではなく、現在行っている授業の中から、「読解力」育成につながる学習内容をより明確にすることが大切であろう。
- (2) 音楽の特徴を考え、書かれたテキストとしての楽譜はもとより、音や音楽そのものというテキストからの「読解力」育成についても考えるべきである。
- (3) 知の側面ばかりに視点がいかないように留意する。
- (4) 「読解力」の育成が音楽科の目標ではなく、音楽科の目標達成のため必要な「読解力」をどのように身に付けさせるかという視点に立つべきである。

(杉山 利行)

課題学習で「読解力」を育成するーコンセプトマップ法の活用を通してー

ウ(イ) 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

1 身に付けたい力

「物質のすがた」における課題学習を通して、自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成を図る。

2 主たる評価規準

課題(卵スッポンの実験)から見いだすことができる知識・理解やヒントから、実験の原理をコンセプトマップ(非連続型テキスト)を使用して、わかりやすく説明している。

3 単元・題材

単元:(2)身の回りの物質
ア 物質のすがた(学校図書:物質の性質、気体の性質)

題材:「物質のすがた」にお

ける課題学習:卵スッポンの実験(図1)

4 指導のねらい

「物質のすがた」における学習で獲得した知識・理解や技能をもとに、課題学習「卵スッポンの実験の原理をコンセプトマップ法を用いて説明しなさい」を解決することを通して、「読解力」の育成を図る。

5 使用するテキスト

本題材における課題解決の過程において、グループにおける話し合いや思考の過程を表現するにはコンセプトマップ法が適している。その都度、文章で表現しては話し合いの進行を妨げることになる。コンセプトマ

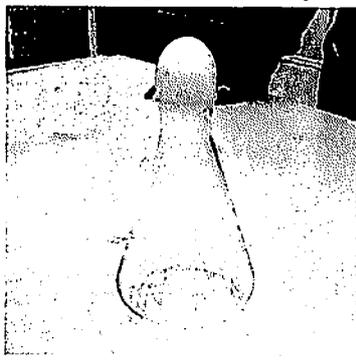


図1 卵スッポンの実験

ップ法を使用すれば、リアルタイムに自分たちの考えを表出し、話し合いを進行させることができる。グループのコンセプトマップを表現する場として、ホワイトボードを利用する。ホワイトボードは書き換えが可能で、自分たちの考えの変容に柔軟に対応することができる。ホワイトボードは、それぞれの考えをコミュニケーションする場なのである。このように、コンセプトマップ(非連続型テキスト)を利用することで、自分の考えを表現する能力の育成を図り、自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成〔ウ(イ)〕を図ることを意図した。

6 授業の実際(1時間扱い)

卵スッポンの実験は以前から紹介され、科学の本、Web サイト、科学館やTVのサイエンスショーなどで見たことがある生徒は結構いる。牛乳びん(授業では500CCの三角フラスコ)の中に燃えた紙片を入れ、ゆで卵より小さな穴を通り抜け「スッポーン」と気持ちよい音とともに、ゆで卵がびんの中に入っていく様子は、見る者を惹きつける。ところが「その原理は?」と問われると、とても簡単な実験でおもしろい現象ではあるが、その奥の深さに気づかせられるのである。

まさに、「物質のすがた(状態変化、気体)」における課題学習として適した題材といえる。そのときの問いは、もちろん「なぜ、卵はびんの中に引き込まれるのか?」である。その問いを解決することは、「物質のすがた」における学習やこれまでの学習(「身近な物

理現象」など)、生活経験などにおいて獲得した知識・理解や技能をフル稼働させ、それぞれの概念を関連付けて卵スッポンの実験の原理を説明することになる。

7 この授業を行う際のポイント

この課題学習は、生徒だけの力では解決できない部分もあるので、いくつかのヒントを出す必要がある。未習得のものに関しては、当然支援を行い、生徒の思考を発展させなければならない。

また、この授業の規準を達成させるために、下記のような点に配慮した。

- 認知的な葛藤：既有概念との不整合を自覚させ、課題を自分の問題として捉えさせる。
- 発達の最近接領域：課題が自分の力で何とか解決できそうだという見通しをもたせる。
- 自己効力感：課題に対して自分は解決できる力があると自身をもたせる。
- 問題解決的な学習：これまでの学習や生活経験で獲得したものから、自ら課題を解決する。
- 協同的な学習：グループの人と協力して課題を解決する（ホワイトボードの活用）。
- わかる・できるようになる授業：難しいことや未習得の部分についてはヒントを出す。
- メタ認知：「わかった自分、できるようになった自分」を認識させる。
- 称賛：課題を解決したことに対して、褒め称える。
- 達成感・成就感の実感：課題を解決したことによる、達成感・成就観を実感させる。

8 まとめ

右の図 2 は、本実践のあるグループの話し合いの結果をまとめたコンセプトマップである。卵スッポンの実験の原理を、水素、水蒸気、水に焦点化し、コンセプトマップに表したものである。コンセプトマップとしては不完全であり、科学的に不適切な表現もある。しかし、授業の最後には、このコンセプトマップをもとに、代表者 1 名が他のグループ

でプレゼンテーションを行い、相互評価において本時の目標を達成したと認められた。

つまり、卵スッポンの実験に関連する知識・理解と出されたヒントから、実験の原理を説明することができたのである。これまで学習や生活経験で獲得した知識・理解をもとに、一般化することができたといえる。このことは、理解を深化させたといえる。また、「読解力」の育成を図ることができたとも判断することができる。

本実践において、未習得の部分に関してはヒントを出した。しかし、「化合物」「化学変化」「原子・分子」（第 2 学年で履修する）などの概念が確立していない 1 年生にとっては、「化合物（紙が水素を含む）」「化合物の化学変化（紙の燃焼）」「原子論」などについては、あいまいさを残している。物質やその変化（化学領域）における 3 年間の指導計画を再構築する必要がある。

また、この単元（身の回りの物質）において、この卵スッポンの実験を含めて 3 つ課題学習を設定した。しかし、いずれも生活文脈との関わりが希薄である。PISA 調査における「読解力」においても「効果的に社会に参加するため」とある。理科で学んだことを、実生活で生かせることを確かめる課題学習の設定が、今後の課題である。

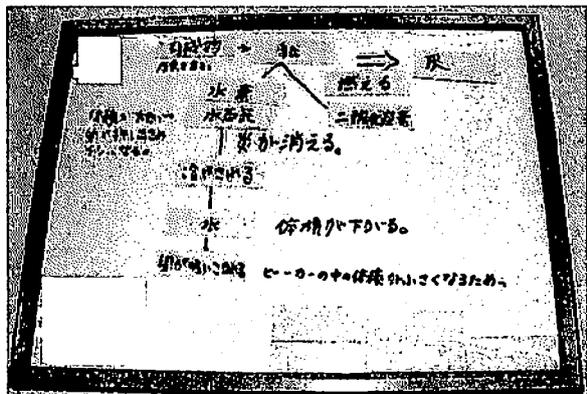


図2 話し合いの結果をまとめた
コンセプトマップの例

(田中 保樹)

IV 高等学校

「羅生門」のクライマックスを決めるグループ学習

ア（ア）目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

1 身に付けたい力

クライマックスを決めるという活動を通して、人物設定・構成などに留意した読解の技術を身に付けさせたい。

2 主たる評価規準

- ① 文中に根拠を求めながら、クライマックスを指摘しようとしている。
- ② 他者の意見の根拠を理解し、クライマックスとして適当かどうか判断しようとしている。
- ③ 人物設定・場面設定・構成がクライマックスにどのような効果をもたらしているかを考えながら読もうとしている。

3 単元・題材

小説 「鼻」「羅生門」芥川龍之介

4 指導のねらい

- ① 冒頭・発端・山場（の始まり）・クライマックス・結末・終わりという物語の基本構造を知り、これを言語知識として予測しながら読む態度を身につけさせたい。
- ② 読みの技術としてクライマックスを決めるという読み方を言語知識として身につけさせ、この技術を有機的に活用していくことを実感させたい。

5 単元・題材について

- ① 基礎的な技術を習得する際の初期活動は、「1. その活動ができるだけ単純で

明快なこと」「2. その活動を生徒相互が評価しあえること」「3. その活動に汎用性があることを実感できること」が挙げられる。そのための教材としては、短編で設定・構成のしっかりとしている教材が望ましい。

- ② クライマックス決定の過程では、指示をしなくとも登場人物の心情変化や場面設定に留意するようになる。（もちろんこの取り扱いのための言語技術習得のドリルも必要と考えるが、別の場面において設定するものとした）この点の深化を図るためには、クライマックスの決定後、主題について考えさせると有効である。この活動の際に改めて設定・構成に目をとめることとなるが、そのためには人物設定や場面設定の表現がしっかりとしている教材が望ましい。

6 使用するテキスト

- ① 「鼻」は設定・構成がしっかりとしており、物語の基本構造を確認し、クライマックスを決めるドリルワークに適した教材である。
- ② 「羅生門」は設定・構成が明確であり、人物設定・場面設定における表現も豊かである。また、クライマックスから主題を考える際にもさまざまな意見を持つことが可能な作品となっており、言語知識の獲得が読解の深化につながることを実感させるのに適した教材である。

7 授業の実際（5時間扱い）

（1 h）「鼻」を使って、物語の基本構造を確認させる。

- ① 冒頭・発端・山場（の始まり）・クライマックス・結末・終わりの定義を確認させる。
- ② 「桃太郎」などよく知られている昔話などを例として、物語の基本構造を確認するドリルワークを行わせる。
- ③ 「鼻」について、物語の基本構造を確認させる。

ア. 冒頭の確認

イ. 人物設定の確認

ウ. 発端の確認

エ. 山場の始まりの確認

- ④ 「鼻」のクライマックスの一文を指摘させる。

注）冒頭、山場の内容を意識させて、クライマックスの決定に活かす。

- ⑤ 要約を課題とする。

ア. 基本構造の各部分について一文でまとめさせる。

イ. クライマックスの一文を中心に要約をさせる。

（2 h）「鼻」の要約文を評価し、基本構造を知ることが内容理解につながることを確認させる。課題の中からすぐれた要約を提示、評価する。

- ① クライマックスの根拠が適切で明確

- ② 文構造を意識した指摘

（3 h）「羅生門」について、基本構造を意識しながら読ませる。（グループ学習）

- ① 物語の基本構造を意識しながら読む。

- ② クライマックスの一文を書き出す。

- ③ その根拠を書く。

- ④ グループ内（3人1組：司会、記録、発言【積極的に発言する。グループの意見を発表する。】）で意見交換をする。

ア. 発端、山場の始まり、クライマックスが明確に分けられているか。

イ. クライマックスの根拠が明確か。

ウ. 相手の意見をメモしているか。

エ. 相手の意見を聞いた上で、自分の意見を再検討しているか。

オ. グループ内で意見を集約しようとしているか。

（4 h）各グループの意見交換、クライマックスの決定

- ① 「発言」係が班の集約された意見を提示

ア. クライマックスの一文の提示

イ. 理由の提示

- ② 各グループの意見をメモにとる

- ③ 各グループで再検討、集約する

（5 h）文構造からクライマックスに関する意見を吟味する。

8 この授業を行う際のポイント

- ① 物語の基本構造を言語知識として身につけることを主とし、特に「鼻」ではそのテーマを深く掘り下げることが目的としない。

- ② 言語技術の習得を目的とした活動の際には、作品を意図的に省略したり、部分的な提示をしたりして、単純な活動となるよう配慮する。

9 まとめ

どのような技術も継続的な活動を通じて獲得されるものであり、その応用には一定の時間を要する。したがって、技術の汎用性を意識できないまま学習活動が行われると技術の獲得自体が目的となってしまう恐れがある。言語技術に関する批判的な視点の一つはここにある。言語技術の向上を目的とした授業は、継続的な指導とともに、授業内での達成感と身につけた技術の汎用性を確認させる活動が重要となる。

（高松 洋司）

クリティカルリーディングのための三角ディベート（マイクロディベート）学習

ア（イ）評価しながら読む能力の育成

1 身に付けたい力

ディベートにより、評論を複数の視点から考察し、筆者の視点（立脚点）、論の客観性などを評価し、読み進める能力を高める。

2 主たる評価規準

- ① 筆者の主張に対して賛成の立場に立ち、本文に根拠を求めた意見を言うために、読解をしようとしている。
- ② 筆者の主張に対して反対の立場に立ち、本文に根拠を求めた意見を言うために、読解しようとしている。
- ③ 賛成・反対の両方の意見を、主張の明確性、根拠の客観性、信頼性などから吟味し、どちらが有利か判断しようとしている。

3 単元・題材

評論 「水の東西」山崎正和

4 指導のねらい

筆者の主張を客観的に吟味するために、批判的な立場から考察する有用性に気づかせたい。

5 単元・題材について

高校生が目にする評論は、その対象が一般的（環境、高齢化社会など）であり、そのため筆者の視点（立脚点）や主張の独自性が明確な作品が教材として適している。

6 使用するテキスト

- ① 「水の東西」は構成がしっかりとしてお

り、例には対比が多用され、また幅広い論証が進められている。

- ② 一方で、「鹿おどし」など現代の生徒には理解しがたいものとなっている例があったり、「自然に流れる」という表現が文脈から解釈される必要があるなど、内容や表現を吟味しながら読み進めるクリティカルリーディングの教材として適している。

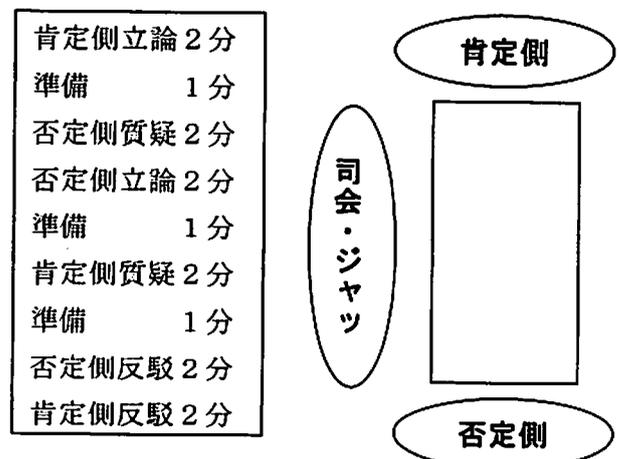
7 授業の実際（5時間扱い）

（1・2h）三角ディベート（マイクロディベート）の確認

① 役割分担

- ・ 肯定（1／2名） 否定（1／2名）
司会・ジャッジ（1／2名）
- ・ それぞれの担当を入れ替えて、3つポジションをすべて行うことを予告しておく。

- ② 課題を提示し、三角ディベートを行う。



※ 場合により立論・質疑・反駁を各1分にする。

※ ナンバリング（理由の数などを先に明示する）、ラベリング（何について述べるかを先に明示する）の確認をする。

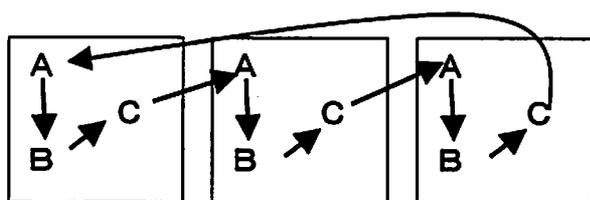
※ メモを取ることを確認する。

※ ジャッジの仕方を確認する。

- ③ 「水の東西」を提示し、賛成・反対それぞれのシナリオを作ってくることを課題として指示する。

※ 否定する際は、本文の表記・内容を吟味し、批判することに留意させる。

(3h) 三角（マイクロ）ディベート



- ① 図のように、A（肯定側）B（否定側）C（ジャッジ・司会）を順次入れ替わっていく。
- ② A→B→C入れ替わってディベートを行った段階で、本作品についての意見を書く（課題とする）

(4・5h) 課題の中からすぐれたものを提示し、評価する。

※ 否定側立論の中から全体に反映させたい主張を取り上げ全体で考えさせる。

※ 肯定側反駁の中から具体的例としてすぐれたものを提示し、評価する。

8 この授業を行う際のポイント

ディベートの最も重要な活動はアフターディベートにある。言い換えると、賛成・反対という対立形式から離れ、複数視点で筆者の考えを捉え直す、また対立する意見の妥協点を探ることを意識させる、これら2点を意識

させる活動が重要と考える。このことはクリティカルリーディングの技能を身につけさせる際にも重要なポイントとなる。

クリティカルリーディングは「批判的読解」「批判的読書技術」などと表されるが、これは作品に対して否定的な態度で臨むことを意味してはいない。文章を分析し、筆者がなぜその考えに至ったかを考察し、自身は筆者が対象とする事柄についてどう考えるのかを明らかにすることである。よって、根拠が明確で客観性を伴った意見であることを前提に、生徒個々の意見が出てくることに重点があり、意見の集約にあまり拘りすぎないように注意する必要がある。

9 まとめ

生徒自身の視野を広げる手段として、評論を読むという活動が適していることを実感させたい。

直接体験による思考の深化、自身の世界観の広がりには限界がある。というよりも、これらには読書活動など疑似体験が多く関わっており、読書活動の重要性が指摘される理由でもある。

評論は特に自身の世界の境界を意識する契機として、高校段階で質の高い評論（ここでは、一般的な事象に対して、筆者の独自性が明確に打ち出され、例示や文構成において筆者の論拠が適切な抽象化によって客観的信頼性を持っている文と位置づけたい）に数多く触れさせたい。そのためには、筆者の主張を鵜呑みにしないクリティカルリーディングの視点が必要であるが、一方で筆者の象徴や論拠をまず受け入れる肝要な態度も重要である。言い換えれば、客観的に批評する態度を持つということである。このことを意識しながら、生徒の言語知識を身につけさせる活動を心がけたいものである。

(高松 洋司)

新聞記事を読み、自分の考えを発表する

ア(ウ)課題に即応した読む能力の育成

1 身に付けたい力

与えられた課題を意識してテキストを読み、内容を要約・分析し、自らの意見を課題に即応する形で表現する能力を高める。

2 主たる評価規準

与えられた課題に必要な情報を、新聞記事からの確に読み取っている。

3 単元・題材

新聞記事を読み、自分の考えを発表する。

4 指導のねらい

本事例では、PISA型読解力＝自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、熟考する能力を身に付けることをねらいとしている。

学習者にとって身近でタイムリーな新聞記事をテキストにすることで、まずは読むことへの苦手意識を軽減することを意図した。同様の意図から、学習者が実体験をもとに感想を述べ分析することが容易な設問を、最初に用意した。

学習者が感想を述べ分析することにより、それまで漠然と捉えられていた外食産業各社の個性や営業戦略が明確なものとなり、そこに新たな発見や疑問・意見が生まれることを1つめの目標とした。

次に、学習者が互いの意見を述べ合うことで相互評価・自己評価を行い、自らの考えを深めることを2つめの目標とした。

さらに、課題を与えられてテキストを読むことから一步進んで、自ら問題意識を持ってテキストを探すことで、実生活の様々な場面で直面する課題に対応する力を身に付けることを最終目標とした。

5 単元・教材について

本事例ではテーマを設定し、それに従って集めた新聞記事をテキストとした。普段の授業の中で、複数の新聞記事を比較検討、分析するというクリティカルリーディングを念頭に置いた学習活動はあまり行われてこなかった傾向にある。今回の単元においては「あなたが経営者であるならどのようなハンバーガーショップをつくるか」という課題を与え、テキストを分析、批評しながら自らの意見を構築する活動を通して、課題に即応した読む能力の育成を目指した。

6 使用するテキスト

生徒にとって身近な話題である、ハンバーガーに代表されるファストフードを取り上げ、ファストフード各社の動きや最近の流行メニューを特集したもの等、複数の新聞記事の切り抜きを準備した。

7 授業の実際（5時間扱い）

○ 第1時

- ① 単元の目標を確認する。
- ② テキスト（新聞記事の切り抜き）を配布し、漢字の読み、語句の意味を確認する。
- ③ テキストを読んだ感想、疑問点をワークシートに記入する。

○ 第2時

- ① 前時のワークシートをもとに、感想、疑問点を共有する。
- ② テキストをもとに、ファストフード各社の個性を分析しワークシートに記入する。
- ③ なぜそのような個性（経営方針）を打ち出したのか、そのような経営方針をとることのメリット・デメリットは何かについて、自分の考えをワークシートに記入する。

○ 第3時

- ① 前時のワークシートをもとに、ファストフード各社の経営方針の違い、その方針のメリット・デメリットについて共有する。
- ② 自分が経営者であれば、どのようなハンバーガーショップを作るか、ワークシートに自分の考えを記入する。その際、なぜそのような方針をとるのか、その方針をとることで期待できる効果について、根拠を挙げて説明する。

○ 第4時

- ① 前時に考えた経営方針について発表し、質疑応答を行う。
- ② 他の学習者の発表について、賛同できる内容・できない内容とその理由、発表のしかた等について相互評価を行い、評価シートに記入する。

○ 第5時

- ① 前時の発表を参考に、自分の経営方針を再検討し、改善案をワークシートに記入する。

その際、方針を改善した理由を、根拠を挙げて説明する。

- ③ この単元を学習したことで身についたものは何かについて、自分の考えをワークシートに記入する。

○ 事後学習として

次の新聞記事を読む授業の時までに、興味・関心のある記事を集めておく。

8 この授業を行う際のポイント

① 往々にして正解の提示を求める学習者がいるが、答えはひとつではないことを理解させ、様々な意見の違いを楽しむように指導することがポイントである。

② 授業者は各時終了時にワークシートを回収・点検し、学習者の理解の程度や興味・関心の方向を確認する必要がある。状況に応じて次時の導入時に、補足説明や単元の目標の再確認を行うためである。

③ 本事例は、学習者の状況に応じて繰り返し行うことが望ましい。初めは授業者が記事を用意するとしても、徐々に学習者自身が、興味・関心の有る記事で、なおかつ様々な意見を持つことが可能なものを見つけられるようにアドバイスしたい。

9 まとめ

情報を受け入れて分析し感想を持つことは、誰もが特に意識をせずに行っていることであるが、本事例では、それを段階を追って意識的に行うこととした。他の学習者の意見を聞くことは、様々な情報分析・批評のしかたがあることを学習する良い機会ともなる。繰り返し学習することで、意見を書くこと、発表することに対する抵抗感をなくすこともねらいとしたい。

（西村 礼子）

本の紹介文を書く

イ（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

1 身に付けたい力

内容を的確に理解する力を高めるとともに、他の生徒たちが興味を持つよう、理解した内容を明確に表現する力を育成する。加えて副次的にはワープロソフトを操作し表現する力も高める。

2 主たる評価基準

読んだ本の内容について理解したことが明確に表現され、その内容が的確で、かつ他の生徒にも興味の持てる紹介文となっている。

3 単元・題材

「本を探す」・「紹介文をまとめる」

4 指導のねらい

読書は本来、個人で「好きな時に、好きな本を読む」という姿勢が望ましいが、昨今の若年層の読書離れへの対応は個人への読書喚起だけでは不十分な状況にある。読書の力は単に国語科の力だけでなく、他教科の学習活動にも及ぶ根幹的な力の一つであり、卒業までに着実に育てたい力である。本校では平成14年度より国語科全教員で推薦図書を選定し本校生徒にブックリストとして紹介してきた。しかし単発的な読書紹介だけでは読書習慣の定着を図ることは困難であり、3年間を見越した継続的・計画的な読書指導ならびに読書生活指導が必要なことを確認した。そこで、生徒が読みやすい（読んでみたい）本のリスト（ブックリスト）を毎年改訂し、また月ごとや長期休業中ごとに教科全体での読書指導を計画した。更に本授業では紹介文作成

により自ら表現する能力の育成を期した。

5 単元・題材について

単元：「本を探す」。

題材：図書室及び国語科教室の本。

（夏季休業中の課題：紹介文を書く。）

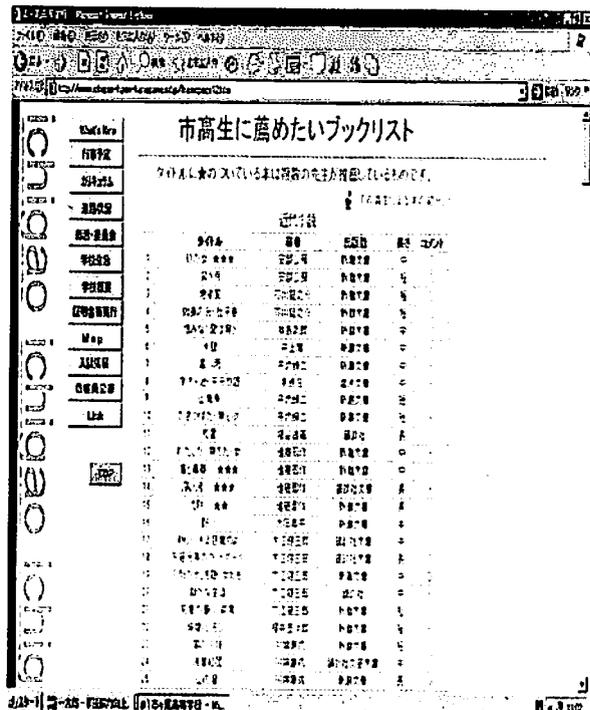
単元：「紹介文をまとめる」。

題材：生徒の選定した本、紹介文。

6 使用するテキスト

「ブックリスト」（約230冊）を提示したが、「ブックリスト」以外の本も可とした。

※ 本校国語科では14年度よりブックリストを作成し、HPで閲覧可能としている。ブックリストは年度ごとに改訂し、現在は教員による推薦文と合わせて閲覧可能となっている。



7 授業の実際（4時間扱い）

(1) 図書室及び国語科教室で本を選定し、選定した作品を読み、作品の紹介文（短文）を書く。（「本を探す」2時間）

(2) 夏季休業中の課題として、選定した作品の紹介文（長文）を書く。

(3) 夏季休業中の紹介文を基に、紹介文を短くまとめる。まとめた紹介文をFDやCDで提出する。（「紹介文をまとめる」2時間）

(4) 紹介文を「市高中生による本の紹介」としてHPでの閲覧を可能とする。

The screenshot shows a web browser window displaying a page titled "市高中生による本の紹介 その一". The page has a sidebar on the left with a vertical navigation menu containing items like "Home", "About Us", "Contact Us", and "Library". The main content area is titled "市高中生による本の紹介 その一" and contains several entries of book reviews. Each entry includes a book title, author, and a short paragraph of text. The reviews are written in Japanese and appear to be student-submitted. The browser's address bar shows a URL starting with "http://www.city-ichigo.ac.jp/".

8 この授業を行う際のポイント

(1) 指導者側が用意したブックリストは、所謂名作や評価の安定した作品が殆どで、生徒もそのような本を選び読書するものと考えていたが、選定された本は生徒にとって読み易いドキュメント系のものが大勢を占めた。生徒が普段読んでいる本や読みたい本と、指導者側が読ませたい本との乖離は大きい。図書選定が読書習慣定着の第一歩と位置づけ、本の選定の際には、特に指導は行わない。

(2) 紹介文は何らかの手段を講じて、必ず生徒同士が閲覧できるようにすること。他の生徒の紹介文を読むことで、読書意欲を喚起することができるようにする。

(3) 一冊の本を深く読む生徒もいれば、多読に走る生徒もいる。更に読書の質までを含めると、評価は一層困難になる。そのためこの授業では、本を手にとること、自分の読んだ本を自分の言葉で紹介することに重点を置く。

9 まとめ

1 学年 2 クラスを対象に、1 月にアンケートを実施したところ「入学時と現在を比べて読書量が増えた」といった結果は読み取れなかったが、「読書の幅が広がった」「読書への興味がわいた」という意見は多く見られた。目に見える効果はすぐに現れないにしても、地道に読書指導や自分の言葉で表現する指導を続ける必要がある。ブックリストの改訂や他教科の教員による推薦図書も求められる。また、読書や表現の必要性について国語科内での共通認識を継続的にとるために研修会等を定期的に設定し、教科及び学校全体で「テキストの内容を要約・紹介したり、再構成したり、自分の知識や経験と関連付け意味付けたり、自分の意見を書いたり、論じさせたりするなどの機会を設ける」（『読解力向上に関する指導資料』P.15）必要がある。

（松岡 豊）

文化祭の模擬店に必要なモノをリストアップする

イ（イ）日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

1 身に付けたい力

文化祭の模擬店で、ホットドッグとジュース・ウーロン茶等の清涼飲料水を販売すると仮定して、ホットドッグの販売や模擬店の装飾に必要なモノを具体的にリストアップすることで、抽象的な事柄を具体的に表現する能力を高める。

2 主たる評価基準

実際の模擬店で販売や装飾に必要な物品を具体的にリストアップできている。リストアップした物品で実際に模擬店販売を行うに十分である。

3 単元・題材

「プレゼンテーション」

4 指導のねらい

本校生徒は基本的にまじめで授業態度も良好であり、文化祭や体育祭、或いは球技大会等の学校行事には特に積極的に取り組む。学力実態を概括すると、中学時代にはトップクラスであった生徒が大半を占めている。従って定期試験などへの取り組みもおおよそは満足できるものと言える。ただしその学習方法は記憶力に頼る傾向が強く、範囲の明確な定期試験等では好成績を収めるものの、範囲の広範な実力試験や模擬試験等にはうまく対応できない面が見られることもある。

以上の点から、記憶力に加えて応用力を身に付けさせるために、「抽象を抽象に」「抽象を具体に」「具体を抽象に」「具体を具体に」と言い換える能力を高めていくことが必

要である。

5 単元・題材について

単元：プレゼンテーション

題材：文化祭企画書－模擬店（加熱調理団体）－

6 使用するテキスト

『文化祭規定』（「加熱調理団体細則」）

7 授業の実際（4時間扱い）

(1) 当該の単元に入る前に授業の導入として以下の二つの文を示し、文の区別に「正/誤」だけでなく「具体/抽象」のあることを説明する。具体と抽象の違いについても説明する。

「世界は、馬である。」

「世界は、物質である。」

(2) 当該単元に入る前に、以下の説明文を具体的に書くことで、日常の動作・行動・手順を再認識し、具体的に表現することに慣れる。

「パパヌキの遊び方」（600字～800字）

「〇〇駅での切符の買い方」（600字～800字）

（〇〇には具体的な駅名が入る）

(3) (2)に引き続き、以下の題名で具体的に書くことによって、自分の個別具体の体験を再認識し、具体的に説明できるようにする。

「私の高校生活」（600字～800字）

(4) (3)に引き続き、以下の題名・条件により、抽象的に言い換えることで、個別具体の体験が高校生一般に当てはまることを学ぶ。

・「楽しい高校生活」（600字～800字）

・具体例は「私の高校生活」と同じとする。

・結論を「充実感と達成感」とする。

(5) 9月に行なわれる文化祭に向け、文化祭企画書提出時期(5月～6月)に合わせて「文化祭模擬店に必要なモノ」をリストアップする(書式を用意する)。30項目以上をリストアップすることとし、可能な限り購入先・単価・個数も記入する。

- ・『『ホットドッグ』『ジュースやウーロン茶等の清涼飲料水』を販売する模擬店に必要なモノ』(2時間。集約したリストの配布を含む)
- ・「模擬店の装飾に必要なモノ」(2時間。集約したリストの配布を含む)

8 この授業を行う際のポイント

(1) 単元に入る前に日常生活の中での具体と抽象の区別や言い換えに慣れるようにする。

(2) 授業の導入段階では、「抽象→具体」の言い換えを重視する。生徒が良く使用する「楽しい」「面白い」「頑張る」が、日常生活の中では、具体的にどのようなことを答えさせたり書かせたりするのも一つの方法。

(3) リストは提出させ、教員が全項目を集約する(重複する項目は削除)。集約した全項目をリストにして生徒に配布することで、自分の気付かなかった点に気付かせ、具体的に思考する幅を広げる。

9 まとめ

30項目以上が条件だが、30項目を記入できない生徒もいれば40項目以上を記入する生徒もいるというように生徒間で較差が見られた。また、購入先はある程度記入できたものの単価・個数については満足のいく記入とはならなかった。ちなみに17年度文化祭の入場者数は、土曜・日曜の2日間で約3800名であった。

今回のような単元を実施する際は、予め入場者数の把握や単価についての市場調査を行わせ、企画書の内容をより具体的にすることで、「抽象→具体」の言い換えが身に付くようにしていく必要がある。

(松岡 豊)

文化祭企画書				
2016年度 国語科 実践科目				
全頁数	3年	国	書	氏名
共通項目				
日付区分	3年10回全画区分		か島調理	実習場所の希望
販売食品	ホットドッグ、ジュースやウーロン茶等の清涼飲料水			
11: 実習時間以外の使用時間 調理室(下準備のみ)				
12: ホットドッグ、ジュースやウーロン茶等の清涼飲料水	購入先(具体的な)	単価(円)	個数	計(円)
13: 調理器具、使用する器具等に必要モノ				
14: ソーセージ	OKS17			500
15: ホットドッグ用のパン	OKS17			500
16: トース	OKS17			20
17: ドラムス	OKS17			
18: チーズ	岡崎食品			
19: マーガリン	OKS17		100	
20: ナチョチップ(チューブ入り?)	OKS17		1	
21: スライスチーズ(チューブ入り?)	OKS17		1	
22: ココアパウダー	OKS17		10	
23: フォーズ(ペットボトル) 2L	岡崎食品のスーパーマーケット		10	
24: オレンジジュース	OKS17			
25: 烏豆(ペットボトル) 2L	OKS17		10	
26: コカコーラ(ペットボトル) 1.5L	OKS17		10	

文化祭企画書 (装飾用)				
2016年度 国語科 実践科目				
全頁数	3年	国	書	氏名
共通項目				
日付区分	3年10回全画区分		か島調理	実習場所の希望
販売食品	ホットドッグ、ジュースやウーロン茶等の清涼飲料水			
11: 日付コンセプト 装飾				
12: 装飾に必要なモノ	購入先(具体的な)	単価(円)	個数	計(円)
13: 装飾品				
14: 紙の丸	各店併用			
15: 筆(青) 30	町田の書店		1	
16: 筆(白) 30	町田の書店		1	
17: 筆(赤) 10	町田の書店		1	
18: テント	学校備品		1	
19: 旗	学校備品			
20: 椅子	学校備品			
21: 皿	各店併用		3	
22: ジャージ	各店併用		40	
23: コスプレ(5枚入り)	100円均一ショップ		10	
24: 旗(5枚入り)	100円均一ショップ(ダイソー)		5	
25: 旗(10枚入り)	100円均一ショップ		2	
26: 旗(10枚入り)	100円均一ショップ		2	
27: 旗(10枚入り)	100円均一ショップ		2	
28: 旗(10枚入り)	100円均一ショップ		2	
29: 旗(10枚入り)	100円均一ショップ		2	
30: 旗(10枚入り)	100円均一ショップ		2	

文章や資料から、作者（作家）の紹介カードを作ろう

ウ（ア）多様なテキストに対応した読む能力の育成

1 身につけさせたい力

図表や写真などの非連続型テキストを含む国語便覧の作者（作家）紹介ページから、必要な情報を読み取る能力を高める。

2 主たる評価規準

いろいろなテキストから、作者（作家）を紹介する必要な情報を読み取っている。

3 単元・題材名

「作者（作家）の紹介カードを作る」

4 指導のねらい

国語の授業で読解力の育成を考えると、どうしても文字情報をまとめる取り組みを考えがちである。しかし、日常生活や社会生活を送る上では、文字情報ではない非連続型のテキストの内容を的確に読み取る力も必要となっている。特に、現代のように様々な情報が視覚を通して強く働きかけてくる時代には、正確に情報を整理する能力が不可欠である。

そこで、ここでは国語便覧の作者（作家）紹介ページの情報を読み取り、それを分類・整理しながら、紹介カードにまとめていく。

図表や写真などの非連続型テキストを含む国語便覧の作者（作家）紹介ページを読む。

紹介カードに書き入れるべき最低限の項目にはどのようなものがあるかを出し合う。（氏名、肩書き、生没年程度のものとし、生徒各自の独創性を尊重するために、あまり細かい制約を設けない。）

紹介カードは下書きをしたうえで、消書して提出する。パソコンでの加工も許可するが、加工技術を問うものではないことを伝える。なお、カードの横に、どのような点を特に意識して作成したかを書いてもらう。

紹介カードを印刷し、生徒に提示し、印象を述べ合う。読み取った情報を上手に整理し、効果的に表現している作品を選び、批評し合う。

読み取った情報を受信するだけでなく、発信することで、読解を深める効果が期待できる。

また、他の生徒の紹介カードを提示することで、人によって読み取る情報に違いがあることや、同じ情報でもより効果的に表現すれば、他者に対して強く印象づけられることも学ばせたい。

5 単元・題材について

この活動だけで独立した単元とはならない。例えば、「小説『羅生門』の導入部分で芥川龍之介の紹介カードを作る」のであれば、小説『羅生門』の単元の一部の活動ととらえる。

国語総合の授業では、他に太宰治、井伏鱒二、谷川俊太郎、中原中也などの作家や詩人でも可能である。

6 使用するテキスト

- ・国語便覧の、該当する作者（作家）のページ。文字情報だけでなく、図表や写真も含んでいる。

- ・生徒によっては、図書館の本またはインターネットからの情報。

7 授業の実際(単元全体の中の2時間扱い)

- (1) 小説の導入部分で作者の紹介をする際、国語便覧を用いる。作者の略歴が年表で示されていたり、象徴的な図表や写真が掲載されている。このテキストから、紹介カードに記すべき必要な情報を読み取り、それによって得た情報を、カードに仕上げるといった形で表現する。

この授業は、読解力の受信だけでなく読解力を発信することにも重点を置いている。

- (2) 紹介カードに書き入れるべき最低限の情報を出し合ったあと、実際にカードを作成する。

- (3) カードを提出する際に、どのような点を強く意識して作成したかを書く。

- (4) 紹介カードを印刷したものを配布し、相互批評を行う。このとき、4人程度の少人数の方が意見を出しやすい。各グループ毎に印象に残る作品をあげ、どのような点が印象に残るかを全体に向けて発表する。(このとき、斬新なイメージの作品に良い評価が集中することがあるが、情報を的確に読み取り、それをまとめている作品にも目を向けさせたい)

8 この授業を行う際のポイント

- (1) できれば、便覧で1～2ページ分が掲載されている作家がよい。国語総合に限らず、高校の国語では、芥川龍之介、中島敦、森鷗外、高村光太郎などでカードを作成した。(中島敦『山月記』が教科書

にあるが、漢文調の文体で生徒は理解がしづらいつ感じようだ。しかし、カードを作ると親近感がわくようで、それ以降、あまり抵抗感を感じなくなる。)

多くの生徒が知らない人物の場合には、国語便覧を読ませるだけでなく、授業者からも補足説明が必要であろう。

- (2) 必要な情報を的確に読み取り、時には強調したり、補足したり、重要性に優劣をつけながら考えることが重要である。また、読み手に印象深く伝えるための、視覚的な工夫も必要であることを気づかせたい。

完成したカードを印刷し、相互批評するので、カードの大きさは統一するとよい。(縦8割、横9割の長方形の枠を作ると、A4サイズに6人分掲載できる)

- (3) カードに、強く意識した点を書くのは、どのような情報を読み取ったのかを、授業者が確認するためである。生徒によっては、的確な情報を読み取りながらも、それを効果的に表現できない者もいる。このような生徒を評価する手だてとするためである。

9 まとめ

国語便覧は文章が中心とはいえ、図や表、写真など、多様なテキストがそのページの中に集約されている。その情報を自ら分類・整理し、体系立ててまとめることは、情報を読み解く学習といえるだろう。様々な情報が入り乱れる現代において、主体的に情報を読み取り、整理する力を身に付けることが必要である。

(遠藤 広樹)

作家の文章に触れ、洗練された表現について考える

ウ（イ）自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

1 身につけさせたい力

作家の洗練された文章をヒントに、自分が表現したい世界を、簡潔な文章で効果的に表現する能力を高める。

2 主たる評価規準

自分が表現したい世界や伝えたい心情を、一定の条件の中で簡潔に、効果的に描くことができる。

3 単元・題材

「洗練された表現を知り、表現の能力を高めよう」

4 指導のねらい

一般的に、小説を読むことは、読んだ個人の中で完結すると思われる。一方向性で受け身の読書を、意図的に立場をかえて、作家になったつもりで表現してみようというのが、この取り組みの特徴である。小説を読んだことはあっても、書いたことがない生徒がほとんどである。なにげなく読み過ごしてしまう表現の中に、作者の意図や伝えたい世界観があることを感じさせたい。

特に、小説の中での風景描写には、登場人物の心理も描かれることが多いことを伝え、作家は短い文章の中で、的確に世界を表現していることを実感させる。洗練された文章を意識的に読解することで、表現する難しさを感じ取るとともに、表現する喜びも感じ取らせたい。

自分の世界を表現した作品は、他の生徒に

も読んでもらいながら、相互批評する。身近な友人が表現した文章に触れることで、刺激を受けつつ理解が深まることが望まれる。こうして、お互いの表現した世界を読み解く力を高めていくことを考えたい。

5 単元・題材について

単元名「洗練された表現を知り、表現の能力を高めよう」

古典文学や現代文学の表現に着目し、自らも豊かに表現することを意識した単元である。

- ・小説の中の表現で、風景や人物の描写に優れている部分を提示し、そこに描かれている表現世界について意見交換をする。
- ・文章を書くための一定の条件を与え、その枠組みの中で、効果的に表現できるよう意識し、生徒が二百字程度の文章を書く。
- ・生徒の作品を印刷し、互いの作品を吟味し、批評し合い、理解を深める。

6 使用するテキスト

心理描写や情景描写にすぐれている小説の中の一部。（二百字程度が望ましい）

実際の授業では、幸田文『おとうと』の冒頭の一段落を紹介した。ここには川や土手、天候や季節感を描写しながら、人々の姿も描かれ、冒頭にあることから、小説全体を貫くイメージが表現されている。

7 授業の実際（4時間扱い）

- （1）これまでに読んだ小説の中から、その表現が印象に残っているものを出し合う。

意見が出づらな場合は、高校の授業で印象に残ったものを思い出す。(すると、例えば『羅生門』の冒頭の場面「ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた」などが出てくる)ここでは、小説の中の比較的短い表現でも、読み手の印象に残ることを気づかせる。

- (2) 次に、二百字程度の作家の文章を提示し、この文章から読みとれる情報を話し合う。

前後関係がないので正確な読解を要求するのではない。話し合いのポイントとして、その文章から読みとれる事実と感じられる印象に分けて分析するとよい。

- (3) 状況設定に一定の条件を加えた上で、二百字程度の文章を書いてみる。その際、自分が描きたい世界を強くイメージし、そのイメージが読者に伝わるように推敲を重ねる。

幸田文『おとうと』の冒頭を使った授業では次のような条件で、印象に残る文章を書かせた。

「○○、△△、川と土手」

○○には季節や月など一年のうちでいつ頃かを書き、△△にはその文章を象徴している言葉を書く。例えば「二月、風がさすような、川と土手」「夏の終わり、夕方の、川と土手」などとする。以下は「一月、寒い冬の夜の、川と土手」を表現した生徒の作品である。

川が静かに流れている。周りには、枯れた木に白い雪の花が咲いている。ふわふわと天から落ちる雪は、土に吸収されずに積もっている。川は冷たく、触れると皮膚に不快感が走る。しかし、川の澄み切った流れに安心感を覚えた。白い吐息に白い雪、

川の静かな流れと少しだけ明るい家の光。
……

- (4) 提出された文章をパソコンで打ち直し、生徒は互いの文章を読み、意見交換を行

う。

8 この授業を行う際のポイント

- (1) この授業は、自分の世界を自由に表現することを重視している。そのため、ある程度、文章を書くことに慣れている必要があり、また自分の文章が紹介されることから、学習集団内の人間関係も成熟している必要がある。このことから、実施時期として年度当初でない方がよい。

(教科書でも「豊かな表現」を目標とした単元は後半にあることが多い)

- (2) 提示する作家の文章は二百字程度で、季節感、人物の心情等がイメージしやすく、なおかつ洗練された部分がよい。小説の冒頭は、前後関係に関係なくイメージでき、使いやすい。文章から読みとれる情報を話し合う時は、少人数のグループ活動が有効であり、グループ毎に発表すれば全体で情報を共有することができる。

- (3) 実際に文章を書く場面では、例えば「○○、△△、川と土手」のように、一定の条件を設定すると書きやすい。それでも、文章を書くとき行き詰まることも多く、洗練された印象的な文章を書くことは容易でないことがわかる。なお、生徒作品は季節順に並べて提示すると、同じような季節や場面の設定でも、表現法によって全く印象が異なることに気づいたりもする。

9 まとめ

自分が表現したい内容を、正確に印象深く他者に伝えることの難しさを感じるとともに、文章表現によって、奥深い情景描写や豊かな感情表現ができることを実感させたい。日頃から、文章に接する機会を多く確保し、文章を通して自己表現できる生徒を育てることが大切である。 (遠藤 広樹)

資料

資料 「読解力向上に関する指導資料～PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向～」より抜粋

Ⅱ PISA調査(読解力)の結果を踏まえた指導の改善

1 指導の改善の方向

(2) 改善の具体的な方向

教科国語を中心としつつ、各教科、総合的な学習の時間等を通じて、次のような方向で、改善の取組を行う必要がある。

① テキストを理解・評価しながら読む力を高めること

読む力を高めるためには、テキストを肯定的にとらえて理解する(「情報の取り出し」)だけでなく、テキストの内容や筆者の意図などを解釈することが必要である。さらに、そのテキストについて、内容、形式や表現、信頼性や客観性、引用や数値の正確性、論理的な思考の確かさなどを理解・評価したり、自分の知識や経験と関連付けて建設的に批判したりするような読み(クリティカル・リーディング)を充実することも大切である。

特に、授業の中では、何のためにそのテキストを読むのか、読むことによってどういうことを目指すのかといった目的を明確にした指導が必要である。

すなわち、テキストを単に読むだけでなく、考える力と連動した形で読む力を高める取組を進めていくことが重要である。

② テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること

読解に当たっては、単に読んで理解するだけでなく、テキストを利用して自分の考えを書くことが求められる。テキストの内容を要約・紹介したり、再構成したり、自分の知識や経験と関連付け意味付けたり、自分の意見を書いたり、論じさせたりするなどの機会を設けることが重要である。

特に「自由記述(論述)」に不慣れな生徒には、授業のまとめのときに、自分の考えを簡潔に書かせるなど日常的な授業の工夫が必要である。そして、こうした活動を踏まえて、自分の考えを A4 一枚程度にまとめて表現するなどの活動を重視する必要がある。

すなわち、一方でテキストを読んで理解することによって得られた知識について、実生活や行動と関連付けて書く力を高めるとともに、他方で書いたものをさらに深めることを通じて読む力を高めることが期待される。このように、考える力を中核として、読む力、書く力を総合的に高めていくプロセスを確立することが重要である。

③ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること。

読むことについては、朝の読書の推進を含め、読書活動を更に推進することが求められる。その際、文学的文章だけでなく、新聞や科学雑誌などを含め、幅広い範疇の読み

物に親しめるよう、ガイダンスを充実することが重要である。

授業の中で、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実することも求められる。その際、自分の経験や心情を叙述するだけでなく、目的や条件を明確にして自分なりの考えを述べたり、論理的・説明的な文章に対する自分なりの意見を書いたりするなどの機会を意図的に作っていくことも大切である。

また、家庭や地域に対して、読書や読み聞かせ、自分の思いや考えを話したり、書いたりする取組の大切さなどについて周知していくことも求められる。

2 読解力を高める指導例

1の「指導の改善の方向」を踏まえ、指導のねらいをア(ア)～ウ(イ)まで7つに分類する。その上で、教科国語を中心としつつ、各教科や総合的な学習の時間における指導例を示す。

(1) 指導のねらい

ア テキストを理解・評価しながら読む力を高めること

(ア) 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

自らの目的に応じてテキストの意味や構成を理解したり、表現の細部が全体においてどのような役割を果たしているのかなど、筆者の表現意図を解釈したりする力を高める必要がある。そのためには、小学校低学年の段階から何のためにそのテキストを読むのか、読むことによってどういうことを目指すのかといった明確な目的を設定し、その解決のためにテキストを読む活動に慣れさせることが重要となる。

具体的には、「(国語)筆者がなぜこういう書き方をしたのかを考える」【指導例2】、「(社会)2つの社員募集広告のうちどちらが最近のものかを答える」【指導例3】、「(数学)与えられた情報の関係を読み取り、目的に応じて判断する」【指導例4】など、表現に着目させる指導を展開することが考えられる。

(イ) 評価しながら読む能力の育成

与えられたテキストについて、主張の信頼性や客観性、科学的な知識や情報との対応、引用や数値の正確性、論理的な思考の確かさ、目的や表現様式に応じた表現法の妥当性など、様々な幅広い観点から評価しながら読む能力を育成することも大切である。従来は、本文を絶対視して指導することが多く、テキストの内容や表現を吟味・検討したり、その妥当性や客観性、信頼性などを評価したり、自分の知識や経験と結び付けて建設的に批判したりすることは少なかった。今後は、このような批判的な読み(クリティカル・リーディング)も重視する必要がある。

文章等を十分に吟味、評価しながら読む能力の育成については、学習指導要領にも「様々な文章を比較して読む」という言語活動例が示されているなど、その視点は含まれている。しかし、これまで必ずしも十分取り組まれてこなかった点であり、今後は重視していく必要がある。加えて、メディア・リテラシー(メディアが形作る『現実』を批判的(クリティカル)に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力)にかかわる指導も必要となってくると思われる。

具体的には、「(国語)自分の考えを明確に伝えるための文章の組み立ての工夫を考え

る」【指導例 6】、「(国語)説明的な文章を読んで根拠の適否や筋道の妥当性を検討する」
【指導例 7】「(総合的な学習の時間)一つのテーマについて異なる立場から情報を集めて
議論する」【指導例 11】などの学習指導が考えられる。

(ウ) 課題に即応した読む能力の育成

課題に即応することのできる読みの能力の育成も大切である。例えば、短時間で分析的な読みを行い、相手を明確に意識し相手に訴えかける表現や発表を行う能力である。一つの単元(教材)が終了しても、単に活動をしただけで、どのような能力を習得したのかを学習者が明確に自覚できないようでは、課題に即応した読みを行っていくことはできない。

そこで、「(国語)ブックトークの原稿を書くために読む」【指導例 12】、「(社会)歴史の変化を理解するために絵画資料を読む」【指導例 17】、「(美術)ポスターを作るために、主張の根拠となる情報を読む」【指導例 18】など、課題や目的に応じた読みのために、既に身に付けた知識や技能を自覚して使いこなす学習指導を構築することも大切である。

イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること

(ア) テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

生徒の多くは、自らの考えや感想を自由に記述することはできても、テキストの内容を課題や条件に応じて関連付けて表現することは不得意である。そのため、テキストで述べられている事柄を相互に関連付けて解釈したり、それらを総合して自分の考えや生活経験と結び付けて考えをまとめ、表現したりする能力を育成することが大切となる。

具体的には、「(総合的な学習の時間)複数の調査結果を組み合わせて説明の文章を書く」【指導例 20】、「(保健体育)悩み相談の事例テキストを読み、アドバイスについて話し合っ

(イ) 日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

取り出した知識や情報を、自らの目的に沿った日常的・実用的な言語活動に生かすことによって、より明確にかつ必要な範囲で関連する事項を抽出したり意味付けたりすることが可能となる。そこで、ただ単に、テキストの内容や構成を読み取る指導で終わるのではなく、読んだ結果を生かした表現活動を十分取り入れることが大切となる。それによって、必要かつ重要な本質的なことと、枝葉末節的なこととを区別する能力も育成することもできる。

また、解釈には、本文の内容相互を関連付け意味付ける能力と、筆者やそのテキストの背景となる現実や文化と関連付け意味付ける能力が必要である。このような言語経験によって、筆者の立場に立った読みの展開も可能となるはずであり、深い解釈が行われるようになることが期待できる。

具体的には、「(国語)毎日の学級日誌の形式を工夫し、簡潔に書く」【指導例 25】、「(総合的な学習の時間)体験的な学習の成果を、様々な表現方法を使ってまとめる」【指導例 28】などの指導が考えられる。

ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること

(ア) 多様なテキストに対応した読む能力の育成

読むことについては、読書活動の一層の推進、読むためのテキストについては、文学的な文章に偏るのではなく、新聞や雑誌記事なども含め、説明的・論説的な文章をはじめとした幅広い範疇の読み物を対象とすることが求められる。また、そのためのガイダンスの充実も重要である。学習用に整えられすぎたテキストや、同じような形式のテキストのみを取り上げるのではなく、パンフレットや図表なども含めた多様なテキストとの出会いを大切にすることが必要である。いろいろな図を読む能力や図を解釈する能力は、学校教育全体、さらには、日常生活、社会生活を送る上での重要な能力の一つであり、その育成も大切である。

しかし、多様なテキストをただ読むだけでは自覚的な読みの能力にはならない。指導目標や学習課題を明確にして「様々な表現様式の特徴をつかむために読む。」、「同じ作者の他の作品を読む。」、「同じシリーズの本を読む。」、「論理性の高い難しい文章に挑戦したり、優れた表現に触れたりするために読む。」などの工夫が大切である。また「(社会)図の表現と現実に生起する諸現象との関係について考える」【指導例 34】、「(技術・家庭 技術分野)電化製品のカタログや説明書から、自分が必要とする情報を得る」【指導例 36】などの活動も有効であると考えられる。

(イ) 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

読むことには、楽しんだり、心を豊かにしたりする情緒的な側面もあり、何らかの表現によって伝える必要もない場合があるが、時によっては、読んで感じたことを意見や主張としてまとめたり、一定時間内や期間内に報告をしたり、紹介や推薦、宣伝をしたりすることもある。そのような場面においては、読んだことと関連付けて自分の感じたことや考えたことを簡潔に分かりやすく表現する能力が大切となる。

このような場面での読む能力は、書く能力や、話す・聞く能力の育成とも系統的に関連付けていく必要がある。例えば説明的文章を読む能力と、説明文を書く能力、他の人の前で説明をする能力の3者は、いわば説明力として国語科のみならず、各教科等や総合的な学習の時間等でも意識的に取り上げる必要がある。

また、授業の中で、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実していきたい。その際、自分の経験や心情を叙述するだけでなく、目的や条件を明確にして自分なりの考えを述べたり、論理的・説明的な文章に対する自分なりの意見を書いたりするなどの機会を意図的に作っていくことも大切である。

具体的には、「(理科)実験を行っていて気付いたことを記録する」【指導例 39】、「(音楽)楽器の音色や奏法を鑑賞し、感想を記述する」【指導例 44】などという、学習過程で得た考えや思いをまとめて、自分の言葉で表現する言語活動を取り入れる指導を展開することが考えられる。

学力向上拠点形成事業・文部科学省委嘱「わかる授業実践のための教員の教科指導向上プログラム」研究会（国語）読解力向上プログラムに係わる「読解力向上のための指導事例集」作成委員会

1 委員長

高木 展郎 横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センター

2 「わかる授業研究会」推進委員（6名）

高木 展郎：横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センター

林 正直：横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センター

永池 啓子：横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センター

佐藤 裕之：横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センター

岩間 正則：横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校

高橋 励：横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校

3 「読解力向上のための指導事例集」作成委員（38名）

		執筆項目	
今村 高治	京都府京都市立衣笠中学校	中1 ア(イ) /	中3 ア(ウ)
遠藤 広樹	横浜市立横浜商業高等学校	高1 ウ(ア) /	高2 ウ(イ)
栗本 郁夫	群馬大学教育学部附属中学校	中3 ア(イ) /	中3 イ(イ)
古賀 勝利	佐賀大学文化教育学部附属中学校		
小嶋 丈典	神奈川県藤沢市立片瀬中学校	中3 イ(イ)	
杉本 直美	川崎市立犬蔵中学校	中2 イ(イ) /	中3 イ(ア)
鈴木 彰	横浜市立大綱小学校	小6 ウ(ア) /	小6 ウ(イ)
関谷 育雄	神奈川県平塚市立金目中学校	中2 ウ(イ)	
高松 洋司	北海道立札幌西高等学校	高1・2 ア(ア) /	高1・2 ア(イ)
竹下 恭子	横浜市立中川西中学校	中1 ア(ウ) /	中3 ウ(イ)
田沼 良宣	埼玉県本庄市立本庄東中学校	2 イ(ア) /	2 ウ(ア)
永池 啓子	横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センター	小3 ウ(ア)	
中村 純子	川崎市立宮前平中学校	中1 ウ(ア) /	中2 ア(イ)
中村 弘志	静岡県総合教育センター	小6 ア(イ)	
新垣 英一	川崎市立下布田小学校	小6 イ(ア) /	小4 イ(イ)
西村 礼子	東京都立水元高等学校	高1 ア(ウ)	
松岡 豊	神奈川県立市が尾高等学校	高1 イ(ア) /	高3 イ(イ)
水谷 尚人	筑波大学附属中学校	中2 イ(ア)	
安富 江理	横浜市立岩崎小学校	小3 ア(ア) /	小5 ア(イ)
弓場 順枝	福岡県北九州市立南丘小学校	小3 ア(ウ)	小6 イ(ア)
渡部 光昭	広島県竹原市立忠海中学校	中3 ア(ア)	
朝比奈 忍	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中1 ア(ア)	
五十嵐 俊也	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中3 イ(ア)	
岩間 正則	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中2 ウ(イ)	
大谷 一	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中2 ア(イ)	
黒尾 敏	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中2 ア(ア)	中3 ア(ウ)
末岡 洋一	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中3 ウ(ア)	
杉浦 千恵	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中3 イ(ア)	
杉山 利行	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中2 ウ(イ)	
高橋 励	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中1 ア(ア)	
田中 修二	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中3 ア(ア)	
田中 保樹	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中1 ウ(イ)	
西岡 正江	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中2 ア(イ)	
平間 貴志	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中1 ウ(イ)	
本田 清	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中1 ウ(ア)	
三浦 匡	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中3 ウ(ア)	
三藤あさみ	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中2 イ(ア)	
鷺田 千夏	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	中2・3 ア(ア)	

学力向上拠点形成事業
「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」

平成18年3月31日

発行者 学力向上拠点形成事業・文部科学省委嘱「わかる授業実現のための
教員の教科指導力向上プログラム」研究会（国語）読解力向上プログラ
ムに係る「読解力向上のための指導事例集」作成委員会

代表者 横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
高木 展郎

印刷所 横浜大気堂
〒231-0016
横浜市中区真砂町4-40
Tel.045-641-4161